明治三十二年三月二十六日發兌

女鑑

第百七十七號

東京國光社

女鑑第百七拾七號

目録

大坂伏見屋の女



繪事は素より後にす

繪事は素より後にす。之れは、論語にある句にて、孔子が云はれたる言なり。意は、繪畫の事は素功より後にす。まづ粉地を以て質として、後に五采を施すを謂へるにて、素の畫きざま拙きに、如何に五采を施し、采飾すとも何かはせむ。まづ筆をうつくしくもはたかせれきて後に赤、紫、胡粉の繪の具を塗りつくりてこそ素の美、いよいよかゞやきわたるなれ。素拙き畫に、花の具、鳥の具塗りたて、一旦は心なき人をれどろかせ、まばゆがらすとも、心ある人には棄てられん。心なきものとて、見馴るゝに從ひ、見ざめして、はてはあきはつるやうになるべし。物萬事しかり。糸絹布、素の質の順良なるを撰び、しかる後に好みの色を染めてこそ又一入の美をそふらめ。品質のあしきものに采色をのみ撰びてなすとも、傍目に見る時は見れども

をこうするならめ。たとへ彩色は少しはれとるとも、素の美中々にあらはるゝ事あらん。人もまたさやうにて、まづうの心をうつくしくなし、而して後に禮を備へむ、其徳ます〳〵高く、いや仰がれぬべし。しかるは、女子は兎角外見をのみ取りつくろひ、素志を後にして禮を先きにするが多し。これ、やがては、禮を失ひ、形を損ずるものとなりぬべし。女子は和を尊ぶ。先づうの心に和を求めば、外に及ばさむとせざるも、おのづからに和らぎぬべし。内に和を求めず、險惡にして、只面をのみ、にこやかに、和らぎぶりす。人一旦はやさしき人、やはらかなる女子と思へど、交り深うなるまゝに、素の心の愛なくも、うらめしくもなりまさるは、猫のやさしき貌して、心にすさまじき毒氣をもつが如し。又心に信なくして、外人に交りて信ぶり、涙さへこぼして人を誘ふ、人もまた泣きよろこび、親しむ。されど、心に信をこめず、切ならずは、中々に拙く、遠ざかるやうなりぬべし。外おでろかに、禮義ぶり、人に遭ふ慇懃げに敬愛のさまをようほふ、一度は誠に其人の尊くも、ゆゝしうも、はた優にもなつかしくも思はれむ。されど、まこと敬愛の意なくは、いつかは、

其人のいやしく、いまはしく思はるゝに至るなり。玉はみがきていよ〳〵光りをます。きせ玉はこすりて、やう〳〵あらき質をあらはす。金のめつき用ゐるに從ひてはげ。刺繡、裏を見てきたなきを知る。其質を順良ならしめずして、たゞ見る目をかざり、外をのみてらふ。やがてはきせ玉、金めつき、金まき繪、ぬひものゝ如く、きたなきうら、あらき質のいつかは見すかされて、中々にいやしき、けがらはしきものとせられなん。故に、誠の美人、誠の善人とよばれむとには、まづ其心を飾るべし。心善ならずして、外を良母にてらひ、淑女に擬す。その描き事は、かのがす糸織の、一時は光りかゞやきて、眞の糸織の如く見ゆとも、洗ひざらさるゝまゝに、光も艶もなき、賤しき色を見するが如し。あはれ孃たちよ、繪事は素より後、禮義、よそほひは後にして、まづ其の心を信ならしめ、こすりても、削りても、そぎても、質はいよ〳〵純、いよ〳〵美、洗はるれば、洗はるゝまゝ、うつくしく輝やかん事こそ偏にのぞまほしけれ。



論説

女子敎育不振の眞因（地）

大息子來稿

吾人は、前回に於て、物質的文明の妖雲は、顯著なる傷害を女子敎育に送るものなることを明言せり。これ豈獨り方今の女子のみと言はむや、坤輿の氣運は、恰も物質崇拜の山頂に踏舞せるものなり。

明治維新の群豪は、少なくも自家が懷抱せる包括的氣象の下に物質文明を統理せむことを努力せるものに似たり、奈何せむ、後來簇出の兒輩は一として豚犬ならざるは無く時に或は乃父の繼紹を以て志すもの無きに非りしと雖も、その膽氣才力、遙に之に及ばす、一敗再改の後は、閒焉として又聲たにも無し。あゝ今に於て之を云ふも亦何の補かあらむ。想ふに、如何なる時代の國民にても、膽少に、力微に、その胸底些の包括的氣象を存せざるものは、偉大宏壯の新現象に接するや、殆と方に狂亂自廢の境に沈落するは必至の勢也、吾日本のみとは謂はず、所謂十九世紀の大勢は、物質的文化の偉大宏壯に逢

遺したる怯者懦者の心理的反影を以て過了せられなんとす、吾邦現下の状勢の如きは其特に甚しきものなり、若夫戊辰、丁丑、甲午の政變的病毒は僅々三十年間に前後の流毒を見、その度ことに、國民は所謂「志だらなき」疾病を女子教育に贈與したるものにして、這般の前因後因は派を成し、勢を合せ、地盤の最傾斜せる女子教育に向て悉く流注せり。

吾人は所謂物質的文明の半文錢に價せざるべき時運の招來せむことを知ると同時に、物質的文明の益旺盛ならむことを希ふものなり。前者は吾人の彼岸なり、後者は吾人の順路也、世の嘖々たる、順路の眩暉に失心し、文明の退化背進を招きたるは實事なり、看よ、かれは、腐肉に粉し、腐肉に媚び、腐肉相抱き、腐肉相爭ひ、道義も知らず、信念もなく、文明的人間の眞趣味を解するものは蕩然として地を拂ふに至れるを、是豈人道の退背にあらずして何ぞ。

所謂物質的文化は、眞個の物質を知るものにあらず、吾人を以て之を評斷せしめむ、今の物質文明は虚妄の文明也、東洋古聖哲の言に至寶なるもの一あり。いはく、不誠無物と、唯夫れ誠なり、こゝを以て物あり、百僞千詐を以て、心光を遮斷するものに於て、何の物質のあらむ。その認めて物質となすは空中の樓閣のみ、何哲理的に評斷せむ、人間

思想の根底とせる今の所謂觀念(印象)はこれ虚妄の本體なり、眞人に印象なし、その印象ありといふは虚妄也。蓋心光の第一者は物質の第二者を作るものなり、この第二者の作られつゝある場合に於ては、第一者はその全體を第二者に捧くるものなり。觀念とは第一第二兩者以外の虚妄にして、今の教育學、心理學、論理學の基本は皆悉くこの虚妄を發點とする一大虚妄學なり、されは悟性理性を崇重すれども、これらの基點は皆虚妄の上に立つにあらずや。方今の物質的文明は又唯この虚妄學の一大現影のみ。あゝ吾人は物質を尊重するものなり。然りと雖も、幻影虚聲を認めて實在となし、この地盤に全身を据ゑんとは到底思念することを能はざる也。

吾人は虚妄即實在なることを知ると雖も、今日はこれをいふと雖も寸効なけれは說かず。但だ、世の嘖々たる虚妄の海中に埋沒し、荒淫し、長逝して歸らざるに到らむとす。吾人の物質的文化を罪するは豈他意あらむや。又唯至誠なく、氣象なく、剛健に缺けるを歎ずるのみ。女子教育に從ふものは深く意を此に致さゝるべからず。

所謂物質的文明の妖雲は、予の言ふべき所也、之を言は長し、予の語るべき所也、之を言は醜し、請ふ去て左の數節を讀め。

嘗て女の手に劍を執れる者もありき。[illegible]へるかな。弓を執れる者もありき。[illegible]へるかな。今は只男の肩に懸くるか、頭に懸くるかよりは[illegible]なき

者となりぬ、[illegible]める可也。
女子の貞節は、貧の盗に同じ、境遇の強ふるに因る。
涙以外に何物を有せず、女の涙は技術也。
人の妻を遇するを見るに之を粧飾品となすものは、座敷に設き、日用具となすものは厨所に置き、共に動産なり、妻みづからかれも亦身の置場摺揚居る賤婦さより上の感念を有するものなし。若之ありとせば、そは粧飾品の風通を貰はれざるを恨み、日用品の調子を嘆らるゝを怖るゝのみ、このとき始めて夫あるを悦ゆるにすぎず。
前なる夫に告ぐ、涙は今公に後なる夫の膝に凭りて笑ふ也、後なる夫につぐ涙は今窃かに前なる夫の墓に詣でゝ泣く也、いづれぞ心の誠なる
いづれも形のいつはり也。

吾人は又更らに左の數流を一讀せむを要す、

劍太刀。諸刃の上に。ゆきふれて。しせかもしなむ。戀つゝあらずは。
うちなげき。はなをそひつる。劍太刀。身に副ふ妹が思ひけらしも。
劍太刀。身に副ふ妹を。さりみがれ。音をぞなきつる。なみにあらなくに。
劍太刀。諸刃の利に。あしふれて。しせかもしなむ。きみによりては。

前者は、明治方今の思想にして、後者は萬葉時代の思想なり、吾人は後者を以て敢て道德的詩歌として引照せるにはあらず、男女相聞の戀愛的歌意中にも尚且つ剛健俊邁の氣象を發洩せしを多とせざるを得ざれば也。あゝ吾人の祖先は嘗て這般の氣象に豐富なりしなり。

女徳のしをり（二十三）

三輪田眞佐子

第四不潔の地に入るべからず

契仲の國詩に（吹く風にいつ誘はれて蓮葉の露はにごれる水となりけん）とあり。實に清濁はその所によりて定まることもあれど、人の身を修むるにも、亦つねに清境に就き、濁界を去らんと勤とむべし。故に君子は立つべきところに立ち、居るべきところに居るなり。決して不潔の地に入らざるべし。若し一朝不潔の境を踏まんか、自然これに感染して、心界の清淨を汚穢ならしむる憂なしとせず。女子は心を神聖ならしむべきのみならず、身體にも汚辱を蒙るべからず。されど、恒に自ら戒めて不潔の地に近くなかれ。古人の、男女席を同うせずと教へけるも、男女の禮を正うして、以て不潔の嫌疑を受けしめじとの意義なりけん。今日は人事頻繁なれど、如何なる必要あらんも、絶えて席を同うせざるべしと、文字のまゝなる實行は望むべからざるも、男女は、正當なる理由なくして席を同うすべからざるものと知るべし。おのれは、公會は更なり、燕居に於ても、男女が禮を失ひて亂座する如きことあらで、これを不潔の地と認むべし。況して道ならぬ動作あらで、不潔を行ものと定めん。公父文伯の母は、齢七十なりけるも、なほ、孫の康子が面謁を求めけるとき、つねに中門の内に立ちて帨を門に設け、康子は門外に拜し、そを隔てゝ相共に語りけりとかや。そは彼の國

の禮風なり。今や我が國の人は、日に月に禮を守ることの衰ふめり。されど、我が男女の禮は、彼の國の如くなすに及ばずとも、適當なる禮を盡さゞるべからず。然らざれば、君子國の體面を失ふに至るべし。

更に廣く言はゞ、寡婦の寓居すべからざるところ、婦人の行くべからざるところ、處女の居るべからざるところなど、悉く顧慮せざれば、不潔の恐なしとせず。その他下品なる飮食店に入るべからず。卑俗なる演藝場に入るべからず。若しこれを愼まざれば、その心は、假に日月と光を爭はんばかり皓々の德は具はらんも、などか汶々の嫌なかるべき。古人の、非禮視る勿れ、非禮言ふ勿れ、非禮聽く勿れ、非禮行ふ勿れ。と戒めけるは、朝な夕な能く守るべきものぞかし。

或人曰く、內に顧みて疚ましきことなくば、などかその地を擇ぶに足らん。と。されど、眞に心の純白なるものは、必ず不潔の地へ入るに忍びざるべし。寧ろ、物の固有名詞だに、不吉なるものは好まざるばかりなるべし。彼の盜泉の水を汲まずといひ、朝歌の里に入らずといふ類は、古人は修德を工夫せしものと知るべし。

亦たとひ不潔の地といふに足らざるも、苟も惡評の種となるべきところを避くることそ良けれ。應龍も潢汗に潛まんか、魚鼈これを嫐るべし。蓋しそを嫐るは、魚鼈の不明に由る

ならんも、敢て必要なきに、自ら他より蔑辱を求むべきにあらず。彼の梨下の冠、瓜田の履といふごときは、畢竟浮名を受くる恐あるを戒めけんものなり。

人に貴きところは、その氣品の高潔なるにあり。わきて女子にして氣品なからんか、衣食のため貞操を破り、黄金のため信義を曲げ、遂に不潔の境界に出沒して怪まざるに至るべし。あはれ、されど、眞に女德を全うせんとならば、山はくづれ、海はあせなん世なりとも、不潔の地に入るべからず。常磐御前が、老母の幸を願ひ、三子の運をおもひて、敵なる淨海入道のため操を棄てしは、たとひ本意なき事情より出でしものにて、その眞情あはれむべしといへども、不潔の地に入りし點より見れば、口惜しきわざなりけり。

思ひ出るまゝ

前田美子

世の中のひらけゆくと共に、人の心の華やかになりもてゆきて、奇しきを喜び、新しきを好むは、大方のならひながら、わきていみじくおぼゆるは、今の都少女になむありける。裁縫の業は更なり、よろづの女の道にいたり足はぬ身をもて、徒に家産の裕なるに任せて、衣服髮飾など、何くれの調度に綺羅をつくし、只容姿のすぐれて、美しからむ

ことをのみ裝へるこそ、いとも片腹いたき極なれ。殊にあたら良家の子女と生れながらいやしき歌ひ女などの風俗などを見倣ひて、倣りがなるぞうたてきや。やむごとなきあたりの御ことは、おのれらのうかゞひ知らむよしなけれど、大方いにしへの女は、手づから髮を結びわげしとこそきけ。さるを今の世はさたすきたる女さへ、ひとり結べるはいと稀なり、ましてよそはひをのみ旨とせる若き姫たちをや。貴きかうべを、無智の髮結女に任せて、そがさがなき口より、はしたなき人の品さだめをきゝて、笑ひ興ずることそ心得ね。こはまたく己がつとめを忘れて、みだりにうつりゆく世の風潮にのみ走れるにて、嘆かはしき限にはあれど、それにもまして見にくきは、御國ぶりの優にやさしきを蔑しみて、よきとわしきとのわいだめもなう、外國のならはしになづめるになむ、そが束ねたる髮、短かき裳に、つぎ〳〵しからぬまで、長き羽織を被りたるさへ、なつかしからず覺ゆるに、人もなげに身をそらせて、足音あらくあゆめるなど、女らしきさまのいづくにかある。質にやかゝる口にこそ、同女全權とかやいみしきことを論らはれ。ものまなびの道の何くれと進みもてゆく大御代にありて、ひとり女の學問は、なくもがなとの誹りを招くこと、我知りがほにふるまへる、是らの輩の罪にあらずして何ぞや。古より女子と小人とはやしなひがたしとかや、心すべきことにこそ、あはれ前なるは華美

に流れ、後なるは貞淑の徳をかぎたり。誰かこの惡しきならはしをやぶりて、天晴れ女の道をまたうするらむとおもへど。うたゝ甲斐なく、學びあさき身の口惜しうなむ。



史談

大坂伏見屋の女

鹽井ふく子

離る事ならぬ谷の朽木も、山櫻、もとの心を開けむなつかしく、薄く濃く紅の少女がさせる玉かざしも、うむらの花とさけど憎くぞ思はれぬ。むかし柳澤里恭先生、有馬に湯あみせられし時、日も黄昏はてゝ、湯桁の中に耳目鼻のなき痩法師のひとりほと／＼と入りたるを見、流石の先生もいたくおどろき、物かげより伺ふうちに、さう／＼に湯あみして出で行くさま、さながら畫に畫ける骸骨のごとく、鼻もなければ、耳もなく、何處よりもの喰ふや、唇とおぼしき所も見えず、如何に物の見えけるにや、まぶちとおぼゆる所もなく、只穴の三つ四つあきたるが如くに見えてあやしともあやし。流石の里恭先生もおそろしう狐狸どものわれをたぶらかすにやと身もよだちければ、その夜は其まゝ湯をもあびずして、たゞ冷汗をあびて歸り、やがては伏せられぬ。夢か現か、まぼろしか、夜邊見けるあやしき影消えもうせやらず、夜明けて、そのことを家あるじに語りけるに、それこそ折りふしは來り給ふ人なれ。彼の女尼は、大坂の唐物商人、伏見屋てふ家の娘にて、あはれ其むかしは、蓮のひとみ、おのつから玉にこり、丹花の口もと、こぼるゝ笑みも匂ふかと覺え、大澤野邊の柳ならねど、誰れも、その下にはよらまほしくおもひ、高砂の尾上の花ならねど誰れも手折らま

はしう、もろ人のねがてにしけるやすみ子なりけるを、神の結びの誰にかとつぎける後、ひとりありし姑のやみてれはせしかど、隣家に火を失ひ、はやく姑が病牀にせまりしかど、助け出さん人もなけれど、かの尼飛び入りて抱へ出しまゐらせし、あはれその人なりけり。その時あゝは燒けたゞれ、さしも難波津の名高かりける花のかむばせも、一夕にさりうせて、すゞしかりし目は豆つぶばかりに明きて物見ね、口は五分程なれど食ふに事たり、今年ははや七十路ばかり、かくは生田の川のいきてはれはすなりと云へるに、いとあり難き人と里恭先生のいたく感ぜられ、後も折りふしは人に語られ、又ふみにもつゞりれき給へり。げに此の尼、かく深山がくれの朽木とはなれど、心はしき島のあはれその花のゆかり、今もなほ朝日のかげに匂ふ心地せられてなも。

山田歌子

加藤雄吉

山田歌子は山城淀の人、吉田某の女にして、薩摩藩士山田清安の後妻なり。始め近衛家に仕へたりき。清安藩邸の御留守居として京都にありける程、娶りて妻とはなしつるなり、夫清安は通稱市郎左衛門、秋園、又作樂園と號し、夙くより香川景樹に從ひて歌學をものし、又皇國の典故にも精しかりけれど、檳榔考、御即位式考、高千穗考、設樂考、和泉式部事蹟考等の著述ありき。嘉永二年藩內黨與の變あり、清安等は同志をかたらひて藩內の俗論を排し、專ら奸臣を除かんが爲めに大に企畫するところありしも、央にして事顯れ、十二月三日に首謀の者五人と齊く自殺を命せられぬ。歌子は清安自殺の折り、同じ道にと嘆きつれど、人に障られて果たさゞりけれど、淀の故鄕に歸らんとせしかども許されず、藩內にて再・良緣を求むべき由諭されて、種子島家に預けられぬ。こは歌子を藩外に出さ

た秘事の洩れん事を恐れ、名を設けて種子島に謫しつるなり、種子島家の大夫人松壽院殿深く歌子が上を憐まれて、家臣柳田休介をして歌子の養子とならしめ、又休介の姉まつをして歌子を介抱せしめられき。清安が自殺しける頃の歌に、

ことわりを知らぬ涙のあめなれど
　わが身にはるゝ時なかりけり

又種子島に渡りし時の歌に、

ゆめにだにまだ知らざし荒磯の
　波をまくらのもとに聞くかな

などの詠あり、こを見ても幽愁常に胸に絶えざりけん事は知らるゝに、其人に接するや、いつも和氣藹然たりしとぞ。ある年横目の役にて彼島に下りししれもの、歌子を挑みしに、三日が程は愧ぢて物も得食はざりきとぞ。歌子が父も亦心得ありし人にやありけん、歌子が清安に從ひて薩摩に下らんとせし時、贈りける句に

あつき日や身より心のおきところ

とあり。歌子心に留めて暫くも忘れざりしと云ふ、其詠歌は『小門汐干』などに多く出でたり。さて種子島に居ること十一年にして萬延元年八月十七日に歿りぬ、年五十一、島内西之表村なる雲の城と云ふ處に葬られぬ。あはれ歌子の淑質貞亮は婦女の鑑とこそいふべけれ



茶の湯

茶禮初學（續）

孤峯庵祿仙齊不羨

關　葦雄

茶の湯　薄茶の段

次に蓋置柄杓を持廻り蓋置を翻の跡の方に置柄杓を翻にかけ（但此時は柄杓の合を翻の外の方へはづし柄をかけ置べし）次に左手にて茶碗を取右手を添扱て翻の向の方へ假置し右手にて薄茶器を持廻り客方の正面に向一旦膝の前に置帛紗捌して薄茶器を拭ひ蓋を取て中をも改め（但裡内餘り散亂して見苦場合には帛紗にて拭ひて出すべし）次に帛紗を腰に挾み一と膝左の方へ向則ち點前の位置に成て左の手にて茶碗に掛有之茶杓を取打返し右手にて節の下を持薄茶器と並列して出すべし次に又水指の正面に戻り柄杓を取右の手に持蓋置を下に持籠み左手にて翻を持立て左足より引左りに廻り引入し、上客は此時膝行して出で茶杓薄茶器を一旦小取をして又膝退し元の座に戻りて我膝の前に薄茶入茶杓と並べ置べし次に亭主は又出て茶碗を持入べし次に水指も持入べし一旦勝手口を締切べし次に客方にては上客次賓へ御先へと云て兩手を疊に突薄茶入の形容を見るべし次に手に取左の掌上に置て右手にて蓋を取其儘疊に置裡内をも熟觀すべし又蓋を持裏の方をも見るべし棗ならば宗匠の花押にても有や否哉を認べし次に蓋をさせて下に置今一應見て次の客へ廻すべし次に茶杓を見るべし是は第一着に手に取て先裏の方を見るべし表は竹の皮目にて天然の物なれば別に見處なし裏は竹の肉の方にて大に削方の巧拙貝先の曲方手際其人の技量も炳然ものなれば能々注意して見るべし鑑識家は削方を見て忽に流々其何たるを判然するものなり扨段々如斯して末客に廻りたらば末座は見終り左手に茶杓を持右手に薄茶入を持立て上客の人に渡すべし上客是を受取進み出で亭主の出したる處に出すべし亭主は水屋にて大概返したる時分を見計ひ罷出て一禮す此時上客は好御道具にて面白し茶杓は何人に有之哉腐眼には迚も難及鑑定偏に伺たしと云べし亭主は十分に是を何々と説明すべし縦令ば棗の花押書付は如心齋了々齋吸江齋又は一燈或は認得

齋と云樣に何流にても其流儀々々の人流儀換りたる人にても遣ひたらむ其儘を云てよし茶杓も又同じ客方は誠に結搆成御品也と叮嚀に其好所を賞翫の挨拶をなすべし亭主は謙遜して道具數も無之故ヶ樣の物を入御覽一向御慰にも不相成と云て二品を持入べし則水屋に至り棚に是を措て再出て扨は皆々樣御退屈に可有之先々と云て其時々花の頃は花の噂口切頃ならむ紅葉枯野の事初風爐ならむ郭公鳴音など優美高尚雅致ある咄をなすべし又は茶の話婦女子らしき事共又は懷石の仕立方汁の味噌は三州其解方は如し斯向付は鰤の亂切合酢の拵方等互に交換主義を以て談合せむ御婦人は實際上稗益大ならん　(以下次號)

正　誤

前號家政欄十九頁下段八行目　頭上後座は頭上復座仝
二十頁上段十行目　番頭は半東の誤植

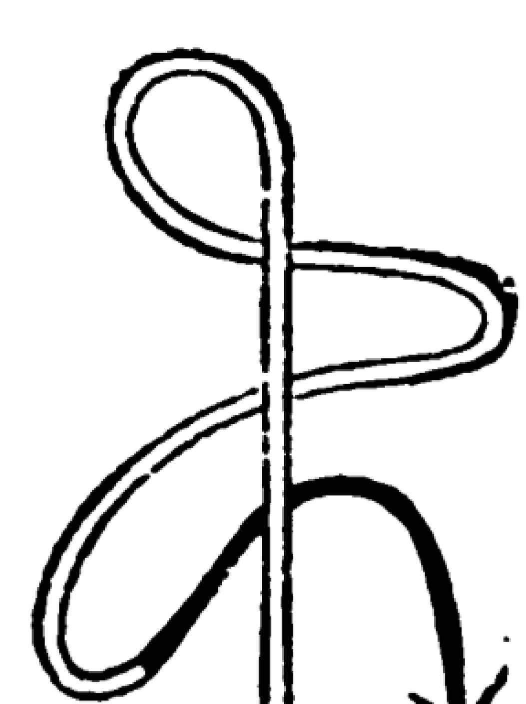
新撰結物百種

百草庵一無

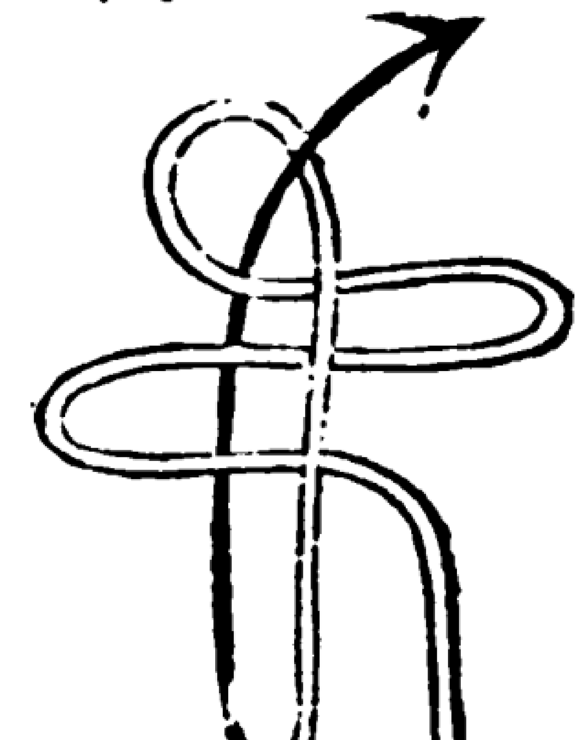
草の蜻蛉結29

古は采配の紐に用ゐたり。當世は上卷結の代りに用ゐてよし。

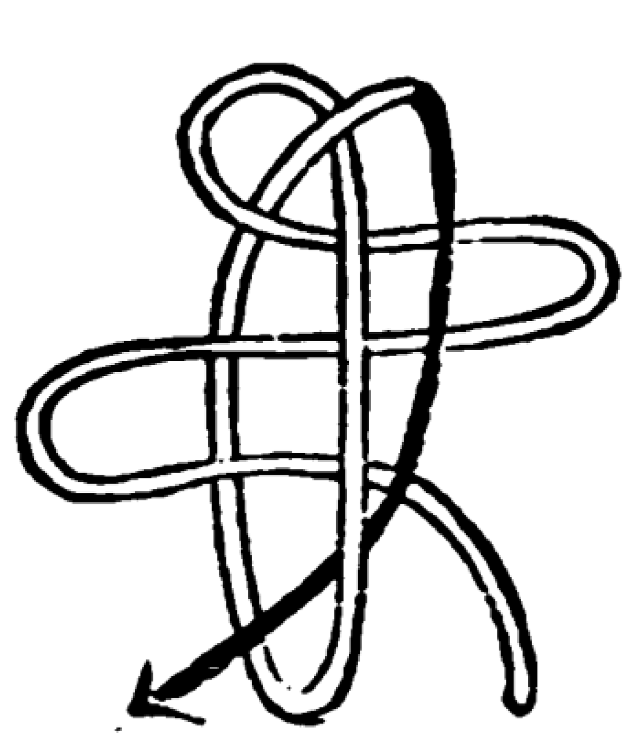
第一圖



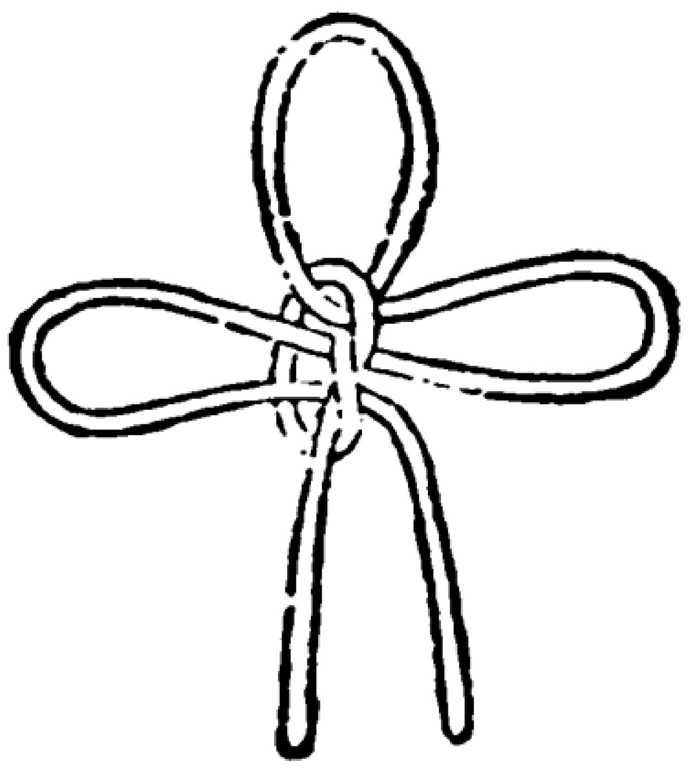
第二圖



第三圖



第四圖



結び上り

たちぬひ

辨慶袋（百六）

辨慶の七ツ道具は襟にはさむを得べけれど、人他へ旅立たんなどして、細々せしものを持ち行くに、風呂敷にては解け、或は結ひそこね忘れなどして便りわろし此の辨慶ふくろはさやうの時のこまぐくしき道具七ツも八ツも入りて誠に便りよけれど、之も春におくれぬ先きにと急ぎ此處にかゝげぬ。

切は天鵞、羅紗等を多く用ゆれど、唐縮緬、金巾、よろしく好むもの、又は、わり切なぞはぎて仕立るも經濟なり。裏は木綿、金巾をよしとす。また底の切は、同りに同じからずともよし。

まづ厚紙を○かやうの形に切り之に底の切を裏表合せて裁ち、まはりを糸にて閉ぢおき周圍の切を□かやうに少しく細長き形のものを二枚裏もそれと同じに裁ち、兩横に裏表ともはぎ合せ、表も裏も、切の表を中にして合せその表裏の間に底の切をはさみ、引かへし、頂上を折りて絎けとぢ紐をつけるべし。

又兩横をぬひたる次に、頂上を裏表合せ縫ひ、底を表切にぬひつけ、裏にてくけるもよし、大小は人々の心に任すべし。形もまた心々によりて少しは異るともくるしからず。

だいどころ

此頃の惣菜料理

蜊の杉田煮

大あさりを鹽むきにして、貝より出る汁を別の器にとり置、たまごを割、よく攪交せ、これと剝身を小鍋に入て焙り、ざつと煮て前の貝の汁へ食鹽少量を加へ、又

ざつと煮て口には千切柚子を用ひ、器へ盛りて、蓋の糸底へ、梅花一二輪を置て景樣とす、淡白にて味美なり。

蛤南蠻煮

大蛤の剝身を、醬油むかりにて、七色唐からしを能程に投れ、ヒタ〳〵に煮あげ、是に鰹節を粉にしたると、麻の實を焙りたるをふりかけて用ゆ。

梅田卷

めそこ鰻を裂き、新牛房杉箸より、少しふとき位ののを三寸程にきり、四五本つかねゆき、前の鰻をまき、串にさし、附燒とし、粉山椒、又胡椒をかけて用ゆ。

鮟鱇のいり鳥もどき

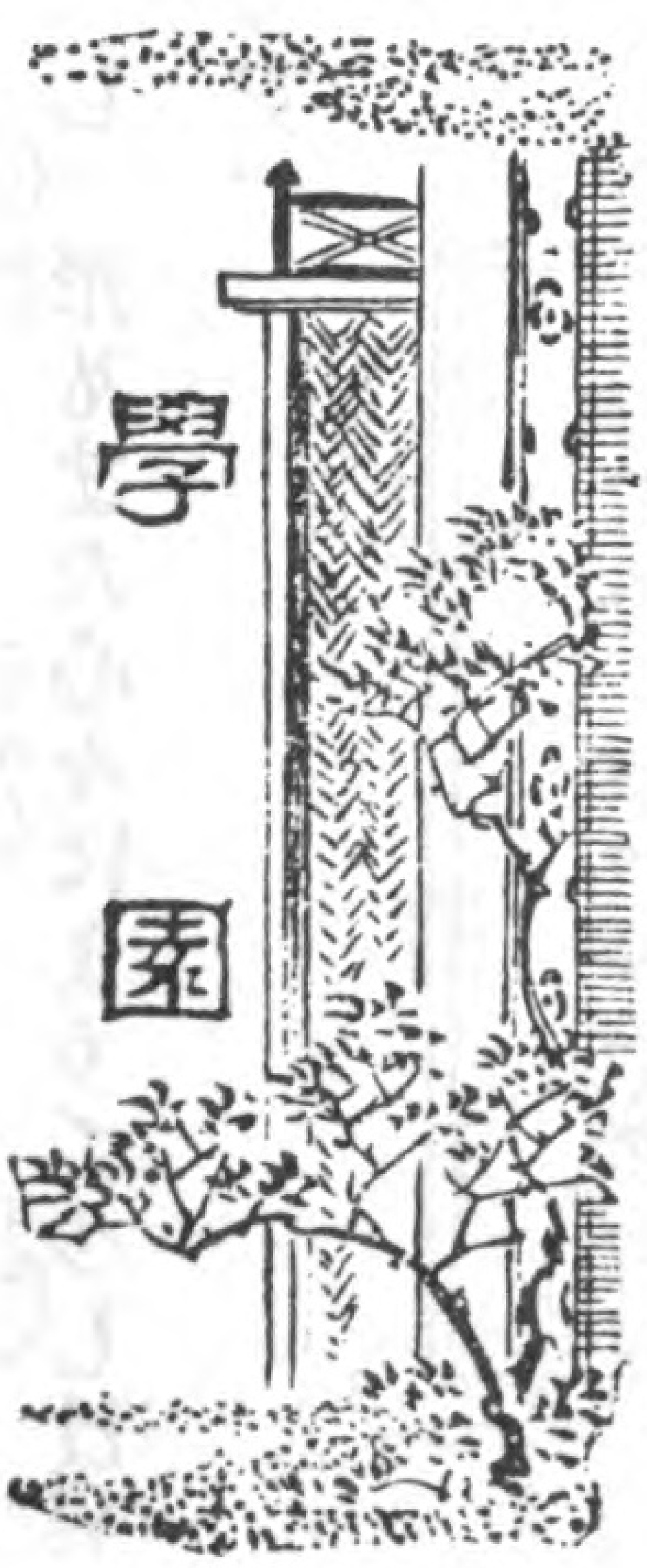
鮟鱇を小切身をして、蒟蒻のちぎりたるものを加へ、胡麻油にて焙り、味淋と醬油にて味をつけ、山椒の粉をふりかけ用ゆ。

半片雲丹田樂

半片を幅五分、丈一寸位にきり、湯煮して青竹の小串にさし、雲丹を、酒又は醬油にとき、塗りて用ゆ。

鯛ちり

鯛の肉能程にきり、骰子豆腐と盛合せ、別に卸生姜、燒海苔等、小皿に盛、又橙酢柚子酢の中、一品と醬油を別々に置、小鍋に、だし昆布を敷、湯を投れ、座敷にて火鉢にかけ、調と豆腐と、火の透りたる頃掬ひ出し、酢醬油、やくみにて食す。



秀歌集（四十二）

鹽井正男

○

み山木のその梢とも見えざりし
櫻は花にあらはれにけり

○之は、源三位頼政卿が深山のさくらをよみけるなり。何は別にむづかしき所もなし。

○一首の意は深山の木のみな同じ木に見えて、何れが花の梢とも見えざりしが、櫻は花にあらはれ、花が咲いてはじめて櫻と云ふことがあらはれ出でたるはいとの意にて、花咲かぬ間は深山の櫻の何とも見えざりしが、春にあへばおのづからその花の咲きて、櫻と云ふことがあらはれるはいと見る人もなき深山にひとり花をながめて感慨したる歌なり。

○

敷しまの大和心を人とはゞ
朝日ににほふ山ざくらかな

○此歌は本居宣長が櫻を讀みける歌なり。敷島の大和にかゝる枕言葉なり。大和心。大和魂とも云ひて日本の人の心を云ひたるなり。○人とはゞ。人が聞かむとの意なり○朝日に匂ふ。匂ふは香るのみにあらず、色をも匂ふと云へり。此處の匂ふは、色がうつくしく光りかゞやく事を云へるなり○山さくらかな、山櫻ではあるはいと歎息の意をこめたり。

○一首の意は、しきしまの大和の人を大和だましいとていみじきものとするが、其大和魂は、どんなものであると人が問ふならむ朝日に輝くあの山さくらのやうな、何とも云へぬ潔き心のものであるはいとの意にて、櫻は日本より外にはなく、其咲き匂ふさまより、いさぎよく散るさま、日本の人の潔よき心に通ひをれむかくよめるにて、おのづから其人の大和心も見えて めでたき歌の中にも尤めて度歌なり。

○

こよひまたさえかへるなりぬむ玉の
やみの何處にふゆやのこれる

○之は、小川の汐干の春の部の歌にて、寧行が餘寒をよめるなり○今宵またさえかへるなり。今夜はまたさえかへりさむくあるよとの意なり○ぬむ玉の。

やみにかゝる枕言葉なり○やみは眞暗き夜を云ふ○冬や殘れる、冬が殘れるやと疑ひ想像するなり。

○一首の意は、今夜またさえかへりて大層寒くあるよ此のぬば玉のあやめもわかない暗やみの何處に冬が殘つてをるのであらふぞやとの意にて、もう冬がいつてしまつたとおもふに此のやうに寒きのは、ぬば玉の何處に冬がかくれてとゞまつてをりしならんとの意にて、いと才ある歌なり。

○

更にまたふるさと遠き心地して
　こゝろ細くも霞む月かな

○之も同じ集の同じ部にありて、實枝が旅宿の春の月をよめる歌なり○更にまた、さらぬだに、古郷をぞなれ遠く此處に旅宿するに、なほ更にまたとの意なり。ふる里遠き。古郷、已れが住みをりし所が遠くなるとの意なり○霞む月かなかすみて、はれぬ月ではあるはいとの意なり。

○一首の意は、さらでも、住み馴れし古里をはなれて、遠く旅宿をすれば心細くもかなしくも思はるゝを、今宵の月のおぼろに霞みて、空を隔つれば、更に一層古郷が遠く思はれて、一入心細くも思はする春の夜の月ではあるはいとの意にて、旅宿に古郷を思ひ、ながむる空のはれ　あはれの歌なり。

源氏物語講義（廿三）

下田義天類講義
山川鵜一筆記

暮れまどふ心のやみも、堪へがたき片端をだに、はるるばかりに聞えまほしう侍るを、わたくしにも心のどかに罷出たまへ、年頃嬉しくおもだたしき序にのみ、立ち寄り給ひしものを、かゝる御消息にて見奉る、かへすがへすつれなき命にも侍るかな。生れし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言今はとなるまで、唯この

人の宮仕の本意、とげさせ奉れ。吾亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづをるなど、かへすがへす諫めおかれしかど、捗々しう後見思ふ人なきまじらひは、なかなかなるべき事と思ひ給へながら、唯かの遺言を違へじとばかりに、出し侍りしを、身にあまるまでの御志の、萬に辱きに、人げなき恥をかくしつゝ、交らひ給ふめりつるを、人のそねみ深くつもり、安からぬこと多くなりそひ侍るに、よこざまなるやうにて、終にかくなり侍りぬれど、かへりてはつらくなむ、かしこき御志を思う給へられ侍る。これも理なき心のやみになむと、いひもやらずむせかへり給ふほどに、夜も更けぬ。

以下又母北の方の詞なり。前段に「夜更け侍りぬへしとて急ぐ」とありて、命婦は玆に暇を告げたるさまなるに、猶北の方の詞をつゝくるは能く人情の微を穿ちたる書きざまなり。さるは暗にくれて伏沈みたまへる北の方が、今宵懇切なる命婦の心に接して、さながら吾が女に遇へるがごとき感をおこして、放ちもやらず。猶引とゞめてくだ〳〵しくかきくどかむとすれど、命婦もさすがに歸參を急ぎながらも、別をも告げかねて、思はず話に實が入り行きて、知らず識らず時を過すさまなり。此の間の情況は、常に能く女性の上に見ることとなれどなり。

○暮れまどふ心のやみも

くれまどふとは、北の方の我が女を先立てゝ、其の悲歎の餘りに、目も暮れ心もまどひをるよしなり。心の暗とは前に引きたる「人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」といふ歌の意によりてかける詞なり。言ひ換ふれど、此の暮れまどふ心の暗もにて、北の方一身の上の愁傷をもと云へる義なり。

○たへがたき片端をだに　とは、北の方の愁傷の堪へむとしても堪へられぬ所、即ちくれまどふ心の暗のかたはしをなりとも、せめて晴すことの出來得る

ほとといふ意なり。

○聞えまほしう侍るを、わたくしにもまかンでたまへ申上げたけれどもといふ意なり。うちとけて在りし昔のこと共をも同情深き命婦に語りたしとなり。をといふ助辭は、前回にいひし如く、上句の義を否定する助辭なり。聞えまほしく侍れど、今宵は表立ちたる御勅使なれど、例のやうに打解けて物語ることも協はぬ故に、此の次には改めて御勅使などゝいふ御用を持たずに、私の身、即一私人の資格にてゆるゆる打くつろぎて御出掛なされとなり。

○とし頃うれしくおもたゝしきついでにのみたちよりたまひしものを云々　從來は常に嬉しく、歴としたるついでにむかり立寄りなされて、吾が里亭におきても、一家悦びて御迎へ申上け奉つたるものを、今はそれに引換へて、吾か老の身には思ひも寄らぬ斯様なる忌々しき御消息の御使にて、御目に懸かり奉る　ことは、返す返すもつれなき吾か命にもありますることよと、太息をつきて申すなり。○かへすがへすは上の詞にも「今までとまり侍るがいとうきを」と言ひ「命長さのいとつらう思う給へ侍るに云云」といひしごとく、二度も三度も同意味の詞を繰反すが故に返すがへすとは云へるなり。

これまでは北の方自身の事をいひ、これより又更に一段と深入りして、終に御息所の身の上話に及ぶなり。

○生れし時より思ふ心ありし人にて云々

吾が女御息所は、生立のはじみの時より異つた瑞相のありし人にて、後來必頼を掛くるに足る女ならむと思ひし故に、兩親共に其の心して教育もし、又其の向の準備もしました。夫故に亡くなられたる吾が夫の大納言も、臨終の際まで、一途に、この娘の宮仕のかねての宿願を必成就せしめよ。たとひ吾が身は是を限りに瞑目したりとて、言ひがひなく失望するなど、度々うち反し打反し言ひつゞけておか

れましたによりてと言ふ意なり。○思ふ心ありし人とは思ふ子細のありし人といふ義なり。當時の風習として、夢の告などいふことを深く信したる時なれど、思ふ子細のありし人といふは、或は大納言の夢見などに、この女は、後必　天皇にかしづきて、限なき寵幸を蒙るべき身なれど、疎に思ふべからずなどいふことのありしなるべし。これに似たる例は、明石の巻にあり。彼の明石上の源氏君に冊きたりしも、その始に父の明石入道に、住吉明神より夢の告ありしよしなり。○今はとなるまで今はかぎりなりといふ時に至るまでの意なり。即臨終の時までといふ意なり。○くづをるゝは頽れ折るゝ匆れなり。○諫めは勇まする義なり。こゝははげます由なり。諫言するをいさむといふも善き方にいさましむる義よりいふなり。過ち矯むることのやうに思ふは本義を失へるなり。○とげさせ奉れといふ敬語を用ゐたるは、吾が子なれども、陛下の御息所となれゝど、かく申すなり。

評釈に評して曰く、上に父の大納言は亡くなりてと何げなき物語の中に、更衣の種姓を語り置き、茲に至りて其の委しき由を著したり。其はた殊には解かずして、母君の語の中に挿みたる、いともいとも愛でたしと言へり。げに／＼然り。尋常の筆ならむには、斯る所は必先、父は何の職に在りて何といふものなりとか、母は誰々の女にて如何なるものなりとか。殊更に書き出すが常なり。一句たりとも苟もせざる源語中には、斯る剩慢なる筆法は最謹みたる所なり。

○はか／＼しう後見思ふ人なきまじらひは云々

みなし子にて、はきとした後見し世話をしてくるゝ人もなき御奉公は、なまなか苦勞の種なるべしとは存しましたけれどもの意なり。なか／＼なることとはとあることとはの間にはなりといふ詞を含めて省きたるものなり。

○唯かの遺言をたがへじとばかりに出し侍りしを一方には氣遣はしく思ふ事もありしかど、たゞ今はの際まで父の案じつゞけたることとなれば、何卒その遺言を空しくすましといふことばッかりに、御奉公に出しましたのにといふ意なり。

偖て丶に一言せむに、當時縉紳家にて、女子を持てる家は、皆これを女御更衣に奉りて、これによりて天下の政權を握り、以ちて其の家門を興さむとしたること、積年の慣習のごとくなれりしなり。これは彼の外戚の威權を弄して天下を左右したる藤氏累代の餘風を享けたる中世の宿弊なり。此の宿弊中に在りし按察大納言も、女子を得て將來の望を起したると同時に、その女子の性來につきても、後榮を憑むべき感得を得たるが故に、深く此の御息所の幼時に望を囑したるなり。然るに、大納言は不幸にして、未其の時運の廻り來むをも見ず。中道に卒去したり。故に御息所は之か保護者たり後援者たるものを失へり。女子を奉りて家門を興さむとしたる大納言家は、今は、興亡地を異にして、殆其の女子すら、其の地位を得べきやの疑さへ生するに至れり。元來はかくしう後見思ふ人なきまじらひの、其の望を達し得たるものはこれまで殆遂にあることなし。今其の適例として見るべきは、遠くは文德天皇の朝、近くは當代後一條天皇の朝に在り。文德天皇の朝に在りては、一方に左京太夫紀名虎の女靜子の御出に惟喬親王御在しまし、一方に太政大臣藤原良房の女明子の御出に惟仁親王御在しましたり。惟喬親王は一の皇子に御在しましたりしかど、帝の御心にも儲位を授けたまふべく定めたまひきと雖、紀氏の家門の藤氏に及ばさること遠くして、其の後援あまりにはかなかしからざりしを以ちて、終に藤氏に制せらる丶に至れることあり。後一條天皇の御世には、一方に中關白黨あれど、又一方には御堂關白派あり。此には皇后定子の御腹に敦康親王御在しまし、彼には中宮

彰子の御腹に敦成親王御在します。敦康親王の敦成親王に於けるは、恰、惟喬親王の惟仁親王に於けると同じかりき。中關白道隆は實に御堂關白道長の兄なりきと雖、不幸なる中關白黨は中道にして其の後援なる道隆を失ひたるが故に、當時政權相爭に兄弟を擇ばざりし餘弊は、終に御堂關白派をして勢を增さしむるに至り、皇位の繼承も全く其の手に落つるに至れり。前後斯のごとき例に乏しからざるが故に、今按察大納言の北の方は、はか〲しう後見思ふ人なきまじらひの、決して朝廷に其の地歩を占むること能はず。寧毛を吹き疵を求むるごとき後難さへ次ぎて來るべきことを豫想せしなり。故にこの言あり。畢竟北の方の後難を豫想しつゝ、之を行ひたるは、夫大納言の遺言を空しくせじとの貞實心あるに依れるなり。

○身にあまるまでの御志の萬に辱なきに云々

吾等風情の身には餘りあるほどの御思召を蒙り、萬事につけて辱なき御寵愛を蒙りし故に、その辱なき御袖の下に隱れて、人がましくもあらぬ世間の耻を隱しながら御奉公してありしやうなりしになり。是は母北の方の卑下したる詞なり。

○人のそねみ深くつもり安からぬ事おほくなりそひ侍るに云々

然るに、世の中は思ふに任せずして、辱なき陛下の御思召は却りて仇となりて、これが爲に御息所は人々のえせみ、そねみを招き、そのえせみ、そねみが深く身にふり積りて、木にも草にも心おかるゝやうなる不安心のことのみ多くなり副ひまするにつけて、讒言其の間に入りて、御息所の心が如何にも姦佞なるものゝやうに取りなされ、終にはこれが病の因となりて斯く果敢なき最後を遂げたるゆゑに、今となりては勿体ないことながら、却りて其の辱なかりし陛下の御思召を强面く心憂きことに思ひますとなり。此の所の文意は、かしこき御志をかへりては辛うなむ思うたまへられ侍ると句

を差換へて心得べし。○人のそねみ深くつもり安からぬこと多くなりそひ侍る　とは、上にありし「參うのぼりたまうるあまりうちしきるをり〳〵は内階渡殿こゝかしこの道に怪しきわざをしつゝ御送迎の人の衣の裾たへがたうまさなきことどもあり」とありしことなどをさしていへるなり。○よこさまなるやうにて　この所を古註には解きあやまりて、よこさまを横死の意に解きて、陛下の寵遇の過ぎたるゆゑに、人々のそねみのつもりて失せたれど横死のやうに思はるといふ意なりといへり。されど、こゝは横死の意にあらず。このよこさまなるやうにては、御息所の性情がよこさまなるやうにての意なり。御息所は忠義一圖に奉公を勵むといへども、寵遇の過ぎたる故に、邪推を廻す人々は、御息所が好言令色をこととして、君の御心をとらかす姦佞邪智の怖しき婦人の如くに讒間するなり。故に御息所の心がいかにも姦佞のやうに取りなされてといふ意なり。

○これもわりなき心のやみになむといひもやらず、むせかへり給ふ程に夜も更けぬ、　陛下の御寵愛を却りて辛く思ふなど、畏多き妄言を申すも、これも道理心に暗き心のやみによりて然るなりとなり。北の方は斯樣に言ひも終らぬ内に、早涙は胸に迫りきて咽び反つて御座つた。斯樣にしてをる内に時刻は用捨なく經過して、今は全く夜も深更に及んだとなり。○やみになむの下には、侍るといふ詞を含めて省きたるなり。評釋に夜も更けぬといふ一句を評して、此の語めでたし。上に夜ふけ侍りぬへしとて急くといひて、さて母君長き物語をいひ終られしゆゑに、まさしく夜のふけたるよしを茲に挿みて著しおくなり。かくて直に命婦の歸ることをいはずして、尙其のあへしらへの答を誌されたる、いと〳〵いみじき筆といふべしといへり。以上を一括して申せば、子を思ふ暗にくれまどふ心を、せめて其の堪へがたき心の片端ばかりなりとも晴らすことの出來得るは

ど御話し申上げたきを、今宵は畏き勅諚を持たせ給ひての御越しゆゑに、長く引留め參らせむも恐多き業なれど、此の次にはかやうなる御勅使の身でなく、一私人の資格で心易くゆる〳〵御出下され。從來は嬉しく歴とした次手にむかり御立寄くだされたるのに、今はかゝる不吉なる御消息の御使者にて御目にかゝるは返す返すもつれなき吾が命にもあることかな。元來御息所は、生れた時より世に異りたる瑞相を有てりし人にて、亡父の大納言も、臨終の時まで唯この人の宮仕の本意を必ず遂げさせ奉れよ。吾が身死したりとて、言ひがひなく自棄の心を起すこと勿れと、くりかへして申殘しておかれました故、抄々しき後見世話する人のなき御奉公は、なまなか苦勞の種なるべしとは思ひながら、唯かの亡父の遺言を違へまいといふことばかりにて、出しましたのに、吾等の身には餘るほどの御思召の、萬事につけて辱なき爲に、御息所は、人がましくもあらぬ世間の耻を隱しながら御奉公して居た樣子なりしに、御寵愛のあまり甚しかりし故、人々の嫉妬が深く身に積りて、安からぬことの多くなり副ひ侍るにつけ、如何にも御息所の性情が姦邪なるやうに取成されて、其の苦勞が病氣の元となり、かく果敢なくなりましたれど、辱なき御思召を、却りて辛く思ひます。斯樣に思ふのも、畢竟道理を忘れたる無差別の親心によりて然るなりと御察し下されたしと、いひも果てずに咽び入つて御座つたほどに、夜は全く更けたり。と言ふ意なり。

漢文學講義（十五）

大林弘一郎

十、池野無名傳

安積信

信字は思順、通稱は祐助といへり。艮齋、又、見山櫻などの號あり。奧州二本松の人にして、初、

佐藤一齋に從ひて學び、又、林述齋の門に入り、後、遂に大家となり。文名一時に轟けり。嘗て、二本松藩校の教授となり、遂に、召されて、昌平黌の教官となれり。安政六年（萬延元年）歿す。年七十。

その著書數多き中にも、明賢言行略、艮齋文畧などは、世人のよく知れる所なり。

こゝに掲げたる傳は、大雅が事實を洩さず擧げたるにはあらねど、大雅の人物を目前に見るか如くかき現したる所、この文の妙ある所なり。讀者、よく、心して見るべし。

池無名。字貸成。號九霞山樵。京師人。天下所稱爲大雅堂者也。襟度蕭散。土木形骸。毀得得喪。都付度外。有嵇叔夜。阮仲容之風矣。善畫工書。五歲時。見千呆禪師。作擘窠字。頗怪偉。禪師大奇之曰。是麒麟兒也。後當名於海內矣。長而刻意於晉唐古帖。結體飄逸。自成一家書法。則出入于梅道人。倪雲林之間。專以氣韻爲主。山水尤精絕。世人爭購之。雖零絹尺楮。莫不寶重。」

この段は、大雅堂が氣風のなみ／＼ならぬこと、及その書畫を學びて、妙を得たることを述べたるなり。

池無名とは、池野と姓をかくべきを一字の姓の如く支那風にかきたるなり。無名は名なり。字を貸成といひ、九霞山樵と號せり。（その書には、霞樵と略して書けるもあり。）京都の人にて、天下の人の大雅堂と呼びなしゝ所なり。無名生れつきて、至りて、氣樂なるたちにて、度量ひろく、胸の中、極めてさはやかに、かゝはる所なし。襟度は胸中といふ意にて、蕭散は、蕭條、蕭瑟、蕭然などの蕭と同じくしづかに意散は、放つ、ほしいまゝにして檢束なき意、なれど、しづかにして、ほしいまゝなる樣をいひあらはす語なり。さて、形骸、即、形體を土木の如く見

なして、少しも、外聞名聞などに頓着せず、世の人の毀りをも譽るをも、又、その身の上にかゝる得喪、即、得失などをも、すべて度外に置きて、さらに、心にかけず。その心の淡泊なること、むかし支那の晉の頃の嵆康、(字は叔夜)、阮籍(字は仲容)などいへる人々の風に似かよひたり。この人々は、所謂、竹林の七賢とかぞへたる中の人なり。

無名は、書にも畫にも妙を得たり。五歳の時に、千杲禪師に見えたりしに、その時、擘窠の字即、大字を作りしに、頗、怪しきまで、すぐれて出來たれど、怪偉といへるなり。禪師は之を見て、大に奇なりとしていふやう、「こは麒麟兒ともいふべき珍らしき兒なり。ゆくさき海内に名ある人となりぬべし。」とはめたり。(麒麟は仁獸にて、聖人の代に非ずむ出でずなど、支那にてはいひ傳へしなり、今も動物中に麒麟といへるものあれど、果して、この獸なるか否かは知るべからず。)

年長じて、書法を深く研究し、晉又は唐の時代の古帖に意を注ぎて、勉強したり。(王義之(晉)顏眞卿(唐)などの諸人の書の帖となりたるもの多し。)結體とは、書をかく時の、字のくみたて方をいふなり。飄逸とは、飄然として風の捕ふべからざる如く、自由自在に奔逸して秀ですぐれたる所あるをいふなり。而して、自然に一家の風をなせり。書法は、元人の梅道人(吳鎭の號なり)。倪雲林(名は瓚)などの書風を習ひ、出入とは取捨參考の意なり。而して、その畫は、専、氣韻を備ふるを主意とせり。(古來、畫家は、氣運生動して一種の風韻あることを主要とせり。)かくて、山水の畫は尤も精絶にして妙を極めたりし故、世人爭ふて之を購ひ、珍重して、零絹の小なるものも、尺楮の小なるものも、寶とし重んぜざるはなく、畫名の高きこと、今日に至りて少も變ることなし。大雅が書畫の奇妙なることは、その眞筆を一見して後に知るべし。

この一段にて、既に、大雅が人と爲りし有様と書畫の世俗を脱したることを述べたり。

先レ是狩野氏、土佐氏。世爲二畫苑冠冕一。其衣鉢皆出二于宋元諸名家一。而授受寖失二其眞一。卒變爲二衆俗一。有志之士。欲下矯二其弊一而復上レ之。而力不レ足二以振レ之。獨大雅才最高。志最篤。動必取二法於華人一。而時人不二之信一也。嘗齎二畫扇一。遊二尾濃諸州一。一握不レ售。困而歸。抵二瀬田橋一。悉投二之水中一。益發憤苦勵。遂闖二入古人堂奧一。聲華隆隆然震二海内一。而言レ畫者。莫レ不下以二宋元諸家一爲中準據上矣。

この一段には、大雅が一代の畫風を一變せしことをのべたり。

この頃より以前にありては、我が國の畫風は、狩野家土佐家の二派、最、勢力をしめて、世々、畫苑、即、畫家中の冠冕（首領の意）となれり。狩野正信元信は、足利の末に出で一派をなし、代々この風を傳へたり。土佐派は、鎌倉の頃、基光より始り、經隆に至り土佐と稱し世々名手ありて、一家をなしたり。二派ともにその本は、宋元の諸名家を學びしものにて名家も多く出でけれど、その末になるに隨ひ、次第に傳授の上に於いて、その眞を失ふこと多く、遂に變じて極めて粗俗なるものとなれり。衣鉢とは、佛家の語にて、傳統といふ意なり。衆俗とは、粗俗といふが如し。かゝれど、志あるものは、二家の畫風の弊を矯めて、その古に復せんとはかりしもあれど、その力の足らざるが多ければ、之を振ひ起すことかなはで、過ぐしけり。さるに、大雅は、才も人に秀でゝ高く、志も、いと篤くして、やゝもすれば畫法を支那人の中より取りて、心を苦しめしこと多ければ、その時の人々は、いまだ之を信ずるものもあらざりき。

かくて、自ら畫ける扇を携へて、尾張美濃の國々を遊歴せしが、一握も賣れざりき。一握は種の説もあ

れど、こゝにては、一つも、少しもの意なり。されど、路用にも困じ果て丶歸り來りしに、近江の瀬田の橋まで來りて、その扇を、悉く水の中に投げ入れて歸り、その後なほ、一層、發憤して勉勵苦心せしかど、遂に、古人の妙處の奥までをも究め盡したり。これより、大雅の聲譽は、隆々としてさかりに起り海内に震ひわたりて、かくれなき名手とぞなりにける。されど、當時畫のことをいふもの、皆、宋元の諸名家を以て標準となさぬものなきに至れりといふ。この段にて、大雅がなみ〳〵ならぬ苦心をなし、遂に一時を驚かす程の結果を得たることをあらはしたり。

性好奇山水。又富濟勝之具。千里孤往。經月忘返。俯攀複嶺。飛履上下。不窮其高峻不止。最愛富士山。屢登之。每異其路。披榛莽縈孤兎之蹊。究人迹之所未到。遇神人焉。神姿奇偉。非煙火中人。蓋仙云。先後所作富士山圖。凡一百幀。横側正偏。備極其妙。爲天下絶筆。蓋大雅爲人。纖毫塵垢。不以滑其懐。而濟之以江山之助。故奇致坌涌。雲煙逶腕。氣超於五采之外。而韻發乎六法之中。有不可以勉強到者。至若富士圖。則特妙卓詭。石破天驚。實曠古所未有也。」

この一段は、大雅が遊渉を好み、ことに名山に遊ぶを好みて富士山に上り、その圖を作れることをのべたり。

大雅、山水の奇景を好み、また、足も、頗すこやかなりき。濟勝の具とし、勝地をわたる具といふ意にて健脚をいふなり。千里の遠き道も、獨りゆきて一ケ月も二ケ月も返るを忘れて樂み歩き、山又山、嶺また嶺とかさなりたる深山にても木履を穿きたるままにて上り下りし、その高山の峻しき所を窮めずむ

止まず。また、いとも富士を愛でつゝたび〱登りしことあり。登りごとにその路をかへ、雜木の生ひ茂れる所を推し披きて、狐兎などの通へる小道をたどりて攀ぢ登り絶えて人足のなき所を究めしに、あやしき人に出逢ひたり。その容貌いかにも奇しく怪しきものにて、とても煙火中の人、即、火食をなせる人間のたぐゐにはあらずとなり。或は仙人ならんかといふ。かくたび〱登山して、先後作れる所の富士の圖は、百枚許も出來たり。諸方より富士を見たる圖なれど、横面、正面ともにその妙を極め盡したり。誠に天下に絶えて類なき名畫といふべし。大雅の人と、爲り、もとより、淡泊にて物になづまぬ性なれど、塵垢の如き俗情は、寸毫も、その胸懷を濁しゝことあらず。而して、江山の風景は自ら之を助け濟す所あるを以て、畫の趣の奇なる所益涌、即、あつまり涌き出し、雲煙腕をめぐりて生ずるが如き妙あり。その氣は逸して五色の采色の外にあふれ

その風韻は、畫法の所謂、氣運生動、骨力用筆、應レ物象レ形、隨類賦レ彩、經營置位、傳移摸寫、の六法の中より變化を極めて發動し來れるさま、もと自然に妙を得たるが如く、とても、勉強して到ることを得べきものに非ず。富士の圖の如きは、最も、その妙を得て、卓詭、即、卓出して他のものより異にすぐれ、大石の破裂して天地も驚動せんばかりの趣あり。實に、古來未だあらざる程の出來なり。この段にて、その畫の氣骨風韻あること、先代の人にもすぐれたるを表したるなり。

其行事。亦多出下人意表上者。嘗赴二浪華一。遺二書筆一。妻追躡授レ之。乃投拜以謝。不レ知二其爲一レ室。也。聞者絶倒。豪商索レ畫。許而不レ果。屢遣レ奴促レ之。竟不レ就。奴出レ門大罵。大雅走出陳謝。亟濡レ毫付レ之。毎レ欲レ購二石刻十三經一。縮二衣食一數年。得二錢百貫一。就二書賈一購レ焉。書賈牟二厭利一不レ與。大雅長吁而歸。會祇園祠有レ修二造之

事乃舉以助經費其奇異絕俗類如此。

この段には、その行事の奇異なること多きをのべたるなり。

大雅が平生の行には、實に人の意外に出づること多かりき。嘗て、浪華に用ありて出で立ちしに、書筆をとり忘れて出でけれど、その妻氣付きて、追ひかけ往き、追つきて之を渡しけるに、大雅は、己の妻とは心付かずして、しきりに、禮をのべ拜謝して去りきとぞ。之を聞きわへるもの、みな、をかしくて絕倒しけりといふ。投拜は拜禮を致すの意なり。室とは、內室、又は室家などの室にて妻のことなり。

又、ある時は、豪商より書の依賴をうけ、之を承諾したるまゝにて、出來ざりけるに、先方よりは、たびたびしもべを遣して催促しけれど、竟に就らざりしかど、しもべは、腹たゝしさに、門を出で大聲にてのゝしりければ、大雅、之をきゝて走り出でひたすら己の怠りし罪を謝し、直に筆を染めて書き終り、之を與へたりとぞ。

又、大雅は、毎に石刻の十三經とて、名有なる石摺の十三經の書帖を求めんとし、衣食の費用を節約して、數年を經けるに、錢百貫文程を積み得たり。因りて、本屋に往きて、之を購はんとせしに、本屋は餘分なる利益を貪り取らんとして、大雅の持てる金程にては、賣り與へざりければ、大雅は大に失望して立ち歸りぬ。(長吁は歎息なり。)さるに、その頃會祇園の祠の修繕ありしかど、大雅は、かばかりの金を持ちたりとて、求めんとする書を得ずば、何にかはせんと、悉、之を寄附して、神社の修繕費を助けたりきとぞ。その行の奇異なること世俗の人に似ざるは概、此の如くなりき。

この段を讀みて、大雅が胸中の、いかに淡泊なりしかを察すべきなり。かゝるしわざは、ことさらに作り裝ひてなし得べきものに非ず。誠に天性の然らしむる所といふべし。

妻玉瀾。閒澹不ㇾ飾。能配ニ夫之行一。亦善ㇾ書。毎ニ良辰美景一。斗酒相酬。大雅彈ㇾ琴。玉瀾皷ニ秦箏一。相和而歌。觀者幾作ニ晉宋間想一。安永丙申。以ㇾ病卒ニ于葛原草堂一。年五十有四。

この段には、その妻の事をものべ、夫妻ともに、風流の樂を同じうしけるをしるせり。

妻は玉瀾と號して、その性質しづかに、淡泊なる装して飾ることなく、能く夫の行にかなひ合せたり。夫の風を學びて、書を善くし、世に聞えし名手となれり。平生、良辰美景の時に逢ふごとに、夫と酒を酌みかはし、大雅は、琴を彈じて、樂めど、玉瀾も箏のことを彈じて歌ひ、互に樂みあへりき。之を觀るもの、支那の六朝時代なる、晉、又は宋の頃の世の人に遇ひし想をなせりといふ。この時代には、老莊の學風俗にして、磊落なる氣風の人多ければなり秦箏とは、秦の時箏を造りし故にいへるなり。筑紫琴のことなり。琴のことは、七絃にして、箏のことは、十三絃なり。

かくて、安永五年丙申の歳、病みて、葛原の草堂にみうせぬ。年は五十四なりき。

秋里湘夕が都名所圖會拾遺に「ちかきとし、池野秋平といふ風流の人ありけり。和歌は冷泉家の門に入りて、書を善くす。名は無名　字は貸成とつきて大雅堂といふ。今より十とせあまり一とせのむかしに、歿せられき。（中畧）貸成は、落の北西陣といふ所の産にて有りける中頃は二條のひんがし樋口の町にすみ、聖護院の邑にうつり、又知恩院の西なる袋町に廬を轉じ、遂に祇園の南草單居に終をとり、宿坊の光淨寺に葬らる。其の墓碑は、大典禪師の書き給ふをこゝに載す。」とありて、左の文をのせたり。附して、練習の用に供す。

故東山壽隱太雅池君墓（篆額は芙蓉の書なり）

池貸成歿矣。旣表墓焉。而未ㇾ有ㇾ銘也以爲ㇾ請。余嘗觀ニ貸成爲ㇾ人。蕭散。不ㇾ以ニ寵辱一繫ニ心。

物和。而不二苟合一。紆志外疎放。而內實修撿。與レ人交。謙損而不レ阿。簡二於禮法一。當レ往不レ往。當レ答不レ答。而顧二諸義一。未下嘗有上レ所レ失。恩而弗レ望。廉而不レ劌。其於二取予得失一。恬淡如也。平生行レ事。多出二於人之所一レ不レ意。於レ是有二時人之目焉。貸成生二平安一。幼而穎異。學レ文學レ書。無レ不レ能。而獨長二於繪事一。圖二山水一尤妙。好遊二名岳一。尤矯健。高峻幽奧。無レ不二反極一。即取以爲二毫端趣一。數登二富士一。而每異二其路一。因作二富士圖一白。各變二狀態一。皆其所二經覽一。古今畫工所レ未レ及也。安永丙申四月十三日。病卒二于葛原草堂一。距生享保癸卯五月四日一。得年五十有四。葬二于舟岡之南淨光寺先塋之側一。貸成名無名。始名勤。遠近皆以大雅堂稱之。妻玉瀾。姓山德。閨靖不レ飾。能配二夫之行一。亦能レ畫有レ名。無レ子。家絕。悲夫。世皆知二大雅之畫一。而不レ知二其行一。知二其行一。而不レ知二其心一。故爲敍二其大略一。如其世則存焉。不レ待レ論也。銘曰。若人胡不レ壽。若人無レ胡嗣。庶安レ子哉。淨光之也。

安永六年丁酉六月　　淡海竺常撰

韓天壽書

この碑の篆額をかけるは京都の高芙蓉にて、大雅の友人なり。書を善くし、鐵筆を巧にせり。その刻する所の印は世に重んぜらる。また、この碑文を書せしは、伊勢の韓天壽なり。これも書に名ありし人にて、大雅とは、殊に親しかりし人なり。さて、大雅の傳は、日本野史その他にも、和文もしくは、漢文にてしるせしものあれど、今また、參考且、練習の爲に、左に、菊池三溪の筆になれるものを掲げん。

池野無名　　菊池純

無名字貸成、號九霞山樵、通稱又次郎、又稱秋平、京師人、天下稱曰大雅堂、無名幼聰敏、年甫三歲、粗知字、五歲時見黃檗千呆禪師、作擘

箕字、頗瑰偉、禪師大奇之、曰、是麒麟兒也、後當名於海內矣、長而刻意晉唐古帖、自成一家、初就土佐光芳、學畫法、後私淑淸人伊孚九、受設色法於柳澤果恭、又如紀伊、問畫法於祇園南海、南海貽以舊所所儲沈無谷畫譜、曰、子學畫、嘗學文人學士畫、無名大喜、沈夕不釋手、愛慕之餘、自改其名稱無名、（或曰、南海所貽爲淸閣尺木畫譜、或曰、芥子園畫譜、未知孰是）於是技遂大進、嘗齋畫扇、遊尾濃諸州、一握不售、困而歸、抵瀨田橋、悉投之橋下、曰、謹、獻龍王、平生好漫游、又富濟勝之具、千里孤往、經月忘返最愛富士山、屢登之、每登殊其路、作富士山圖一百幀、橫側正偏、備極其妙、又登加之白山、越之立山、究人跡所未到因號曰三岳道人、將遊浪華、偶遺畫筆、其婦玉瀾追躡授之、乃投拜以謝、蓋不知其爲已婦也、玉瀾亦不交一語、相揖而去、豪商某索畫、諾而不果、屢遣家奴促之、竟不就、奴出門大罵、無名走出謝其罪、亟濡毫付之、每欲購石刻十三經、縮衣食數年、得錢百貫、就書買購焉、書賈牟利不與、無名長吁而歸、會祇園祠有土木之事、乃擧以助其經費、祠人請署其姓名以標榜、無名固辭弗聽、乃署玉瀾姓名、玉瀾名町子、德山氏、閒澹不飾、能配夫之行、亦善畫好倭歌、夫妻終日以琴酒自娛、釜甑生塵晏如也、一搢紳（冷泉黃門）聞無名夫妻之名、召而見之、皆以謂至玉瀾靚粧驚人目、至則荆釵裙、若田閒好女、未嘗覩粉華狀、衆歎其淸高、無名以是歲四月十三日、歿于葛原草堂（年五十四）玉瀾後夫九年歿、生一女嫁大阪書商某氏其嫁衣裝皆以楮紙製之云、

前課の正誤。　第百六十八號三十九頁上段十三行目

伯鸞は唐のとあるは、後漢の誤寫なり。

布美安波勢（三）

白松園主人寄

柳おほかるところ

二月

左　清　風

日いとよくはれて、そらのけしき、鳥の聲も、こゝちよげなるに、いざなはれて、打ちのぶる佐保の川原になんいきける。こはいにしへいかなる人のうゑおきけん、いともおほかる青柳の、めもはるぐ〵とみはたせて、霞のひまより、駒なべてみにくるあれど、れとめ子は、かづらにせんと手折りつゝ、打ちむれて行くにぎはひは、げにをさまる御世のはるとおふがぬ。人こそなかりけれ

右　勝　祝　之

霞のをちにも、しるくともらふかう、打ちけぶりたるかげの、やうやう〵さしのぼるほどに、みなかみ遠き山本は、大かた柳のつゝみにぞありける。さむかりの木立、みなもえはたりて、いとながきしなびのすゑは、水の上にもながれまりつゝ、こなたかなたむすぼゝれゆくに、おのづから河との水もぬるくなん。ともにへにみだれかゝれる糸すぢに、あかずつながるゝ心ちのせられて、おもほえず舟さしとゞめつ。

評判　左の文おもしろきに、末にいたりてわろし。右の文は、柳のおほかるさまを、よくかきえておもしろく、これもすこしのきずは見ゆれど、左よりはまされり。

左　保　世

梅のはこりかに咲くころは、櫻はやうぐ〵けしきだみはゝゑみて、とくおそく、ながめみじかきとて、何がしの、柳をめで、おほくうゑられしは、ことわりなり。花にいとふ雨にも、みどりのいろそめなす糸すぢに、名ごりの露つらぬきて、佐保姫のかざしの玉かとあやまたれ、風のまにまに〵うちなびくも、しなやかになまめかしきまゆの、池のかゞみにかげみゆるは、ねみだ

れがみともみなされて、いとをかしく、色香あることと木にかはりて、雨に、風に、あやなすは、いとながき春のながめになん。

右　勝　　重　豊

ひはだ屋の、けしうはあらぬに、大さうじにけんぞかりひらきて、せんざいには、柳のかぎり、わざとめきうゑたれど、そのこのもとは、橋柱などのやうにて、しだれたる糸のすゑは、かうらんにみだれかゝりたるけはひ、たゞ、をかしきをすかけたらんさまして、わらはにもあらぬやうたいなり。ふづくゑかなにぞのものに、よりゐたる人やあらん、なまめいたるきぬのすそ、ほのかにもてかくしたり。いみじうひきいりたる女の聲に、青柳口ずさめるを、かたはらにはべるわらはの、おけや鶯のとこゑくはへつゝ、はうしうつなど、いたうおよずけたり。花ぐはし櫻はあれど青柳の糸はちるてふすぢのなきかな、とかいまみのこなたに、ふとうたはるゝも、此糸にひかるゝ、例のついそう心にこそ。

評判　左の文ことゞもなし。右の文はめでたし、すこしのきずは、おもしろさにまぎれぬべく、かちとすべし。

三月

わらびをる女かたみひきさげてあり

左　　親　之

山路のかよひには、かたへつゝましからず、あそびに心をいれて、いやしからぬをとめども、しどけなう袖ふりはへ、かたみひきさげなど、打ちとけて、こなたかなたに、もえわたれるわらび、手すさびに折りいれつゝ、ざれありきたるさま、なまめかしう、らうたげなり。

右　勝　　尚　文

此頃の日のながきには、誦經もおこたるとはなけれど、たゆみがちなり、いたうくしにたれど、とのかたに立ちいで、櫻のまた咲きたるを、いたくなわびそなど、

ひとりごちつゝ、みありくかたはらの岩のほとりに、なまめける女の、ちひさきこもて、はしたなきやうにて立ちゐたるが、やよ〳〵とよびかけつゝ、おのれはけふ、此山本にわらびをりにきたりて、ともをりしに、はて〳〵は、物うくてあこがれありきつゝ、おもはえず、かくふかくきにけり。かへさの道、をしへ給へといふを、よく見れど、まだかしらおろさゞりし時、あひみたりしに似たり、女もいたううちおどろきながら、

おもひきやかゝる山路にまよひきてむかしににたる花をみむとは、としのびやかにいひたり。いよ〳〵おもひいでられて、かへしせんとするほどに、さと吹く風の音に、めさめたれど、つくゑのうへにねぶりゐたるなりけり。なほかゝるすぢわすれずやありけむ、佛もつまはぢきしたまふらむと、思ふもいとむねいたしや。

評判　左よりは、右の文いたくまさりて、いといとたくみに、おもしろく、上手のしわざとぞ見えたる。

左　持　重豊

はるのけしきの、ねびとゝのほりたる山みちのをのこは、さらなり、したもえわたるわらびをらむとて、女どもの、おとなも、わらはも、むれきて、こよなうなまめかしう、さうぞきたちたるに、さがしき山みちを、かたみ、おもげに、くるしみて、もてわづらふさまも、らうたげなり、つねは、ところせき身の、けふは、かやすくはしりありくめり。

右　清風

木のもと、岩のはざま、などに、さはらびのもえいづる、いはんかたなくおもしろし、をとめ子がうちむれあそぶ、そが中に、なみ〳〵ならぬをみなと見えて。よはひはいたとせには、いまみつふたつもたらざりけらし。うへのきぬないがしろにきなして、くれなゐの帶しどけなくひきゆへるきはまで、むねあらはに、はうそくなるもてなしは、いまめきたるになん。くちおほ

ひて、さやかにはみせねど、ひたいつき、まみ、あいぎやうづきをかしげなるを、いとほこりかに、わらびをりつゝ、かたみもたる、はなやかなる姿なりけり。あたりを吹きくる風さへ、いとなつかしうてかくなむ。

くれなゐのあか裳のすがたみてしより立ちさりがたしいもがあたりを

評判　此つがひ、左よりは、右の文ちからいれたる所見えたり。されどむねあらはに出したらむ、いやしげなる女に、心のとまるさまにいへるは、文ぬしの心のほども、さぞかりにてぞ、とおしはかられて、まされりとは、いひがたくなむ。





教梯抄（續）

夏二十七首

新撰六帖

はじめの夏　左京大夫　行家

春にのみこゝろかたひくあづさゆみ
おしてや夏の今日は來ぬらむ

月詣集四月

俊成卿家に人々十首歌よみ侍りけるに更衣をよめる　藤原敦仲

身になれし花のたもとをゝしむとても

ぬがではつべき衣かへかは。

新古今集夏

夏の始の歌とてよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成女

をりふしもうつればかへつ世の中の
人のこゝろの花ぞめのそで

家集

夏十五首歌の中に

權中納言定家卿

ほとゝぎすまつにこゝろのうつるより
袖にとまらぬはるのいろかな

家集

百首歌の中に

西行法師

聞かでまつ人おもひしれほとゝぎす
きゝても人はなほぞまつめる

臨永集

待郭公といふことを

法印長舜

つれなしと何うらむらむほとゝぎす
われひとりまつ初ねならぬを

新千載集夏

夏の歌の中に

前大僧正植守

里わかずかたらひわたれほとゝぎす
まつらむひとの同じ寝さめに

家集

夏十首歌の中に

權中納言定家卿

すぎぬるをうらみはてじほとゝぎす
なきゆくかたに人ぞまつらむ

續後撰集夏

十首歌合に五月郭公といへる
こゝろをよませ給うける

太上天皇(後嵯峨院)
里なれていまぞなくなるほとゝぎす
　五月をひとはまつべかりけり

新千載集夏
　百首歌めされけるついでに
後醍醐院御製
たみのため時あるあめを祈るとも
　しらでや田子のさなへとるらむ

續古今集夏
　寶治二年百首歌に早苗をよみる
　兵部卿隆親
くれかゝる山田の田子のぬれころも
　ほさでや明日も早苗とるらむ

延久百首夏
　延久百首歌の中に
　前大納言(將軍仲氏)
降るあめもときをたがへぬ御代なれぞ
　としもゆたかに早苗とるなり

家集
　早苗をよめる
　法印堯孝
つくばねのしげきめぐみに逢ふたみや、
　すそわの田ゐにさなへとるらむ

新拾遺集雜上
　百首歌めされし序に夏草を
御製(後光嚴院)
なつ草のみちある方はしりながら
　ことしげき世にな迷ふらむ

續拾遺集夏
　家に十首歌よみ侍りける時夏草を
　山階入道左大臣
草ふかきなつ野のみちにまよひても
　よのことわりぞ更にしらるゝ

(以下次號)

みちのく紀行（二）

▲は補
●は誤

故僧　均月

廿五日、朝より小雨ふる。笠とるほどにもなけれど、あるじあなひして、御山にもうでぬ。大谷川にかゝる。こなたの岡に、やしろ有り。星の宮といへど、手向して過ぎぬ。三光の蔭にまじはり給ふめぐみも、かたじけなく、おぼえて、

日の光り月の影にもつぎてなほ　あふぐやあまつ星の宮井は

よのつね、ゆきゝする橋より、一丁ばかり上に、朱にていろどりたる玉橋あり。これなん、所には神橋と申して、當山開闢、勝道上人はじめて、登山の時、ふたつの大龍出で、橋となりて、ひじりをわたせし處とかや。橋のむかひの岡に、深砂王祀と申して、橋守のかみをはします。此の橋を、古より、山菅の橋といへり。八雲の御抄にも、のせたる名所にて、古歌なども侍るにや。すべて、當山深秘の所といへり。橋の高さ十五六間も侍るべし。

いまも猶たつもやはふすしら波の　岩ねにかゝる山すげのはし

それより松杉生ひしげりたる下道をのぼり行く。千尋のこずゑみどりの空にさゝへ、岩ほの苔衣は、幾代をかさねては、神さひにけむとおもひたどりて、石の鳥居のもとにいたりて、あふぎ奉れど、御額は、明眞院の女帝宸翰をそめ給ひしとかや。猶、石みちをのぼりて、御假殿を拜し、重門にいたり、銅の鳥居のうちに入れど、東に三の御寳藏有り、左に御むまやあり。こゝを過ぎて、御水屋石のうつぼり、めもあやなる地もんの彫物也。からかねの鳥居の内に入りて、御經藏、御寳藏を拜し、石の楷をのぼりて、東照宮御本地堂、やくし如來を拜したてまつる。東の左右に、鐘報の櫻うづたかし。その外、朝鮮、琉球、阿蘭陀等の、ひとの國々より奉れる燈籠、そのたくみなる事、いとあやし

き物なり。又、石の階、玉かきを過ぎて、陽明門にいたる。此の額は、後水尾の法の皇、御御筆を染めたまひしとかや拜し奉る。おもてに、隨身、うらに、雷神、風師とすへらる。内に、御輿や、護摩堂、御神樂所有りて、唐門に入る。御めぐりの廊、石だゝみいよやかにして、みづかきの中央の御拜殿のもとに膝行して、九度ぬかづき奉りて、御神威のひとの國までかがやき、ひのもとをしづめまし、よろづ國の民草の樂みはてりかなるも、ひとへに、たかてらし給ふ御めぐみにかと、かけまくもかしこくおもひ奉りて、

　日の光り空にあふぐもおほけなき
　　苔のころものもれぬめぐみに

とむかり法施を奉りてまかでぬ。すべてつくりみがれたる御堂社いときよらかに、ひとつの塵をもすへず。玉のみあらか、玉のきざはし、あざやかにして、あけのたかどの、紫の軒端、沈香、びやくだん、唐木を柱として、古の聖賢、列仙の圖、雲にすむたづのいきはひ、岩による獅子のふるまひよりして、からやまとの鳥けだ物、よろづのくさ木の花にいたるまで、その心しらひ、置てざまことに見えわかれて、うるはし。世にきこへある木の道のたくみ、つくも所の手をつくし、心にまかせて、金の色どり、玉をちりばめたるよそほひは、みぬもろこしの央長樂長生驪山もかくやかあらん。まことに生ける佛の御國も、かうやうにやと、見奉るに、目もまばゆげにて、あめが下のれはひなるみものと申すべし。これを見ずしては、物の美麗をみたるとはいひがたからん、みぬ人にいかゞまねぶんや。班固張衡が手をかるとも、しるすにいとまあらじとぞればねてかへりみがちにまかでぬ。こゝより、新宮、中宮、本宮順禮し奉りぬ。すべて、此の山を補陀落山となづけ、滿願大權現といはひ奉るとかや。中宮を瀧の尾と申すにや、いとおもしろき瀧有り。俗には、そうめん瀧といへるとかや。

　つゝみもて人にみせぞや瀧の尾に

ぬきとめずちるなみのしら玉

三本の杉は、三かゝへほど有るべし。千尋のこずゑは、雲をさゝふかとみゆ。一本は、枯れてたふれたり。

よろづ世をふる河のへのためしにや
みもとも今は二本の杉

惣輪搭、三佛堂、法花堂、常行堂、これなん頼朝堂と申すとかや。御佛殿をはるかに拜し奉りて、又、山路にかゝりて、寂光權現にまうで奉る。こゝにも、布引の瀧となんいひけれど、

山姫もれりてや袖にかさぬらん
おのかものなる布引の瀧

此の山路を分出で、慈雲院がむまんが淵を見にゆく。寺のれくにある澤より流れ出づる山水の瀬々の岩根をめぐり來るけしき、心の塵も流れて、いと深し。淵のむかひに、そそ立ちたる大きなる岩のおもてに、不動の梵字はのかに見ゐ侍る。これなん、弘法大師の彫りいれ給ふ筆跡といへり。岩の上に、石佛の不動尊を安置せり。淵の水ふかくたゝへて、青きこと藍よりも青し。

動きなきいはねのふちに水茎を
なかれての世にいつ殘しけん

こなたの山ぎはに、百体の石佛なみゐたまへり。ことごとく、ふかく苔むして、五劫思惟のかたちも、これにやと、殊勝におぼゐ侍りて、

日の光り待ちいでゝみん心あらぬ
雲霧はらへ山の松風

廿六日、空はれしかど、中禪寺にのぼり侍らんとて、おるじをゐなひにして、立ちいでぬ。

山ふみにけふはるゝ日の光りこそ
ねがひを神も照らしますらめ

山路にかゝるほど、二荒山のかたに、郭公一兩聲、おとづれしかど、

をちかへりなけはとゝぎす玉くしげ
二あれ山の名にはかぎらし

道より、半里ばかり分入りて、あら澤といふ所を過ぎ

て、うらみの瀧を見に行く。ほそき岩のかけぢを傳ひ、木しげくしげりて、いとくらき谷かげに分入れど、數十丈たかくさし出でたる岩のうへより、ひろさ壹丈ばかりの瀑布、深谷におつるをと、鳴神のとゞろくにたり。その瀧のこなたをとをりて、瀧のうらより見侍るゆゑに、かく名づけたるとなん。いかにも、魔所と見ゑて、ひとりふたりしては、行きがたく、物すごき所なり。

をとにのみきゝてとしへしうらみさへ
けふはとけぬる瀧のしら糸

瀧のもとより、猶、岩根の道なき所を、五六尺の間、鐵の鎖にとりつきて下り侍る。めくるめき、心たましひなく、あやうき道をやゝからうじて、本の末に分出でぬ。馬をぞ裾野にまはして、またせ置きつれど、それより、うち乗りて、山中を行くほど、子規鳴きけれれど、

なれば世をうしとやれもふ里とはで
山にのみ鳴く山時鳥

二里ほど行きて、馬逃しといふ山里有り。こゝに馬をとゞめて、かちより、中禪寺に分けのぼる。一里あまりありといへり。さがしき山路を、五歩十歩にいこひ、杖を頼み、膝をたさへて、やゝ、からうじて、地藏堂にいたる。此の山を、黑髮山とぞいふなる。

老いらくはのぼりぞなづむ駒の毛の
黑髮山のみねのがけぢに

そこより、はるばると行きて、不動堂過ぎて、中禪寺にいたる。やがて、湖水を結び、手あらひ、口すゝぎて、權現を拜し奉る。男女の御神といへり。立木の觀音堂を拜す。かたはらに、唐銅にゑりたる當山の碑文有り。おもてには、空海師の文也。うらは、准后法親王のかゝせたまへる文なり。妙見天童宮を拜す。これなん、柿本人麿を祝ひたる所といへど、手向し奉りて、

しきしまの道のひかりやいやたかき
黑髮山にいはふ神垣

いかなる故にかと、いぶかしく侍りしに、萬葉集に、「ぬば玉の黒髮山を朝こえて木の下露にぬれにけるかな」と人丸詠じ給へば、此の山に分入り給ひしゆへも侍るにや。そのうへ、湖水のほとりに歌の濱といふ所もあれど、故なきにしもあらず。此の湖水三里、わたり壹里ばかりありといへり。かの濱も見まほしかりつれど、六月ならでは、舟を出ださずといへど、むなしく眺望し侍るのみなり。歸るさに、華嚴の瀧を見にまかりしに、にはかに、霧立ちこみて、數百丈の澗底に、瀧の音のみ聞えて、何の興なし。

みわたせどそことも波は雲うづむ
千尋のたにゝむすぶ瀧津瀬

もとの山路を下りて、馬かへしの山家にしばしやすみて、乘燭のころ、旅宿にかへりぬ。

廿七日、よべより、雨ふりけれど、みわづらひて、宿を立出づるとて、

ふり捨てゝゆけとやいはん旅の友
いでがてにうきけさの雨には

今市といふ所より、西の海道にかゝりて、大田原をさして行く、ひろき野をはるばると行くに、雨をやみなく、いとわびし。

さらでだに朝たつ袖の露けさに
けふは雨さへしぼるくるしさ

やがて、大わたりといふ所にとまりぬ。

廿八日、空晴れぬ。宿を出でゝほどなく、きぬ川にかゝる。きのふの雨にて、橋落ちけれど、さしくる舟を待ちてわたりぬ。日光の山おろしいとさむし。

きぬ川は名のみぞ旅の袖さむみ
舟さしいそげ彼の朝風

舟よりあがりて、舟生、玉の生、高田、村屋、いた澤村などいふ里々を過ぎて、なす野の泉を、はるばるとわけ行く。高原山、鹽原山、なす山など西のかたに高くつらなれり。「あられたばしるなすの篠はら」などよめれど、冬のころ、此の野をわけん事いとくるしかる

べし。行先れはく人家も見えず。いたくくしにたり。
枕ゆふ里はいづことゝふ人の
　なすのしの原家もなくして
やゝ暮れかゝるほど、大田原の家にやどりぬ。
廿九日に雨ふる。宿を出でゝ旅川といふ河を、橋より
わたる。
　ゆく末も今いく瀬をかこえぬ〇き
　　うき旅川におもひわたれど
ゆき／＼て、鍋かけ川、こし堀の里を過ぎて、蘆野の
里にかゝるに此の宿を過ぎて、左のかたに、古の朽木
の柳の舊跡有り。道興法親王回國雜記には、「みちのく
の朽木の柳いとたえて昔の衣にみどりをそかる」と
よみたまへり。蘆野は、下野國なるにいぶかし。
　世々をへて朽木の柳名もくちず
　　みどりの陰や猶しげるらん
こゝより山路をはるかに分行きて、下野みちのくのさ
かひの二所明神にまうで、手向し奉る。世には二所の
關といへり。まことに、關所と見えたり。折ふし、郭
公の鳴過ぎければ、
　いにしへの關路とてやはいまも猶
　　名のりて過ぐる山ほとゝぎす
ほどなく白坂といふ里にとまる。その夜、しら川の關
屋の古跡をあるじに尋ねければ、此の里より、二里
東に、昔の海道あり。關山の觀音とて、寺を光明院と
號し、聖武天皇の勅願所にて侍る。いまの海道は、新
道なりといへり。いふかし。けふ過ぎつる堺の明神は、
二所の關の古跡と見え侍るは、いかゞ。當世しら川と
いふ城府は、猶こゝより、二里北に侍るなり。

（以下次號）

柿屋雜記

赤松景福

佐藤直方は備後の人にして、山崎闇齋先生に
雅號

學びたりき、ある人直方にいへらく、君が師は闇齋先生といひ、君が友は淺見絅齋といひ、三宅尚齋といひて、いづれも雅號あるに、唯君のみこれなきは、いかなる故ありてかといへば　直方いはく、我は我國の俗に從へるなり、我國には古來字號あらざれば、我若し唐土に行とも、名は直方通稱五郎左衛門といはむ、と答へたりき、故にその門人といへとも、直方先生といへりとぞ、儒者すらかうあるに、歌よめる人の中に、或は唐めきたる號を好めるやうにて、其歌にあやしき號をかきつけて、反てよき名のあるを捨るは、なかなかをこなる業なり、殊に女か某(雅號)女史など、妄に唐樣にかきたつる事、いとふさはしからぬものぞかし、又別號といふことは、雅號一つある外に、別に又附けたる號をいふと思ふものあれと、唐土にては姓名の外につけたる號、たとひ一つにても、それ即ち別號なり、去かるに我國にては、雅號二つ以上ある時にいふもの、とやうに漢學するものも思へるもの多かンめり、

妾　近きころ女のかけるものに、自ら妾といへるもの多し、こは論なう漢國の物言ぶり也、男子自ら臣僕などいふ例もて見れば、女には妾といふこと、固よりあやしむべきに非ず、されど其女漢文かく上にては、そもよけれども、普通女文に妾としもいはで、何とかいふべきなり、まして和文などいはるゝばかりの文中に、殊更に妾とかけるは見劣せらるゝものなり、我國古書の中に、或は女の上の事を、妾とかけるものもあるは、後人漢文體にかける所にして、正しき訓はその義によらざるなり、但しおのが譯せる梅妃傳の文などに、妾の字あれども、そは原かの國の文體によれるにて、格別のことなれば、その心して見てよ。

矣、焉、　是漢文助辭なり、去かるに諸の雜誌などに、云々矣、云々焉など、和文の句末に、かやうの助辭を附るも少からず、いと亂はしくて、無用のことともなり、此外さるべき人の和文を漢樣にかき、歌の端書歌の判詞をさへに、剛々しき漢語を多く書列ねなど

して、更に和漢の言樣を辨へず、新聞或は速記錄やうのものと、相似たるが少からざれど、いひもてゆかば事項はしかるべきを以て、今はこゝに識さゞるなり。右いへる事ども、今世の歌文の雜誌のうち、おのが既く見しものに就て、聊かかいつくるのみ也、決て此女鑑につけていへるには非ずかし。

革命　近き頃「明治の革命」などいふものあり、是はいといまいましき語なり、おのれ按ふに周易下彖傳に湯武革命、順乎天而應乎人、とあるを思ふべき事にて、彼國祚交代を視て常とする漢土と雖も、一系統なる限は、希代の英主或は政事の改正ありとて、その時代をさして、革命といひしことなし、かやうの例いふべきこと多し、世の漢學者徒に章句の末を事とし、或は堯舜の無爲を稱め、或は殷周の制度を說き、或は秦漢の興廢を語るが如き、竟に何の益かある。

又近き頃和歌の風體を改良すべしとて、歌道を語る人の言に、「和歌の革命」などいふものあり、いと穢き言樣ならずや。

ひしりてふひしりは唐の國にのみ
ありと思へる人のおろかさ

維新　此語は毛詩大雅文王之什三之一に、周雖舊邦、其命維新と見ゆ、是集傳にもいへる如く、周公が文王の德を追述せるものにて、周は后稷始封このかた、千餘年の舊邦にては、あれど、その殷に代りて君臨すべき文王は、新に天命を受たりといへるなり、此詩維新の字を以て舊邦に對して、全くその詞の章を成せるのみならず、其意を釋ぬるに、實は人の國家即ち殷を亡しゝ罪を掩ひて、却て自國は天より新に受命のものといふ私言なり、彼漢土の慣例なる國祚交代の際なればこそ、かく不祥語例もあるものなれ、我億萬世不易の國家にありては、政事上の盛衰ありとて、「明治維新」などいふはあまり善しとも聞えず、されど又尙書胤征に「舊染汙俗、咸與惟新」とある方に見做むか、此尙書の惟新は只風俗の改正にいへるものなれど、今世維新

とかく例よりは稍可なり、さて此二語いづれにても論なきが如くなれど、凡て一の熟字成語とある上は、各その本書に據ざるべからず、惟唯維の三字ともに六經通用すれど、毛詩には維を用ゐ、尙書には惟を用ゐたるが多し。

明治叡聖文武皇帝　近き頃衆議院議員の表文やうのものに、かやうに書る事ありしやう覺ゆ、是は韓文に元和叡聖文武皇帝とあるによれるにや、若し然あらむには、此號は憲宗元和三年正月上叡聖文武號とある如く、當時の一の帝號にて、語學家の所謂名詞なるを、妄に我國に應用して、かしこくも天皇陛下の御上に申しまつること、いかゞあらむ。

機嫌　首楞嚴經に、誹謗佾尼、訐露人事、不避譏嫌、又法苑珠林に、善護譏嫌、藏身天上、ともあり、かかれど今俗に譏を機とかき、又人の動止を機嫌といふは誤なりと貝原氏はいへり、おのれ按ふに譏嫌は本、今世の所謂嫌疑などいふ語に似たり、さて我國自然の用例によりて、漢語の本義を轉し、或は文字の偏傍をたがへて書ける例も間あれど、强に誤ともせずして、姑く習慣に任するもよからむ。

天機　おのれ按ふに、淮南子に聖人云々有以通天機、また晁君成の詩に、融結想天機などある如く、元は造化の妙用をいへることとなるを、前にいへる機嫌の義に轉用して、天皇陛下のみけしきを申しまつる言となりしか。

家兄遺草（二）

白松園主人編

松々記

和尙、をりく外に出でゝ、松園獨りゐける。頭の髮いと短く云たりけれど、詣づる人、和尙の弟子とや見るらん。和尙まさずど、かはりて讀みてたべ、などいはるゝ事多かりけり。和尙朝餉炊ぎはてゝ、やよ食は

ずとや、呼ばるゝ聲を聞きて、松園奥の方より出でき
て、即ち鉢を共にし、鍋を一つにしてくふ、食ふもの
は何ぞ、ある時は大根の漬物、又ある時は、味噌の汁
などなり。この漬物と、この汁とは、和尚の手づから
ものせるにて、くへども飽かず、甘きこと限りなし。
二人して、甘し〱とてくふ。松園いと大食にて、其
の椀の大きやかなる、見る人驚かぬものはなかりき。
ある日松園外より女のをしへ子ども、四五人ゐてかへ
りし事ありけり。和尚黄爪を膾にきりて、鉢に盛りて、
椀皿など一々揃へて、机の上にのせて、女子らをそこ
にすゑて、くはせけり。その志いといみじかりけり。
和尚も松園と、その中に打ち交りて、くひけるが、日
比は皿もなくて、鉢の中に箸をさし直につかひけれど、
此時も和尚何の心もなく、鉢の中に箸をつとさし入れ
て、食ひけり。女子らは顔見合せて、呆れたるさまな
り。げに見なれねばなりけり。いとわいなしとて、松
園心ぐるしく思へど、和尚はなはだ心づかでありしこそ、

いとをかしかか。又ある日、里の某二人三人、松
園にいひけらく、蔭松院にいきて、豆腐揚げてくはい
やといへど、いとよき事なり、こよといひ契りて、待
ちゐたるに、やがて照りはたゝく、熱き日も厭はず、汗
にあゑつゝ、豆腐一箱もてきたり。折節和尚はあらざ
りき。人々火をおこし、豆腐を切りなど、たちさわぐ
さま、いと勇ましげなりけるに、やがて油の音、げら
〱と聞えて、とく醤油もて來と云へど、余所よりれ
こせつる、いと淡き醤油のありけるをぞ、出しおきて、
隠れて見をれど、こはいかに、此の醤油はいかにしつ
るといふ、いかにともせざるを、といへど、かゝる淡
くしわはゆきもの、食はるゝものか、あなくちわろや
とて、吐き出す様、をかしき事かぎりなし。我らが食
へどいとうまきを、すべて凡人は、霊場仙境の食は、
くひあへぬものぞといへど、皆うち腹だちて、豆腐か
いさらへて、もていにけり。いかに興さめたりけんと、
和尚がかへるをまちうけて、語りきかせたれど、

いたく笑ふ。松園、さばかり、僧をにくみ謗りける心もて、今はかくまでに馴れて、麁飲麁食も、絶えて厭はず、かねて僧を親しうしける人だに、え堪へぬ事さへ、えたふるごとくなりぬること、いぶかしき限なりかし。松園の心には、寺に明し暮し、僧と起臥を共にして、樂とせんとは、夢にだも、思ひかけざりしならん、あやしの因縁なりけり。

南の坊には、池もあれど、今はかれたり。引くべき水はあれども、えたもたぬなりけり。和尙はつねに、此坊のはし近く、火桶すゑてゐたり。奧の坊には、間三つありて、一の間は、太守のおましの間なり、二の間三の間は、伺ひの間なり。三の間にぞ。松園はゐたりける。西面は山岸にて、大きやかなる岩つき出でゝ、その上に松生ひたり、緑の枝一の間にさし入りたるけはひ、又なし。北面の庭には、大きやかなる楓うゑたり、桐椿などもうゑたれど、皆ほそし。北面と西面との間に、岸にそひて、さゝやかなる池あり、菖蒲うゑたりけるが、四季共に咲きて、色に常の紫にぞありける。東面こそ、いと廣き庭なりけれ。堅田、勝谷、田倉の、三村をつくりて、青山勝山を近にして、中には、田も畑も大路も造りたれど、人も馬も皆行きかふ、大方かうやうの庭は、あるべくもおぼえず。門を出つれど、長やかなる馬場あり。馬場のかしらにぞ、地藏菩薩立たせ給へる、いとたのもしかるべし。馬場は松多くうゑたれど、畑をおほへなどとて、なさけなくも枝うちおろして、手も足もなくて、わびしげなり。馬場はてぬれど、住吉より豐浦へ通ふ大路なり。路のほとりに、古りたる森あり、石瓶の森といふ。昔神功皇后、三韓をことむけ給ひてのかへさ、こゝに石の瓶を埋めて、武器を收め給ひしものとぞ、語り傳ふる。上に大きやかなる岩すゑたり。今は住吉の末社として、そこより祭も仕へ奉れり。路をへだてゝ、堅田の里、篁の中より。草の屋かしこゝ、頭出せるもをかし。勝谷の里は、中らにありて、鉢の底のごと窪めり。田倉の里は、

勝山の尾にありて小高し。つとめて起き出で、東面より見やれど、青山勝山のこしよりかけて、堅田の里まで、霧たちわたりたる中より、朝いひ炊ぐ煙、二すぢ三すぢ、ほそ長くたちのぼれるけしき、いはんかたなくぞおぼゆる。まして雪の朝のさまは、一入の眺めなりけり。

夏の夕は、大方躍の鼓、かしこゝに絶ゆる時なし。人の心のうきたつは、春の初めつかたより、夏にいたりて極みなるべし。里の男女は、朝に出で、夕にかへり、ひねもす田のもに打ちさらされて、暇あれど山にゆき、はた野にゆき、骨を休め、心を慰むる事とてはあらず。をりふしにつけて、歌をよみ、詩を吟ずるなどのわざもしらねど、只秋の祭、夏の躍を、こよなき樂とはすめり。松園こゝの躍はめづらしければ、しば\/見にいきたり。人の家の庭の廣やかなるに、たゞ中にあぐらを据ゑて、そが上に聲よきものと、三絃ひくものと、五六人のぼりをり。大鼓はあぐらの腰につるしたり。さて女も男も、若きも老いたるも、打ちまじりて、このあぐらをめぐり\/て、躍るなりけり。歌はくどきとて、狂言のあはれなるを、今一際くずしてうたふ。そのふしいと面白し。うたふものは一人にて、是をおんどゝいふ。音取てふ意なるべし。これに合せて、鼓うち三絃びく、鼓うつ樣、何ともたとへん方なく、またく狂人のさまなり。但しこの鼓いとかたしとぞ。盆躍てふわざは、もと天竺よりわたりぬといへど、あながちそれのみにもあらざるべし。我國古代、歌垣てふわざありき。こは夏のみにはかぎらざりけんを、例の天竺の風にけおされて、かれこれ其わざ打ちまぜて、盆に用ゐるやうになりて、代を經年を重ねて、そのふりいたく、變りぬるなんめり。唐土にも、早くよりこのわざありとか。松園れいのくどきを習ひしかど、いとむつかしくて、えうたひえでやみぬ。

祭の宵宮に詣でたるに、日比見しりたりける媼、うしろより來て、御栗をたべといひつゝ笑ふ。この媼、な

にをいふにかと、いぶかりながら歸りきて、ある人に問ひけれど、こも亦いたく笑ふ。强ひて問ひけれど、此處のならひにて、若き男女は、宵宮に詣で丶、男にても、女にても、心ある時、かくしていひよるたづきと、するなりと、いひて笑ひぬ。思ふに其の品は、栗に限らでもあるべけれど、昔は今のやうに、菓子など貢るべきたなは、なかりけれど、人々栗を袂に入れもて來て、口ずさびにくひたりけんかし。古代の歌垣には、和歌を詠み戰はしてしたりしを、こは和歌を栗にかへつるにて、歌垣の樣にいとよく似たり。かつ法會にはせで、宵宮にかぎりてすなるは、彌よ古代の風の、殘れるならん。古の風は都にはなくて、かへりて田舍に殘れりといふは、こ丶なりけりとて、松園和尙に語りき。

和尙、詠みける歌ども、あまたある中に、新樹といふ題を

　花ゆゑに人にしれつる山寺は
　　こがくれにけり若葉しげりて

　散りのこる花こそあるらし若葉もりて
　　吹きくるかせのなほもかぐはし

社頭の卯花といふ題を

　白栲の八重の卯花咲きにけり
　　神のいがきは夕やみもなし

雲間の郭公といふを

　八重雲にそらは曇れど郭公
　　ひとこゑなのる音のさやけさ

五月雨ふりしきる夜、よそにいきけるに、螢とびかひて、道をてらしけれど

　やみに行くまつともなりぬ螢火は
　　學びのまどを照すのみかは

夏の日よみける

　うた丶ねの夢さめ見れどゆふだちの
　　なごりの露に風そよぐなり

又秋のころ庭の桐をながめて

一葉二葉おちくる庭の桐の葉の
　かずそふまにぞ秋はふけぬる

松園ある時、あふ坂をこゆとて詠みける

あふ坂をうち越え見れど豐浦の海
　黒き小島に白帆かくろふ

この歌、ある人がりいきて、たにさくにかき置きけるを、ある翁見て、さて松園にあひて、人のあまたゐたる中にて、くちずさびて笑ひぬ。此翁、よはひこそ人にすぐれにたれ、ものはさぞかりえしらねど、松園いとくちをしがりけり。

ある時、人の國にいきて、とのみといふ濱邊に、やどれりける夜、やどりにて、物うせたりけり。つとめてものわびしくて、沖の方を眺めをれど、海士がいさましげに、こぎかへる見ゆ

あまが子はさちやえぬらんあさぼらけ
　こぎくるかいの音のさやけさ

學校に、紀念式ありける時、ふさはしき唱歌なかりけれど、天津日嗣の曲に合せて、つくりてうたはせける歌

青山がねのみ谷より湧きて出でくる砂川の
　この川のべの學舍は　ながれと共にたえせじな
　青山がねとさかえなん

又君が代を祝ふ唱歌を、民草の曲に合せて

葦原の　水穗の國をしろしめす　我大君は神ながら
神のみすゑにましませど　月日と共に照しませ幾代
へぬともいや光るごと

學校に聖影しづめまつりける日、人々歌よみけり、和倘

今日よりは君が代うたふ里の子が
　聲もまぢかく聞しめすらむ

松園

あまさがるひなにすみつゝ雲の上の
　光りまぢかく仰ぐかしこさ

歌のよしあしにはかゝはらず、人は笑ふとも誹るとも、まかせつべし。我は自ら思ひをのべて、自ら樂ぶとい

ふは、和尚の心なり。松園はすべて物にかゝづらはぬさがなりけれど、題につきては之詠まず、只物にふれ心に感じて、今はと思ふとき、ふと詠み出でけり。只心のまことをのみ、のぶといへり。

（以下次號）

浮世いかだ舟

作者不詳

●醫學正傳の作者をしらざる事

今はむかし、御うちに召かゝへられし、野夫醫者の有けるが、名をも通齋といふ。物をもしらず、只聞書もかりにてれうぢをする、その書物はみなかながき也。うき世坊とひけるやう、そなたは學文をよくさせられたさうな、しかも療治もよくめさるゝと見えた、きとくの事かな、醫學正傳はたれの作ぞとゝふ。元より見たる事もなけれど、その作者と聞たる斗なり。きゝ書のはしに、こうとくらうじん正傳をつくると、かなに書てをきたるを思ひいだして、それこそぞんじたれ、正傳は唐の後藤九郎二郎と云人の作ぢやとこたへた。

●人は萬物にすぐれたる事

今はむかし、易にいはく、人は萬物の靈なりといへり木火土金水の五行の氣をまつたくそなへて、さらに天地の理をうけたり、しかるに、いきとしいけるもの其數おほく、そのうくる處の氣質おの〱ひとしからず、東は木をつかさどりて鳥のたぐひ三百六十を生ず、鳳凰を以てつかさとす。南は火をつかさどつてけだものゝたぐひ三百六十を生ず、麒麟をもつてつかさとす。西は金をつかさどりて、甲を負たるたぐひ三百六十を生ず、龜をもつてつかさとす。北は水をつかさどりて、うろこを着たるたぐひ三百六十を生ず、龍をもつてつかさとす、中央は土をつかさどりて、裸虫のたぐひ三百六十を生ず、人をもつてつかさとすといへり、しかるに、鳳凰、きりん、龜、龍をも是を四靈となづけて、その鳴こゑ律にかなひ、そなふるかたち數

に應じ、あらはるゝ所時に隨ひ、とゞまる所よろしきにあたりて、まことにきとくのためしとせり。されども、人は中央、生じてつぶさに五行の徳をそなへ、陰陽の理にかなひて、よく萬物の中の靈なり。けだし思ふに、それつばさ有ものは空をかけり、蹄有ものは地をはしり、鰭有ものは水をおよぎ、氣屈りて土をくゞる。是等のたぐひ五行の徳まつたくうけず、缺てむなしき所有るゆゑに、その性おろかにしてさらに智慮なし。つばさ有ものは手なく、角有ものは上齒なし。食を呑ものは卵をうみ、胃の腑なきがゆゑに乳房なし。膀胱の腑なきものは鹽をくらふ事あたはず。又その行時は、蛇のはらばひ、蟹のよこにゆく。又それ象ははなをもつてものを取り、牛は角をもつてこゑをきく。あるひは其こゑをいだすや、から蟬ははらをもつて吟し、蟋はもゝをそへてなき、はたをりのはねをもつてなく、みな是天をそむきて背にれふ、さらに恥をわきまへず。爰をもつて獅子の威ある、虎の武き、熊のすこやかなる、狐の妖なる、猩々の人に似たる、猿猴の才有、その性なみ偏にしてたゞしき所是なし。いかにいはんや、狗の夜を守り、鷄のあしたをとなふる、人のために用有といへ共貴からず。是人のみ天地二五の性、五行の徳をそなへて、五臓五官さらにかけたる事なし。かうべに天をいたゞき、足に地をふみ、智慮分別ありて恥をしり、かゝるたふとき生をうけて、萬物の長たる身ながら、人の人たる道にいたらずは、羊質にして虎の皮を着すとかや、かたちは人に似て内心さらに人にあらずといふべきなり。

才くらべ

蓬生屋女史

家に慈母のいますときは、其の子あなどられずと云ひて、誠に美くしき母のおはすときは、如何に愚なる子なりとも、其の母の惠みを見て、かしこくかしつくが

如けれど、一旦慈母を失ふ時は、おろそかにせらるゝ



が多かり。むかし毛利元就の女は齢ひ七つどかりにて、はやく母を失ひたり、いとけなき身傅母、侍婢等兎角あなどりて、不敵のことのみ多かるに姫は口惜しくおもひ、ある日、傅母につきて、針數百を求め、之を侍婢たちが、食器に盛り、さて、皆皆を召し寄せて、之を食へよとあるに、皆々おどろき、針など食べらるゝものにや、東西も知り給ふ御身がさても無法なることを仰せ給ふよなど云へど、針は小なり、小なるもの何ぞ食ふ能はざる事やあらん。たゞ食べよと、なほ再三强ひすゝむるに、さても聞きわきなきことをの給ふ君かな、さやうに分かぬこと仰せ給ふならど、父君に聞えまつらんに、いざれはせなと云ふ。女は自若、汝等、かやうの小なるもの如何にしても食ふべ得ぬにや、さりとて、巳れ、主君の子なるに、汝等われを幼けなしとして、日來あなどる事多し。小なりとて、あなとられ得らるゝものならど、此針ものみ得らるべし。と云ふに、人々たゞ舌を卷きて何事をもいらへん言葉はなし、をりしも元就、何事をなしをるならんと女が部屋に來り給ひしか、かゝることを聞き、大に侍婢等をさとして、後悔ることなからしめしとなり。

○

後一條の帝、御誕生ましく〱ける御時、上東門院殿、殊の外になやませ給ひけるに、御堂殿、さわがせ給ひて、御前より御障子を明けて出でさせ給ひ、こは如何すべき、御誦經など重ねてすべしと仰せられける御誦いまだ終らざるに、勘解由相公有國卿、未だ若かりける御ときなりけるが、御産は既になり候にたり。重ねて御誦經に及ぶべからずと申すほどに、女房はしり參りて、御産すでに成ぬると申けり。事おちつきての後、有國を召して、如何にして、御産成りぬるとは知りけるぞと問はせけるに、障子は、子をさふると書きて候に、廣くあきて候ひつれど、御産なりとは存じ候ひつると申しけるとかや、此の帝の生れさせ給ふ前なりき。上東門院の御方の御根の内に犬の子を生みたりける。思ひがけず有がたきことなりけれど、大江匡衡と云ふ博士に問はれけるに、是れ目出度御吉事なり、犬の字は大の字のそばに點をつけり。其點を上につけど天也、下につくれど太なり。其下に子の字をつくれど、天子とも太子ともよまるべし。かゝれど太子生れ給ひて、天子にいたらせたまふべしとぞ申しけるが、その後、はたして此の君の生ひ立ち給ひけるとぞ。大方八卦はかやうのことにて判じけるものにやいみじき事なり。

禽獸の言行

田端の隱居

黄金虫と云ふあり、これは貧賤の家には住まず、富貴の家の火桶茶罐子などの暖かきところ食のある處に出入する虫にて、誠は油虫なるを、此虫を生ずる家は、富貴なりとて、此に之を稱して黄金虫と云ふ。朝に二匹と思へど、夕には六七匹、明日はまた十二三匹、忽ちに五六百となり、菓子などあるや、よりてたかりて穴を明けなどするを、人は此の虫生ずるときは、富貴となるなど云ひて、大切になす。人間にも富貴なる家にうるさき程媚ひ、子をひき連れ、弟を伴れなどして、出

入し、貧賤なる方には目も懸けぬものあり。此の類黄金虫の徒か、宋の何尚之は、字を彦德と云ひ、何叔度が長子なりけるが、官職已に吏部郎となりて、勢ひ高く、威を輝す。或日家に歸へりて休息せんとおもひ、已でに立ち出けるに禁裡の老若餞して送りけるもの渚に到り雲霞の山をなして、省る空も見えぬばかりなり。やがて家に歸りけるに、父の何叔度、問ひけるやう、汝歸るときに、禁裡の老若朝を傾けて餞して送ると聞きけるが、幾ばくの客がありけると、何尚之に答へけらく、殆ど數百人ありて群集致し候と云ふに、父笑うて云ふやう、それは吏部郎の官職を送りたるものなり、汝を送れるにはあらず、むかし殷浩と云ふ者、豫章と云ふ所へ歸りけるときも送るもの數百人ありしが、一朝官職を罷められ、牢浪せし時に、東陽と云ふ所あり船に乘つて、征虜亭と云ふ所に風を待ちて、船がゝりして數十日逗留せしに、新舊の人、更に一人も來り訪ふものなかりきとなり。汝も亦たさやうなり。今は吏部郎の官職を送る者にして、汝を送るにはあらず、若し過ありて官職を止められなば、また殷浩かごとくなるべく、唯深くつねに愼しむべしと云はれけるが。げに世の中は黄金虫、米搗虫の類のみ多し。

動物園の熊は、人にものを貰はんとて、已れ猛け〳〵しき性をかくして、ひたすらに頭を下げて、辭義をなす。人にもかゝるあり。

昔北條氏の代にもありけん、鎌倉の幕士、正月元旦に會列したり。三浦義村先づ至り、已に上坐に就くべかりしを、千葉胤綱至りて、徑ちに進んで義村が坐を踰えて其の上につきぬ。三浦は和田の同族にて、和田の亂に、義村賣親の毀りありしかど、鎌倉の功臣なれば、人又威を憚かる。胤綱は、下總の人千葉平忠常の子にて、亦た鎌倉の功臣なり、互に其威を張らんとす。義村、胤常が、已れを踰へて席に卽くや、怒りを色にあらはし、獨りごとして曰く、下總の犬は圈を知らず、胤綱徐かに應じて曰く、三浦の狗は其の友を噛

むしと、これ何れか犬なるにや。人なるにや。

十六夜の月

麗子

（一）悲しき思ひ

母君は、程や、遠き伯母君かり音信給ひて、未、歸らせ給はず、障子押しひらきて庭の面を見渡せど、草葉の色もうつろひ果てゝ、風の恨露の哀も是を限りの秋の夕暮、すのこの下に、絶々に鳴く、こほろぎの聲もいと哀也。みつれどかくるといへる諺は、理りながら恨めしや、せの君に別れ參らせてよりは、只世の中には樂しみもなく、悅びもなく、父母君のねもごろに慰め給ふ御言葉聞けど、中々悲しさの彌まして、此程は身もいたうやせ細りぬ。あな心なの山風や、潦に映る三日月の影を吹亂しぬ。げに人の命は水に映れる月の影の如し。一度去りては、又返り難し。悲しきかな。

我身の既往、餘り思ふも苦しさに、こゝなる反故の裏に、思ふ思ひを玄るしてみむや。

（二）賓客の君

正しくかける暦だに疑ふ計り暑き秋の始めの夕つ方、浴し化粧し果てゝ、衣き改め、南椽に、す、まき上げて、父母君と、四方八方の御物語し給ふ折玄も、この額付きて名刺差出し、此の御方のと申す。父君みそなはし、あな珍しや、光雄君の歸り來ませるよ。客間に通しおきぬ、と座を立ち給ひぬ。

（三）其の二

おのれは獨り自が部屋にひき入りて、友よりの消息讀み居たるに、こしもとの、御客樣の御前に出させ給へと、殿樣の宣ふなりと傳ふ。未一度も對面給はりし事もなき人に、などかはと打案ずる折、母君の來給ひて、衣きかへてとくよてと仰せられぬ。

廿疊の客間の障子打開かせ、九尺床には古備前の置物、野州の掛軸をかけ、軒近く岐阜提灯をかけたり。傍に

侍りし腰元の、御孃樣の來させ給ひぬと告ぐれど、はや、此方へ入りねと、父母君のたまふに、面はゆながら、母君の御後べにつゐゝて、まらうどに一禮しぬ。賓客は、年の頃卅ぢかり、色白う、眼涼、いと品よし。快活なる聲音もて、麗子どのには始めて對面給はりぬ。此の程は如何なる御すさびに更けり給ふか、など、問はせ給ふ。

此の君は、櫻川光雄とて、法學士なり。先つ年、公の命をうけて、萬里の波濤をしのぎ、螢雪の功をつみ、榮譽を双肩に負なひて歸朝せられし人にて、そが亡き父上と、家が父上とは竹馬の友なりき。

（四）　騷く胸

庭前の梧桐に亂れし、ものがなしかる雨の日に獨り文机に打向ひ、金槐集をひもとく折しも、いと徒然の日哉とのたまはせつゝ、母君の來給ひぬ。手近の蒲團引よせ、上座におしなはしつゝ、げにのたまはす如く、いとつれ〴〵に物淋しう候ふに、しばし語らはせ給へやと申せど、少し打笑ませ給ひながら、そこ、はかべるき事ありて來たるなり。きゝね、御身も十七なれど、早う善き婿得させんと兼てより思ふに、かなたこなたよりいひ入るゝもの多かりしかども、皆心に叶はで、諾はざりき。かの光雄君は、彼人は地位といひ、容貌といひ、殊に、三男なれど、此方へ來てたもる由、父君もおのれも、至極につかはしきよき緣と思ふなり、なは、如何に思ふぞや、大方の事はなれも知りつる如くなり、よう考へ給へ、翌日答へをきゝ侍らん、勉强の妨げなしぬ、ゆるされよといひすてゝ、はや座を立ち給ひぬ。

（五）　嬉しき月

双方異議なく、櫻花咲亂れたる彌生の、忌れもせぬ、廿五日、紅葉館に式をあげたりき。其より光雄君は、我家に來らせ給ひ、築山一つ隔てゝ、池に望める、離れ家に我等は住みたりき、此所よりせの君は日々某省に出で給ひぬ、今迄だに、春の風の穩かなる如かりし我

家の殊に我身の定まりてよりは、一際賑はしう、父の君はいや己れは仕へを辭してんなどのたまはせつゝ、樂しく嬉しく月日をおくり來りぬ、草木も打しをるゝ眞夏には、四人は供人ぐして、箱根の別業に赴き、秋は我家に月の宴を催して、友どち君打揃ひ給ひ、詩歌論談に夜を更かし、面白き月日を送りたり。せの君も、いたう、おのれを愛し給ひ、おのれも此君ならで、火にも水にもと、ひそかに心に誓ひてき。

（六）　浮世の嵐

誰もみよみつれどやがて缺く月の
　十六夜ふ空や人の世の中

げに、さなりけり〳〵、無常の風は花の深き所に繁く、無心の雲は月のさやかなる空に多し。嬉しき月日の、一年もたつやたゝずに、病魔は右手を延べして、我らが家をおそひ來りぬ。一日、せの君は省より早う歸らせ給ひ、氣分勝れねど床しきてよとのたまひてふし給へり、あくる朝見奉れど、御面いたう紅う、御胸痛ませ給ふ由、驚きて醫者を迎へて聞けど、名もいまはしきインフリウエンザの由、只驚かれて、おのれは晝も夜も、衣をかへず獨りおきゐて、看護し參らせ、哀神おのが心をおもほしてつまの病をなほしてよ、神などと、心に念じ身にかへて、一日も早く愈えませと祈りまつり、母君は御老年をも厭はせられず、程隔たりし神社へ日參したまひけり、半月程たちて、次第〳〵に快くなり給へれど、嬉しくて或日の事なりき、珍敷をきなはらせ給ひつゝ、やよ麗子、久しう、御身に苦勞かけたりしよ、此體ならで、二週間後には外出もかなひなん、其折は豫後療養として熱海にや赴かん、欲して行かざりし伊豆山へも登りみんなどのたまひぬ。さるに、是や世にいふ中直りといふものなりけん、其よりは次第に弱らせ給ひ、今日こそはといふ今日にはなりぬ、寂寞たる室内に聞ゆるものは、時を刻む針の音のみなり、父母君、せの君の兄君たち、おのれは、もとより御枕元に引そひぬ。せの君はやみまして、いと、

おもやせて、透とほらん計り白き御面は、美しき御唇もたゆげに、細うまなこを開かせたまひ、父母君に向はせ給ひ、年月の御高恩げに申あげん言葉も候はず、報いも參らせで返らぬ旅路に赴く事こそ心憂く候へ、只許したまへ、とのたまひたて、兄君たちにも一禮しはて、おのが手引よせたまひつゝ、なれが眞心もて盡し呉れたる厚き看護もかひなく、悲しくも今は、別れざる可からざる時は來れり。此天なり、命なり、歎きて病になしかゝり給ふな。哀わがなき後はまだ、うら若き白梅のありとしも知られずしてくちなんより、良き緣求めてかしづき給へ、夫婦の契は二世といへど、行末長く彼世にてなほ待たんとのたまふに、おのれも胸ふさがりて、聲も絶々に、我つま聞しめしてたべ、世の中に君より外に夫と敬ふ人は侍らず、君に別れ參らさず有髮の尼と成つて御冥福を祈らんのみ、夫婦の契忘れさせ給ふなと申泣ふせど、嬉しげに淋しうゑみを含ませ給ひ、おのが手をひしと握らせ給ひて、永遠に美しき御眼をとぢさせ給ひぬ。

忘たひにし昨日や現今日や夢
哀悲歎也にも有哉

＊　＊　＊　＊

父母君は申に及ばず、おのが歎きは申すも愚かにて、其程よりは歎きの餘りに病の床に長らく臥し侍りぬ。先立たじ、おくれじとこそ思ひしが、契りしかひもなき別かなと、くりかへしつゝ、獨涙に身もうく計りにて侍りき。

（七）眞夏の蟬の聲

文學士何某といふ人ありけり、久しき前にもおのれを切にこはれしかども、さる子細あつて斷りき、又此頃人をもて度々いひおこしぬ。父母君はじめ、おのれも打こうじて、果は使するものにもあはずなりぬ。父母君はまだ年わかけれど又とのたまはすれど、おのれはうせ給ひしより一日とて涙のかはくまもなきに、なでう、異つまに見えんや、しかじ有髮の尼となつて亡

き君の御菩提を弔ひ參らせむや。

（八）　手向の露

今日も又おくつき所尋ねきて、昔しのぶの涙に袖は重うなりまさりぬ。　御墓前にぬかづきて稱名すれど、ありし昔の種々の事共目に浮びきて、比翼連理と契りてし、懐かしの我夫は、此青苔の下に靜にねむりますか、かなしきかなや、無常のあらしは連理の枝を吹しをり、獨むなしき床の上に、涙と長夜を明す身の悲しみを、はた誰にか語らん、我は家の一女なれど、夫なくては此家のちすぢは絶えなまし、さらば異夫にまみえんか、そは口にするだにいまはしや、さらば我家をいかにせん。

時たゝど、父母君のいかに待わび給ふらん、さらば我つま、あすまた問ひ參らせん、待たせ給へや。空も思ひをしるやいなや、雲立騒ぎ雨降らんとす。

＊　＊　＊

人の身は。風前之燈のまたゝく如く、三界は水上の泡光の前に消えんとす、妄想如幻の樂は終に不常の變あり。悲しきはげに人の身なりけり。あゝやくなき事をつゞりてける哉、母君のみたまはいかに悲しとおぼすらん。

やくなかりけり、やくなかりけり、いざ歸らせ給はぬ間に。ひきさきて、こにいれむや。

うたかたを果なきものと思はめや
　消るを爭ふ人の世の中
現とも夢とも分かぬ世にしあれど
　有りとてありと頼むべきかは

（をはり）

梅の下風（廿六）

白魚女史

狂女を出せとの言葉に、又ぎよつと總身わなゝきけるが、馮司はなほ大膽にもきつと心をすゑて、お早を省

れど、之れも土の如く靑くなりし面に、またや、かつと火のごとく燃えつ消えつするは、稻妻の光りにも似たりけり。越前守は、狂女を召し出させ、しばらくは物も仰せで二人が顔色をうち守られけるが、馮司夫婦は狂女を一目見るより、二人はいよ〳〵靑ざめ、寒さに、凍ゆる如く、がた〳〵とふるへのとゞまらぬ唇をきつとかみしめて、何をか、口の内に念ずるさまなり、大岡殿は此のさまをきつと見られ、地の震へぬるが、我身までうちふるうやう覺えぬと仰せけるが、また言葉を和らげ、やはそこの女子、そちは何と呼ばるるやと問はせ給ふに、馮司はいよ〳〵ぶつ〳〵南無岩清水の御神と聲さへもらすも笑止、之れも亦た狂へるか、お早は、我が子の襟がみをつかみて、やい此處な女、母などぬかすと承知せぬぞ、知らぬと云へ、知らぬと云へと、まだ正氣か、小さき言に、目に狂女に目くばせするに、たゞきよろ〳〵と見まはしをりし狂女はおどろき、あな母さま、ゆるしてよ、わしがわるかりし、傳吉殿の金子庄次郎さまにぬすませしは我しかせしことながら、母さまも御承知のこと、今宵のうちとせかせたまひしにはあらずやと、大聲あげて泣きどよむは、ありし世の罪を夢見るならんか、聞きかねし馮司はお早をはつたと白眼み、何を何を狂氣女の傍に寄る。すざりをらうと籔より蛇をつゝき出しての騷動、越前守はいつとおはやを白眼まれ、何をそこらへすさり出づる、狂女は此處にて詮議することあれど呼び出しゝなり、其處が構ふべきものにあらずといはるゝに、おはや面目なさの面を手にあてながら、されども、狂女のこと、僞りを申すも、はからねど、誠を申すやう云ひ聞かさんとてなりしとつぶやくごと〳〵に云ふを、越前守さまは冷笑しつゝ、こやそこの女、そちは何と云ふ名ぞ、聞かせいとまた仰せたまふに、わしが名か、をかしや、御前さんは、わしが名を知らんにか、我しは庄次郎さんの女房の花とて、馮司さんの息子の嫁といへど、誰れも知らわん人はないに、お



前さんは、何處の人じやかをかしくて〳〵たまりやしないとて、ころ〳〵ところげまはりて笑ふに、フン親父は馮司、母はおはやかと問ひかへさすれど、そうともとも、親父は馮司、ひようし、ひようし、あはゝと小供をあやす如きまねせしが、俄かに膝下を見て、こや坊やは何處へ行きし、何處へ何處へ行きしぞ、坊や、誰れか、誰れかかどわかして行きたるな、ゑゝ此處な人だらう、わしが子をわしが大事な坊をかどわかせしはと狂ひに狂へるを、こや、馮司、おはや、惡の報いは覿面、その子のさまを見よ、天ものを云はず、事を以て示す、女の氣の狂ふにても知らるゝならんと云へど、馮司なほ大膽、これは上樣の御詮議ともぞんじられませぬ。とるに足らぬ狂女などのことをおんとり上げての御裁判天下の法に候やと、又候ろ、ぬかしたり汝、天下の正法をよ、も誹る憎くき奴、しからむ狂女ならぬ者を引きあはさんか、こや、誰れにても、此間の藏前の奴を引き出せいとあるに、馮司は又やとむねをうつ、やがて、獄吏に引かれて、しほ〳〵と出で來る男、肉はこけ、髮は亂れむかしのさまには異なれどまがふ方なき悴の庄次郎なるにびつくりなす。馮司は思はずもどうして、かく行きとゞきたるぞと云ひかけしを、越前の守、何ぞととがめ給ふにどうしてかやう者を悴とはの給ふぞとはつと詞を變ふる何處までたけたけしきものならん。こや馮司よつく見よ、如何にかくさんともかくされぬ親子の罪はてき面汝、猿島川原に於て人を殺せし罪、且は汝が惡事より村長を奪はれしくやしさに、傳吉を恨み、人を殺ろせしを幸、傳吉を罪におとして、巳れもとの職にかへらんとし、殺せし 男女の死骸の首を取り、悴夫婦が衣服と着替へさせ飛石に血をつけおきたる、又傳吉ならぬ火打袋に傳吉が名を書き證據となしたるを、惡の報い、庄次郎は江戸に來り、庄兵衛と名をかへ藏前に住むものゝいつしか、いつしか之と云ふ商賈もなきに、子供さへ出來て貧せまる苦しさに、またや持まへの盜みの露見し

て獄にひかるゝや、嫁は發狂、遂に前惡を口ばしりしは天の云はする惡業の報いと村人の顏を知りたるとに遂に隱しおうせずして白狀したり、汝かくても罪に伏せぬか、天下の正道拷問は成るべく後にとするを、汝かくの如き爭はれぬ證を見るも、なほ理に伏さずば、此上は拷問にかけ、苦痛に云はしむるより外なしと云へど、憑司は、なほ理に伏さず、息子にあらず、嫁にあらずと云ひけるを、何處まで猛々しき極惡人ぞや、よつく聞け、憑司、汝は傳吉に恩こそあれ、何を恨むことのある。さやうにひがみたる報い、悴はかくの如き罪人、嫁は狂女、又罪なき汝が娘は、知らず〳〵汝が手にかくる、みな天のなせる惡の報いおそろしからずやと云はすれど馮司はなほ强情云ひはりて罪を逃れんとし、之れはおしつけの極惡呼はり、馮司さやうの詮議に伏すべきものに候はず、心は淸淨潔白、八百萬の神立ちの中に見そなはす御神は候はずやと、かしこくも神を呼び出で、いつはりをかくさんとするあくまでの大膽、たゞすの森の神もにくゝはおぼすらん。越前の守はかつと怒られ。汝馮司、苦痛苦悶をかけまじとて、かやうに悟すものを、何處までも云ひはらんとて、云ひはらするものか。盜人の神あらばともあれ誠なきもの何れの神か御守護せられん、者ども水牢の用意せよとあるに、馮司只今まで、君のため民のためには、火をも水をもくゞらんと存じ候ひしが、罪ならぬ罪にぬれんとは思はざりき、世は末に成りにきと飽くまでの過言、おのれ盜人の世にありてこそさやうの過言を申せ、神國に誰れか誠と聞く人あらん、はやく馮司にくらはせいとて、水牢へと入れたり。あはれ、生きながら地極の責めも、已が犯せし罪、はじめはなほ强情に僞はりしかど遂に苦痛にえ堪へで白狀に及びけり、よりて馮司を梟首、庄次郎を斬罪、お早は八丈島へ、お花は小笠原島へと流されぬ。伊東、川崎等のなまくら武士は榊原どのへ引き渡されて國法に從はせ、さて傳吉は、親に孝、親類に親切、不埒の伯母をすくひ、

罪ある妻をゆるし、村民に親切をつくし候段奇特なりとて賞められ、おせんも又貞操、田舎にたぐひなきを賞され、與惣次もまた老の身をいとはず二人を救はんとせし奇特の心を稱され、引合せにと出されし、太平喜平は、上にへつらはず、潔淨に申立てしをはめさせたまひ、其他はかまひなき由仰せてそれ〳〵歸りたまへり。あはれ天定まりて人に勝つ傳言がぬれ衣も全く解けて、もとの莊屋にれし立てられてお賤もともに才ある人とあがめらるゝものから、己れよりもとめたる罪とは云へ叔父、伯母、從弟の罪に處せられしをいたくかなしみ、叔父親子が明日には、僧を招ぎ、施餓鬼をなして後をとぶらひ、又庄次郎が子は引き取り、やがては上臺に家をつがせむといたはりはぐゝめて、己が子さへあまたまうけて家はいと〳〵榮えけるとなり。

（完）





文林

徳川光圀卿　　東久世通禧

ひのもとのふみの林もきみなくて
　世々のひかりは殘らざらまし

夕歸雁　　高崎正風

花の色も見えずなりぬるすみぞめの
　ゆふべをまちて雁の行くらん

霞映日　　久我建通

糸ゆふのいとのどかなる春の日に
　なびきあひたる朝がすみかな

河春雨　　前田利嗣

露おもるきしのさくらにすみだ川
　ふりくる春のあめを志るかな

歸雁　　水野忠敬

春もやゝなかむとなりし昨日けふ
とこ世をさしてかへる雁がね

深夜歸雁　宮地嚴夫

小夜深くねざめてをれは空たかく
なく音聞えてかへるかりがね

雨中歸雁　北郷久政

春さめにかすみて空はわかねども
たちかへる雁の聲のさやけさ

岡雉　阪正臣

岡のへの小笹か上にちるはなを
はぶきわけても鳴きゝすかな

雉子　鎌田正夫

ほのぐと川のながれ明そめて
岸の去むふにきゝすなくなり

雨後春月　大口鯛二

雨はれし軒のやなぎうちけぶり
つきおもしろき春の夜半かな

蛤　加藤義清

貝拾ふわらべがこどものかげもなし
いそ山さくら見にやゆきけん

川氷　島多豆夫

みこゝろにまかせぬ加茂の川水も
せきとゞむるは氷なりけり

名所春松　松浦辰男

常磐なる松のこゝろもうごくらん
かすみそめたるあまのはし立

春野　遠山英一

ゆくゆくもねぶり催すはるの野の
わかくさの上に蝶もとまりぬ

朝雲雀　岡部譲

明けそむる空にひばりの聲するは
かすみの上にやどやしめけむ

五八一　仝

億百三四八三八九百一七百一十九十二

五八一十十四六千四二八千四十

管公　　大畑弘國

うまのつめつくしの海による波の
まなく時なくきみをこそ思へ

松間鶴　　島宮太郎

朝日かげ匂へるまつにすむたつは
いかにのどけき心なるらん

春曙　　赤松景福

このまゝにしぞしみてまし蝶は花
月はかすみにやどるあけぼの

柳絲綠新　　三輪義方

むすこけのみどり色こき老やなぎ
あさみどりなるいとたれにけり

山家霞　　草野隆道

雪ながらかすむをみれど山ざとの
はるこそ世にはれくれざりけれ

鶯　　五十園德文

なにごともいとまなげなる都路に
のどけさしめてうぐひすのなく

福祿壽と大黒天とすまふのかた　　足立正枝

世の富をあらそふ人のこゝろをど
このたはぶれに神や見すらん

孟母　　近衛貞子

しづ機をたちて諫めしたらちねの
親のこゝろぞにしきなりける

夜話　　蜂須賀隨子

思ふどちこゝろものりてたけ馬の
むかし話りに夜ぞふけにける

旅宿春雨　　前田朗子

春雨にふりこめられてたびやかた
なほつれづれのまさりぬる哉

郭子儀　　柳原愛子

位やまさきみがのぼりしたかねには

よのうき雲もかゝらざりけん

引田部赤猪子　　小池道子

かりそめのみ言畏みあだし野の
露にはぬれぬ女郎花かな

溪梅　　北島以登子

打霞みうめのこずゑは見えねども
たにまよりこそ風かをりけり

庭春草　　南郷柳子

花のもとに宴せん日もとほからじ
にはの芝くさあをみそめけり

垣若草　　大谷籌子

若くさの萌いづるころはあれ果し
かきねのもともなつかしき哉

徳川光圀卿　　小川直子

たちおほふ大樹の木のま吹わけて
筑波のかせや日かげみせけん

雲雀　　河村重子

すゞなさくはたの中みち朝ゆけど
雲雀のこゑぞそらにかすめる

貞婦渡邊はな女によみてをくるうた　　遠山いね子

ふる雪のしたにさけども梅のはな
うもれぬものは匂ひなりけり

きくからにゆかしきものは麗しき
こゝろの花のにほひなりけり

江若菜　　土岐いく子

花がたみ手にたづさへて少女子が
千代をふる江のわかなつむ哉

人力車　　安東菊子

小車をひともひく世となりにけり
むかしは牛のわざときゝしを

春旅行　　足立三尾子

急ぎゆく旅にしあらねど咲き匂ふ
花のあたりにやどやからまし

英照皇太后の大御喪の時よめる

赤松景福

咲凍の文にかしこき、大君の御親の命、御位は高くいまして、御心は穏にまして、大君を始めまつりて、御めぐみの廣く厚くて、天の下賤しき民も、子の如くおもほしめせか、かしこくもかくは言繼く、御田うゝるさをとめどもを、宮の邊に近く召出て、そがうゝる業みそなはし、貝拾ふ海人の子どもの、海べたに在りときかして、そが拾ふ業も見ましき、かくのみの業には非ず、御園生に桑うゑ賜ひ　宮内に蠶飼ひ賜ひて、梓弓春さりくれど、萠出る小草をふまし、咲匂ふ花見ましつゝ、御手づから桑をつまして、成出る新桑繭を、いつしかと待見たまひて、その業のいそしき樣を、御身づから志ろしめしきと、聞まつる民の心も、大船の賴みたりしを、いかなれか今年の春は、俄にも神上りましゝ、そこ故に御民ことごと　闇夜なす思ひまどはひ、おのが成す業をもなさで、かの宮にありし桑子の、まゆ籠り御喪に籠りて、なげき居るかも、



雜報

●東宮殿下の御仁慈　申すも畏かれど、東宮殿下には、御學事御勉勵の御暇には、つねに慈善の事に御心をかけさせ給ふとは、兼て承り侍ることとなるが、さき頃も、侍醫局勤務にして京都在勤なる安藤精軒氏が、さる用むきありて去月十日、上　京のとき、沼津の御用邸へ御機嫌うかゞひとして參殿したるに　殿下には拜謁仰せ付けられしのみか、御別邸内を拜觀せよとかたじけなくも、御親ら導かせられ、なほ京都のことなどくさ〴〵と御下問ありしに、氏には、昨年十月　殿下の京都に御輦を駐め給ひし折柄、特に慈善事業の情況を御取り調べ遊ばされし事もあれぞとて、己が前年思ひ

立ちて力を盡しつゝある施藥院の現況を奉答したるに殿下には御耳を傾けさせ給ひ、なほ忝くもいかなる障りにも撓まで大成を期せよと、御奬勵の御言葉ありたれば、氏は感涙に咽びて御前をしりぞき、京都にかへり、かねて施藥院再興に力をつくしゝ圖書頭清岡公張子のがり　殿下より、いとありがたき御仰せを蒙りし次第をしらせやりける末に

みことのり身にも餘りてもれ出る
なみだのほかにことのはもなし

とかき送りけるに、清岡氏もまた直ちに

世を思ふなみだのふちにこぐ船は
いくうきひとをのせわたすらん

と返歌をくりたりとなん。身には萬金を擁しながら、おのが口にうまき物食ふことをのみつとめ、已が身に美き衣つくることをのみ心がくる人、少しは慈善の事に思ひあたらずや。

●久邇宮殿下御婚儀期日　久邇宮邦彦王殿下は島津忠重公姉君俔子(二十一)とか御結婚の御内約とゝのひ、御結納をば去る十日をもて御取りかはし遊ばされし由なるが、その御大禮は多分來る九月末か十月はじめのころ、京都の御本邸にて行はせらるべしと承りぬ。

●師弟共に泣く　師弟の間柄日々にうとまりゆく今の世に、さりとはげに聞くもうれしき事なりや。所は德島縣桑野村、そこの尋常小學校訓導東明小兵次氏は常から溫顏生徒に接し、慈愛生徒を導きしかば、生徒もまた師を敬ひ尊ふこと、さながら父母のごとくなりしが、さき頃氏は高等小學校に轉任するに至り、告別の辭をのぶるに、その半ばに至るや、情きはまりて師弟共になきて仰ぎ見ること能はず、傍に居るものさへその心ねのおし量られてえたへずありたりと。さるはどなれば父兄もいと別れを惜みて、銀杯一個を贈りきとなん。

●兄弟會　思ひやれ使ふも人の思ひ子をわが思ひ子に思ひくらべて」とはいふもの丶、さて實際を見れ

も、使ふ者はむごくし、使はるゝものまた主をうらむなど世にはいと多きぞ。さるに、聞く、磐城國三春町宗像藤右衛門氏はこのわたり屈指の豪家のよしなるが、慈善の心ふかくして、婢僕を見ること骨肉の子弟もたゞならず、されど婢僕等もまたその恩に感じて、數年前より兄弟會といふものを組織し、毎年陰暦正月七日集會して主家の萬福を祈るなりと。本年も例會を開きしに、集會するもの七十五歳の老人をかしらとして卅七名の多きに及びたりといふ。

◉美擧　陸奥國の豪農菊池健雄氏は、毎年陰暦正月十一日倉開きと稱して、倉中の米穀あまた貧民に施すことなるが、當年はおのが四十二歳の厄年にあたりたるをもて、更に厄よけの式を行はんものとて、貧民及び債務者を集め、其面前にて、貸金證書二千余圓を燒すて、なほ玄米百六十余俵を分與し、なほ又數百金をわかちて小學基本財産に寄附したりといふ。

また越後下田郷の人長谷川半平氏は、貧民の製作せし品は、その入用なきと入用なるぬとにかゝはらず、必ず之を買ふといふ。さる程なれど此の頃も、貧民のために灌漑水路開鑿の工事をおこし、獨力にて賃金を支拂ひ、かねて村内をして旱魃の患なからしめたりと。慈善の美擧は、いつ聞くも幾度きくも尊く思はるゝなり。

◉擧家投身と少女の赤誠と　神戸寄留なる岡山縣人竹内正倫氏は、實母と六歳なる女子と三歳なる男子と、都合四名の家族なるが、貧苦のあまり、一同投身をくはだて、母は三歳の孫を抱き、正倫は長女を抱きて投身し、母と男子とは死にしが、正倫と長女とはあはれなる事にて漸く助かりきと。讀む人思はれよ、世の半面は實にかくのごとき事の多かるを。さるにこの事を傳へきゝて、その生き殘りたるものゝために左の書面に金員をそへて、山陽新聞社に寄せたるものありと、うたゝ人をしてなかしむ。

私等は、明治廿三年御當地へ參り其後母始め二人の姉、一人の兄死亡いたし、今年母の七年にあたり、

次の兄もまた死亡いたし、その次の兄は近江へまゐり、父は備中にをり、末の兄と只三人ぐらしの淋しさに、姉妹よりて新聞をよみ候處、一家四人の身投あり、覺えず落涙致し候、幸に父より受取り候先月分仕拂殘り二十三錢五厘これあり、郵便切手にかへ差上申し候まゝ義捐金の序も御座候はゞ竹內さよ樣へ御送り下され度願上げ候

三月二日　窪田しげよ

小學生徒　妹　まさ

●渡邊筆子と津田梅子　二女ともに昨年米國に遊びたるが、梅子はデンバア市に開かれたる萬國婦人教育會に出張し、筆子は病のために舊冬歸朝したり。其の後梅子は獨り英國にわたり、今ごろは倫敦に滯在し、ゆる〳〵學事の取調をなし居れり。なほ英國寺院僧正ピツカルステツス未亡人よりも、ケンブリツチ及びチエルテナムに赴き、當年中は兩所にて、諸種の取り調べをなし、來年はオツイスオードに至り、女學校に入學して親しく女子教育の實況をも察し、三月下旬學期終了の時までは滯在することゝせよなどの注意をうけけれど、梅子もその意に從ひ、本年六月頃までは、是非共英國に滯在することに決心したりと、在英加藤公使より、青木外相に送られたる書信にありたりといふ。

●博士の數　文部省最近の調査によれば、本邦における博士の學位を有する人員は、合計百二十二人にして、內理學博士三十二人醫學博士三十四人工學博士二十七人法學博士十七人文學博士十二人なりと。

◎京都府高等女學校　は寺町荒神口下る府立師範學校舍へ移轉して、校舍を新築せんことゝなりをれるが、其新築設計は此程同校長河原一郞氏東上し、文部省に稟申して已にその認可を得たり。又新定の高等女學校令は明年四月の學期より實施することとなれるが、大抵は現今の校則を改むるに及ばずして、生徒定員も、既

設學校にして特別の事情あるものとし、八百名まで入學せしめ得ることとなる樣稟請せん積りなりとぞ。

●高等女學校支校設立の計畫　今回定められたる高等女學校令に由り、岡山にも高等女學校を設置する都合の由なるが、同縣下津山の敎育家及び有志者等は、此の際是非共津山に支校を設けんとの計畫ありて、從來ありし同地の淑德館と稱する私立女學校は、本年度より地方費を以て補助することゝもなり、其基礎漸く整理せるにより、之を以て直ちに支校に充てん考案のよし。

●稀代の指環　福岡縣の豪家貝島太助といへる人此程圖らず本邦の三品と稱せらるゝ指環の一個を手に入れたりと、その本邦にある最貴重の三個の指環中一は申すも畏かれど　皇后陛下御愛用あらせらるゝものにして、一つは岩崎男の秘藏にかゝり、今一つはさきつ年某殿下が特に歐洲より御取りよせになりしに何れへか御遣はしになりて、このかたその行くへの知られざりしが、いつしか池の端の骨董物商飯塚某のものとなりて、そが珍重しをる由貝島の聞く處となり、たゞちに飯塚にとき、金一萬二千圓をなげうちて求めたるなりと、この指環には七個の大なる金剛石と其他珍らしき寶石のちりばめありて光りまばゆきほどなりとぞ。

●長生の術　(一)八時間眠るべし(二)右向にいねべし(三)寢室の窓を開きおけ(四)寢室の入口に屏風をおくべし(五)毎朝適度の溫水浴を試むべし冷水はよろしからず(六)毎朝々飯前に運動すべし(七)なるべく少量の肉を食すべし(八)成人は牛乳をのむべからず(九)多量の穀類を食すべし(十)細胞の發達を妨ぐる酩酊をさくべし(十一)毎日戶外運動をなすべし(十二)一切の家畜を室內におくべからず(十三)なるべく長く田舍にすむべし、これサー、ジエームス、ソーヤー氏の數へたる長生術の要件なりと。

●親の職業と兒童の性質との關係　につきて或る新

聞の記しヽものを見るに、性質殊によしといはるヽ學齡兒童の親の職業は、學校敎授七人、官吏四人、會社員三人、商家二人、農家二人、軍人一人、醫師一人にしてその最も多きは敎授の子弟なり。次に性質殊に惡き兒童の親の職業は、官吏八人。軍人五人、商家三人醫師二人、敎授一人、會社員二人にして、その最も多きは官吏と軍人の子弟なり。而して學校敎授の兒童の性質は、着實、無邪氣、温順、愛憐の性情を有し、醫師の兒童の性質は頑固、輕疎、傲慢、猥淫、虚言、淺薄の性癖あり。軍人の兒の性質には大膽、不潔、輕躁、傲慢、横着、狡猾、忍耐力に乏しきなどのくせありと記したり。實際いかにや。しかし親の職業の異なるにつれて、兒童の性質にも影響するところあるは蔽ふべからざる事實なれど、家庭敎育の正しきを得んこと望ましきいたりなりかし。

●みやこ踊りの歌　京都にて來月七日より三週間とかり、花見小路の歌舞練場にて都踊ある由なるがその唱歌は

「あめつちさ、ひらけしさほのしたゝりの、中にあれますよもつ神、わけて尊きふたはしら、千代〻代の壽を、いのり〳〵てこのはろも、くもらぬ御代のすがたなれ「こゝさらこゝにふりつもろ、雪のあけぼの、たちならぶ、木々のこすゑは時ならぬ、花をよそほふ、そのながめ、よい〳〵よさの海つらに、かゝろやあま のはしだても、きれさのもんじゆう、きれはせぬ、ゑにしをむすぶ、いもせなか「ゆかしゆかしの、みやこさてやさかの里のさゝぶりを、ひらきそめにし、おどり子の、花のかほばせたよ〳〵さ、なびけなびける、糸ざくら柳のまゆに、三日月の、かゝろやつけの横くしの、さしもしらはの舞すがた、なたれの蝶の、よれんなく、たはむれ遊ぶ、羽つがひを、こゝにうつして、しなよくも、はこぶあゆみのおもしろや、さてふみわけんみちのくの、ちかにはあらで、遠まさろ、千鳥かもめも、なきつれ〻浦は名におほふ、松島や「あかれさす、かげあきらけき、日のもさに、ほまれをさめし三津の浦「ちしまにおふろ、常磐木の、みどりのすゑにたちならぶ、標はそれさ、しほがまの、からきうき世も、いつしかに、かわり〳〵し島の名の、そのあらましをかきちらす、なみのたよりさ、かりかれの、島をよそめにうきしづむ、あまの身なれば、ぬれぎぬを、着てやゝみなん、こゝみのゝ、ふづくしみ〳〵うき戀も、はやよろ年の、おきなしま、やつろゝかげを、月影に、見ろもはづかし、うさぎしに、浪間をはしろ入船の、島に出ぶれの、うなばらや、こゝはいづこさ、いつくしま「宮居けたかく、造りにし、遠きむかしを、わたつみの、そこさもしらす、よ

ろ涙の、よるひるさなく、さす汐に、さも潴たかくからげたろ、ふりは名にある大鳥居、それからそれさ、うちめぐろ、浦は七うら、七姪子、そのすなさりのさほの歌、神樂の笛の、さへ〳〵て、太鼓鞨鼓の拍子よく、うつやうつゝの、うなひ子の、これやまことの八少女の、かざしの花の花くらべ、よそほひつれて玉くしげ、ふたかは日もさしほらしの、蝶もさまらん袖たもさ、かへす〳〵もあさけなや「時しも今は春のなかは、西に東にさきそろふ、花にうかろゝもろ人や、これぞ目出度世の榮ね。

●女性の軍醫　米國ワシントンコルムビア大學を八年前に卒業したる女醫學士エロク、ニユーコム、マクジーは客年八月二十九日陸軍々醫（少尉相當官）に任せられき。同學士はすでに先き頃の米西戰爭にも從軍して男性軍醫にもれとらぬ功績を顯はしたるなりと。

●新郵便切手　來月一日より郵便税引き上につき左の切手の樣式及び刷色もまた改まりぬ。但し當分從前のものを用ゐてもよろしき由

一 三錢切手　嬌栗色　一 一錢切手　赭色　一 五厘切手　從前の淡黑色

●支那行の小包郵便　天津、厦門の帝國郵便局にては來月一日より小包郵便を取り扱ふと。

●子孫繁昌　播摩村上某の母せん女八十八の壽宴を開きしに、子孫列席せしもの六十一人、せん女自ら餅をつきて饗えきと、昌なるかなし

●世界の結婚數　一日に三千。年々の自殺實に十八萬人。世はさま〴〵のものなるかな。

●婦人の髮　つなげて延長四十哩、時計の齒輪も一年休まずて三千五百哩を旅行すと、げにや塵も積れて山となる。

●新刊しなさだめ

●世界お伽斷第二編　五色の石　博文館發行　定價七錢

例の小波氏の編にして、十八史略の始めのほどに女媧氏が五色の石を煉つて天を補ふと書いてある事柄を、他の書とてりあはして敷衍されたるものならし。柏皇英皇が力をあはして康同と戰ひ康同が大鐵捧を振つてわたりあふ所など、兒童の勇心をれてさざらめや。祝

融の助けを得て剛頑なる康回終に屈する所など、嘸やおもしろくよまるゝならん。康回が不周山に頭をくだきて天柱くだけ、地維かく所の畫何ぞ凄きや。女媧氏が五色の石を錬りて天に登る所の畫何ぞ奇く愛らしきや。本書はなほ之に指南車といふ一節をそへたり。只よみもてゆきて目障りになるは?の鍵、!の孑孑、つまらぬ癖なるべく、東京語の訛りなる「落てちる」などそのまゝ用ひられたるなどは少年教育に志ある人のすることはと思はれずいかに、己れはかくなん思ふ。

● 俳諧叢書 第一編　俳諧大要　獺祭書屋主人編　定價貳拾錢

俳諧叢書第一編としてほとゝぎす發行所より出さる。嘗て日本新聞に連載せられたるものにして、名の如く俳諧につきて色々の心得となるべきことを記せり。俳句の標準、俳句の種類、修學第一期第二期第三期全編を七章に分ちて說けり。名家の俳句をならべて、そを色々と說明批評したるなど學ぶものゝ爲のみならず、外の者にても心を養ふこと多からん。

● 女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題
……………………
……………………
住所
姓名
……………………
……………………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題
……、……、……。……、……。
……、……、……。……、……、……。
住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得



教の庭

三月廿日兼題　曉歸雁

天　山形縣新庄町　金森俊子

いひしらぬ哀をこめてほのかにも
　有りあけの月にかへる鴈かな

地　羽後國平澤町　佐々敏子

あだにちる花をみじこやあけ方の
　かすみがくれに鴈のゆくらん

人　越後國中蒲原郡嘉瀬村　小出しきみ子

あくる夜を惜みて殘る月もあるに
　つれなく歸るあまつかりがね

秀逸　（十五首）

ちる花のうきめ見まじとさし櫛の
　あかつき高くかりかへるらん　東京　住山幾子

朝ぼらけかすむみそらをかりがねは
　聲もみだれてたちかへるなり　福島　小林文子

あけやらぬみそらに高く聲すなり
　かすみわけつゝ雁かへるらむ　丹波　羽室象子

歸りゆくふるさとゝほみ雁かねの
　あかつきかけてたち急ぐらん　東京　横山柳子

有あけのつきにわかれてゆく雁は
　はなにこゝろも止らざるらん　三河　永井さい子

春の日にわかれ若しとかげみえぬ
　あかつき暗にかりかへるらん　肥後　徳永萬壽子

あけがたに雲井を渡るかりがねは
　おのがこしぢの春やこひしき　東京　牧瀬かう子

有明のつきやいかにとながむれど
　かすめるそらに雁かへるなり　東京　小野寺てふ子

白みゆく花のなかめをよそにみて
　何いそくらむはるのかりがね　肥後　田代艶子

花の山こゆるもうしとほの〳〵と
　しらむもまたで雁のゆくらん　信濃　寺尾さかへ子

越にますわがたらちねに言つてよ
　かへるをいそぐあかつきの雁　東京　藤井よし子

かりがねも花にこゝろや殘るらん
　なきつゝかへるあかつきの空　信濃　秋島きみ子

赤星のまださえやらぬあかつきに
　かすみのおくを雁かへるなり　東京　下田春子

花のかをつむさにこめてあけ方の　山形　小池つる子

かすめるそらにかへるなり

古さとのゆめやみつらむ春のよの
　わくるもまたで歸るかりがね　山形　三段崎　美智子

古さとの花ちらぬまといそぐらん
　わくるもまたで歸るかりがね　伊豫　森　こと子

（以下原稿到着順）

さく花のにほひゆかしきあかつきを
　みすてゝかりのいづちゆくらん　佐々小琴子

あかつきに聲をかすめてゆくかりは
　いづこのはなをしたふなるらん　佐々有鄰子

大そらにはなのにほひやみちぬらん
　あかつきかけてかへるかりがね　坂本　遊多歐子

ありあけの月に名ごりをさゞめつゝ
　かすみがくれにかへるかりがね　佐々敏子

花の香をつばさにふかくあかつきの
　いへづとにしてかへるかりがね　富田源子

あかつきのおのが常世やしたふらん
　はなをみすてゝかりぞゆくなる　吉富彦子

朝まだきいそぎながらにゆくかりは
　はなよりほかのともやこひしき　村上昌子

ありあけの月のひかりのさやかにも
　つばさならべてかへるかりがね　松永信子

横ぐものさやまはなるあかつきに
　おのがとこよにかへるかりがね　平山政子

いひしらぬあはれぞ深きあかつきに
　つらをならべてかへるかりがね　森川儀子

ありあけの月をのこしてかりがねの
　はなゝきさとになにいそぐらん　國木とよ子

みやこをはよそに見なしてあか月に
　つばさしほれてかりかへるなり　久米貞子

あかつきにたがたま章かかきちらし
　こゑもほのかにかりかへるなり　仁保基子

山のはにつきをのこしておのれまづ
　なきてこゆくはるのかりがね　吉田季子

あかつきの空ほのかにもなきつれて
　かへるもあはれあまつかりがね　彌富濱子

西やまにかげおちかゝるあかつきの
　そらをかすめてかへるかりがね　佐々富枝子

ふるさとに花のたよりやいそぐらん
　あかつきかけてかへるかりがね　溝口貞子

春かすみそれのみならでありあけの
　つきをもすてゝかへるかりがね　中山登美子

ありあけの月かげしらむおほぞらを
　なにいそぐらんはるのかりがね　安孫子かづ子

さく花の名こりおもはであかつきの
　つれなきそらにかへるかりがね　矢名

さしくしのあかつき月よつらなりて
　かへるさいそぐあまつかりがね　横山すが子

あかつきのまくらに近くきこゆなり
　かへるさつぐるかりのひとこゑ　小野けさじ子

あかつきの鐵にせかれてかりがねの
　ゆくやきはゆくつきのひかりも　林口京子

來んあきを月にちぎりてあかつきの
　くもに消はゆくはるのかりがね　道廣彌榮子

いまはさて思ひたちけんあかつきの
　そらになく／＼かへるかりがね　彦坂尋子

なくこゑを月にのこしてよこぐもの
わかるゝそらにかりかへるなり　鈴木綠子

古さとをしのぶねざめのあかつきに
うらやましくもかへるかりがね　眞島千鶴子

よこ雲はみねをはなるゝあかつきに
さこよをさしてかへるかりがね　石井豐子

影みねぬあかつきやみをわかれ路と
かりもみこしにかへりゆくらん　德永廣子

ほのかなる星をこゝろのしるべにて
あかつきやみにかりかへるなり　小森田輝子

あり明のつきかげしらむくもまをば
こゑばかりしてかへるかりがね　江口華子

年ごとに來なれしさとをあさにみて
はやたちかへるあかつきのかり　澤田春子

あけわたる春のけしきをあさに見て
なくなくかへるかりのひとつら　下多廣子

ありあけの月はうすれてかへるかり
あさとたかにもみねわかぬかな　林環子

故さとになにいそぐらむのこるよの
あくる間をだにまたぬかりがね　高島齋子

ふるさとの花ちらぬまといそぐらん
あかつきそらにかりがねのなく　高橋銀子

いづこまでおもひたつらん春のひの
あかつきかけてかへるかりがね　尾立さみ子

遠ざかるこゑをしるべにながむれば
ありあけのつきにかへるかりがね　山根久子

花さりのゑならぬはるのあかつきを
そらに見すてゝかへるかりかな　杉山綠子

ふるさとの雪やこひしききねぬまさ
田村多豆子

あかつきかけてかへるかりがね

かりがねのこゑをかすめて歸るなり
かげさへわかぬありあけのそら　清河照子

あかつきのゆめおぼろかし歸りゆく
かりのこゑこそあはれなりける　山下茂登子

故さとにたれかまつらむあかつきの
ゆめらむすばずかへるかりがね　向田銀子

人ひとのまた起きやらぬあかつきに
ふる巣をさしていそぐかりがね　乾喜代子

ありあけのかすみのひまに聲もれて
かげもかすかにきゆるかりがね　椎野ぬき子

ありあけの月になきつゝかへるなり
かりはなごりやつきぬなるらむ　井上まさ子

濱邊にはまたこむあきをちぎりおきて
あかつきちかくかりかへるなり　井上まき子

老が身もしばしまどろむまくらべに
あかつきかけてかへるかりがね　姫野ねい子

いまはさてこしぢにいそぐ雁がねの
こゑもかすめるはるのあけぼの　龜山富子

あかつきにこゑもかすみてかへる雁
われおくれじといそぐなるらむ　龜山さく子

のこるよの月のひかりにこしかたの
みちもたがへずかへるかりかな　野出禮子

歸りゆくかりのなくなるこゑはして
あふげばかすむありあけのつき　守川清子

あくるをも待たでと渡るかりがねは
あきをちぎりてかへるなるらん　小野久貞子

殘るよのつきかげふみてゆくそらに
ふるさとさしてかへるかりかな　三輪須惠子

春かすみたちおくれじとうちつれて
　あかつきやみをいそぐかりがね　小村信子

ほのぼのと明わたりゆくおほそらを
　おくれさきだちかへるかりがね　清水すみ子

さし櫛のあかつきかたになくかりは
　こし路へいそぐともをよぶらん　名倉節子

ほの〳〵とあかつき方のやまのはに
　今日はこしぢにかへるかりがね　楢　梢子

ありあけの月もいるさのやまのはに
　ひとりみすてゝかへるかりがね　高橋信子

むかしへを忍ふねざめのあかつきに
　しらずがほにもかへるかりがな　西村芳子

ありあけの月はうすれてしらみゆく
　くもゐはるかにかへるかりがね　松原常子

今ははやはなのみやこにかりがねは
　うしとやかへるこころとなりけん　西村虎子

はるの夜のあかつきつきよ霞むなり
　おのがとこよにかへるかりがね　千葉里子

花のかほつばさになしてかりがねは
　かすみがくれにかへるなるらん　横山初音子

ひさかたのあまつかりねの聲すなり
　あかつきかたにかげのきえゆく　水村錄子

あかつきのつきかげすめる雲間より
　つばさならべてかへるかりがね　淺田延子

見るまゝに遂ざかりゆくかりがねの
　なごりこひしきはるのあかつき　小川金子

まてしばしかすみを分けてゆく雁よ
　なにとてはるをみすてゝはゆく　小川富子

かれのれに驚ろかされておきつれば　深田綾子

　あかつきかけてかへるかりがね

かりがねの聲のゆくへもしらぬまに
　つきもしらみてよはあけにけり　長島諒子

ありあけのつきおちかゝる高根より
　きくもつれなきかりのひとこゑ　根岸英子

ねもやらでまちしかひあり有すに
　こしぢをさしてかりぞかへれる　神田久子

玉づさ誰がをたのみてかいそくらむ
　あかつきかけてかへるかりがね　山田婦美子

見し夢もまださめやらぬあかつきに
　わかれをつぐるかりがねの聲　山田靜子

さばかりはなといそくらん有あけの
　つきになく〳〵かへるかりがね　山田璋子

來んあきを月にちぎりてかへるらん
　あかつきそらをわたるかりがね　小野かつ子

古さとはかくもこひしきものなるか
　あくるもまたでかへるかりがね　山崎ひろ子

朝ぼらけかすみこめたるおほそらを
　いそぎてかへるひとむらのかり　駒井うたの子

やよやまてことつてやらん故さとに
　あかつきかけてかへるかりがね　濱野時子

ふるさとの春をこひしと音にたてゝ
　あかつきふかくかへるかりかな　深谷清子

ひとこゑはゆめ路にきゝぬ春の夜の
　おしあけかたにかへるかりがね　岡部やよ子

東雲にひとつら引しうすすみは
　こし路にかへるはるのかりかな　竹村竹里子

なかむれは雲ゐはるかにありあけの
　つきをよこぎりかへるかりがね　阿部與字子

歸るかりこゑやいづこさながむれば
やがてわかるゝみねのよこぐも　山本能子

詠むればはなよりしらむあかつきの
そらにこゑしてかへるかりがね　諸井久耳子

こゝろをは花にのこしてゆくかりの
つばさもしめるあかつきのそら　吾妻ちか子

かりがねはたれに契りていそぐらむ
あかつきがたのつゆにぬれつゝ　柳田里子

いさましくさりの八聲におくられて
小くらきそらをかへるかりがね　中桐杏子

いかばかり己がさこよをいそくらむ
しのゝめまたでかへるかりがね　戸塚てつ子

ふる巣のはなさかぬまさあかつきの
またきに立ちてかへるかりがね　舘脇ます子

明ちかきそらにかすみてみゆるかな
こし路にかへるかりのひさつら　杉浦糸子

有あけのつきになごりこゑきけぬ
はこれのせきをかへるかりがね　篠崎ふさ子

ねざめしておもひやたちし小雨ふる
このあかつきにかへるかりがね　篠崎りん子

ありあけの月にわかれをなしむらし
なきてこしぢへかへるかりがね　志岐榮子

いかにせんあかつきかけて行く雁の
かすみのうちにこゑのみぞする　根岸登子

今はさてかりもこしぢにいそぐなり
おぼろづきよのありあけのそら　吉岡純子

明けはては花にこゝろのさまるかさ
あかつきかげてかへるかりがね　吉岡歌子

さし櫛のあかつきかけてふるさゝに　尾崎蕣子
なにいそくらんはるのかりが音

春の夜のあくるも待たでふるさゝに
立ちいそぐかりのこゑあはれなり　最上しげ子

咲く花のいろよりしらむやまの端を
いそぎてかへるかりのひさつら　谷口ふさ子

あかつきのかすみに影は見はれども
鳴く音さやかにかへるかりがね　谷口貞子

古さとにかへり行くらむかりがねの
あかつきいそぐこゑのきこゆる　高橋蔦子

月かげもうすくなりゆくあかつきに
はるをすてゆくかりがねぞする　酒井小樂子

あかつきを告げくる鐘におどろきて
かりはいづこへかへりゆくらん　田中ひろ子

さし櫛のあかつきかけてかへるなり
かりのたまづさかきつられつゝ　早川信嘉子

こよいまたいづくの宿をこゝろあてに
あかつきかけてかりがへるらん　上杉光子

今はさてかりがへるらむよこぐもの
わかゝるかたにこゑのきこゆる　森俵文子

あかつきになく〳〵歸るかりがねは
あかぬ名ごりをはなにつげつや　楢崎縫子

おもしろき月とはなさのあけぼのを
見すてゝかへるかりのひさつら　河村君子

あかつきの鐘のあはれにしみわたる
くも井をかへるかりのひさつら　吉田碩子

ありあけのつきかげのころおぼろに
かすみてかへるかりのひさつら　吉田元子

古さとにわかゞへりしさ見しゆめの
すゑしなりてかかりのゆくらん　河越輝子

よしのやま花のさかりをよそにして
あかつきがたにかりかへるなり　本庄志雅子

あけぬ間と花も見すてゝゆくかりは
こし路のはるやいかにこひしき　名取正代子

ふる里にたれまつとてかあかつきの
わかるゝくもにかりぞきえ行く　坂田きみ子

ほの〳〵と花かげしらむあけぼのゝ
そらにきえゆくはるのかりがね　名取よし子

さく花をあさにのこしてあけがたの
かすみにきえてかりかへるなり　田代喜和子

ありあけの月をなごりにのこしおきて
かへりもゆくかかりのひとつら　田代綾子

をりもあれ花にかすめるありあけの
つきをのこしてかへるかりがね　大谷友子

さくら咲くあらしの山につきおちて
かりがねとほしはるのあけぼの　小笠原元子

ありあけの月を名ごりにたちかへる
かりのゆくへはいづこなるらん　濱田なほ子

明けそめてかすみにのこる月かげを
あさにのこしてかへるかりがね　新浦美津子

雲に入りかすみに消えてかりがねの
かへりをいそぐはるのあけぼの　服部錦子

松かぜにかよへるこゑもしのゝめの
かすみに消えてかへるかりがね　服部桑子

あかつきの月をかすめてふるさとの
そらなつかしくかへるかりがね　青木たま子

うら〳〵とかすむ浦和は見もやらず
こゑほがらかにかへるかりがね　穴水みよ子

かへる雁なく音かすみてありあけの
つきかげしらむしのゝめのそら　田江糸野子

今はとてなごりをしげにかりがねは
なく〳〵ぞゆくあかつきのそら　佐々木さく子

うちかすむ花のよこぐもおしわけて
いつこのさとにかりかへるらん　内本道子

くれゆかばたび路やうきと雁がねも
あくるをまたで立ちかへるらん　山形花子

別れゆくかりのつらくもいそぐかな
見おくるそらのまたあけなくに　松本君子

あか月のかすみがくれにゆくかりも
しのびかねてやねにはなくらん　伊勢歌子

ほがらかに山きはあくるをりしもあれ
みこし路さしていそぐかりがね　佐々木やす子

こがれにもます春の夜をよそにして
かりかへるなりしのゝめのそら　佐々木千代子

夜もすがら月になごりやをしみけん
あかつきかけてかへるかりがね　鵜濃喜代子

あけやらぬをぐらき空にたつかりは
なにをしるべにかへりゆくらん　坂田廉子

ふるさとのこゝろもとなくあか月を
かけてゆくらんかへるかりがね　八木沼里子

おぼつかな秋のちぎりやありあけの
つきになく〳〵かへるかりがね　岡山さり子

今はとてみねをはなるゝよこぐもと
ともにきえゆくはるのかりがね　阪口服子

ふるさとの春にあはんとかりがねの
かへりやいそぐあかつきのそら　佐々木玉子

ほのぼのとあけゆく花をよそにして
かへるやいづこかりのひとつら　木下菊子

あかつきのそらに雁がねきこゆなり
　こしぢのわかれいまぞ知らるゝ　寶屋壽子

かりがねのわかれをつぐるひとこゑに
　またあかつきのゆめをさませり　福島英子

こきつるゝ船とも見えてあかつきの
　雲のねみちをかへるかりかな　前田かつ子

雁がねはかすみとびわけかへるなり
　ありあけのつきにあきをちぎりて　高橋信子

浦なみのたちもいそがぬしのゝめに
　ともよびかはしかへるかりがね　永井しん士

ゆく厂ははなにこゝろのあさまだき
　ゆきふるさとになにいそぐらん　外川金子

なく音のみほのかにもれて朝まだき
　かすみがくれにかりかへるなり　外川いと子

花さそふうき世のかぜやいとふらん
　あかつきかけてかへるかりが音　高橋隆子

あさぼらけうなばら遠くゆくかりの
　こよひのやどやいづこなるらん　五十嵐美津子

有あけのつきかげしろしかりがねの
　みちはたがへずかへりゆくらむ　李宋貢實子

あかつきのかすみに影はみえねども
　こゑのみもれてかへるかりがね　山中糸子

あかつきのねさめの床にきこゆなり
　くもまをかへるかりのこゑごゑ　安積しげ子

ありあけの月はのこれどみえぬまで
　かすめるそらをかへるかりがね　小林久子

里ありとおもひゆくらしありあけの
　つきをみすてゝかへるかりがね　菅谷ほみ子

歸るべきときさきおくれじとしのゝめの　森品子

　そらをいそぎてかへるかりがね

ありあけの月をのこしていくつらの
　かりはいづくへたちかへるらん　失名

さかりなる花のみやこをあとにして
　あけゆくそらにかりかへるなり　平井登記子

たがためにいそぎゆくらん雁がねの
　なくねもひゞくほしあひのそら　西内花子

あかつきの空まちかねてみやこぢを
　見すてゝかへるかりのひとつら　小幡光江子

あかつきのゆめやぶられて窓の戸を
　あくればかへるかりのひとつら　寺尾まさ子

今はとて名のるを見ればありあけの
　つきになくなくかへるかりがね　宮川流子

花見てはなごりつきじとおもひけん
　あかつきふかくかへるかりがね　篠澤琴子

あかつきのねざめにきけば今はとて
　とこよにかへるかりのひとこゑ　稲原藍子

けふといひて契りおきけむふるさとに
　しのゝめまたでかへるかりがね　羽根田米子

わが里をあかつきちかくゆくかりの
　こよひのやどはいづくなるらむ　杉田のぶ子

いそがずは花の咲かんをかりがねの
　あかつきかけてかへりゆくなり　勝山忠子

月かげのおぼろにかすむありあけに
　こし路をさしてかりかへるなり　岡田秀子

ありあけの月をしるべにひとむれの
　ふるさとさしてかへるかりがね　池澤天興子

あまの戸のあけゆく空をつらなりて
　なきつゝかへるかりのひとむれ　加藤壽惠子

なくこゑは秋のかたみやあかつきに
なごりをしみてかへるかりがね
加藤桂子

さし櫛のあかつきかけていそぐらん
おのがこし路にかへるかりがね
絹川ますゑ子

しかすがに花になごりやありあけの
つきになく〳〵かへるかりがね
日吉あさ子

かくはしき風になごりやありあけの
つきになのりてかへるかりがね
高屋はきの子

いまはさてまたこん秋をちぎりつゝ
あかつきかけてかへるかりがね
前原つた子

はるさめも晴れて嬉しきあかつきに
ものおもへごやかへるかりがね
井手くら子

かへるさにわかれをつぐる雁の音も
かすみにきゆるはるのあかつき
三苫なつ子

わかれをはうしと思ひてしのびねに
あかひきかけでかへるかりがね
本田とし子

啼きわたる聲ばかりしてあかつきの
かすみのそらをかへるかりがね
朝岡たつ子

ありあけの月になく音はのこりけり
はなを見すてゝかへるかりがね
宮崎せん子

のどかにもかすむ雲井を余所にして
あかつきかけてかへるかりがね
竹腰隆子

ありあけのかたむく月もほの〴〵と
かすみにもるゝかりのひとこゑ
竹腰八千代子

ほの〴〵と明けゆく空になきわたる
かりやふるすをわすれかねつる
秋山錦子

あけのころみ空をあさにのこしつゝ
こゝろづよくもかへるかりかね
秋山もみぢ子

わが影はかすみにづゝみあかづきに
これやわかれとゆくかりが音
太田さだ子

ちぎりおきし越路のはるをしたふらむ
あかつきかけていそぐかりがね
藤澤萩子

いまはさて群をほすつるかりがねも
しばしたゆたふありあけのそら
菅原松子

あかつきのかすめるそらをゆく雁は
このちのはるをしらてすぐらむ
本田正枝子

いづこなる島にゆめをやむすぶらむ
あかつきさしてかへるかりがね
吉田數枝子

こゝろなくゆく雁がねもあかつきは
ねざめとひくるこゝちこそすれ
小野寺竹子

さしぐしのあかつきふかきおほ空に
ふるさといそぐはるのかりがね
正田さき子

まよふなよあかつきやみに故るさとを
いそぎてかへるはるのかりがね
鈴木いく子

ありあけの月かげかすむそらをみて
いまはとかりもおもひたつらん
林屋須子

としごとにかへりなれては厂がねの
あかつきやみもいとはざるらん
日高かず子

しらみゆくをちの山の端しら〴〵と
かすみにかへるとりやかりがね
外山亜子

しらみゆくひがしの空にありあけの
つきのこしてかへるかりがね
殿村なほ子

ほの〴〵とかすめる空をゆくかりは
はななきさとにかへるなるらん
殿村しなり子

ふるさとに花のたよりやいそぐらむ
あかつきかけてかへるかりがね
工藤仁子

さく花のこずゑにのこるありあけの
つきをかすめてかへるかりがね
工藤雅子

百とりのはなにうかるゝあかつきに
つれなくかへるかりのひとつら　工藤優子

あり明のつきになくなるこゑすなり
はやくもかりはおもひたつらん　錦野りき子

ほの〴〵とあけゆく空のかりがねは
いづくをさしてかへりゆくらん　田邊照子

聲のみてさやかなれとももあかつきの
かすみに消ゆるはるのかりがね　稻田たれ子

あかつきのをくらき空におときこゑて
こゑのみのこしかへるかりがね　馬塲節子

さきつゞく花にかすめるあけぼのを
見すてゝかりはいづちゆくらん　西村草子

古さとにいそくなるらんありあけの
おぼろつくよにたゞ　〳〵ぞゆく　山里雪子

山の端のしらむもまたでたなびける
かすみがくれにかりいそぐなり　香川知惠子

花もあるあかつきづきよなかしきに
くも路をいそぐはるのかりがね　香川頴子

などてさはいそぐなるらんさし櫛の
あかつきかけてかへるかりがね　降田滿起子

こむ秋をつきにちぎりてかへるなり
あかつきがたのはるのかりがね　寺澤なか子

春のよのねざめかれたるあかつきに
こゑもかすみてかりかへるなり　須磨ひて子

花の香をいかにうしとやおもふらん
あかつきかけてかへるかりがね　大音ふみ子

有あけのつきかげしろきやまのはを
かへるやかりのなきつゝぞゆく　河野まさ子

あり明のつきになきつゝゆくかりは　青木ひて子

なをふるさとのはなやこひしき

朝かすみわけゆくかりにことゝはん
かへるこし路もはなはさくかと　櫻井きよ子

あかつきの鐘のひゞきにゆめさめて
こし路にいそくかりのひとつら　櫻井はる子

いづこをばさしてゆくらん雁がねの
あけゆくそらに見えつかくれつ　太田よし子

ねやの戸をおしあけがたの空たかく
なきてぞかへるかりのひとつら　目黒佐喜子

花の香のみちわたりたるいなのめの
みそらをかへるかりのひとつら　都水春子

さかりなる花をみすてゝありあけの
かすむくも井をかへるかりがね　穴水わか子

ふるさとのわきてこひしくなりにけん
あくるもまたてかへるかりがね　服部かつみ子

ほの〴〵とあけゆくそらに影みえて
こゑのみとほくかへるかりがね　中里ゆき子

ありあけの月をのこしてゆくかりは
かすみのうちにみちまよふらん　田中登美子

分るゝををしむこゝろやありあけの
つきになく〳〵かへるかりがね　黒子うめ子

打かすむあかづきつよくかげきえて
なりあはれにもかへるかりかな　立石哲代子

行くかりはなにの契りぞわれはしも
はなみにいそぐあかつきのそら　賀茂縫子

あさ日かげはしくもゆかむ花やまの
あかつきおきにかへるかりかな　服部萬子

うきものと人のいふなるあかつきに
なきゆくかりはなにおもふらむ　村田多豆子

われはしも花みむとおもふあかつきに
かへるかかりはあきをちぎりて　河合縫子

打かすみなほゝのぐらきよこぐもの
そらにわかれてかりぞなきゆく　宇野定子

人しれず誰かわかれ路にならふらん
ありあけのつきにかへるかりがね　笹子茂子

あかつきの花知らぬ間にゆくかりは
かへるてふことゝいむにやあるらん　數島花子

横ぐものみねにわかるゝおほぞらに
こゑうちつれてかへるかりがね　横手辰子

いまはとて明けゆく空をよそにみて
おのがとこ世にかへるかりがね　横手福子

あかつきにそぼふる雨はかりがねの
いまをなごりのなみだなるらん　横手孝子

夢さめてふるさとにふるあかつきに
うらやましくもかへるかりがね　柴田きく子

雁がねの明くるもまたでかへるかな
はなのさかりをあさにみすてゝ　西谷なか子

ふるさとの春いかばかりこひしくて
あかつきふかくかりのたつらん　新井登代子

あさまだきかすみの關をこゆるとて
このあかつきにかりかへるらん　高砂き代子

ありあけの月になく〳〵かりがねの
また來ん秋をちぎりてぞゆく　竹村貞子

花ざかりのいろねのどけきあかつきを
よそげにかりのなにかへるらむ　野中あさ子

さく花にこゝろもそめでかへるかり
わかれやをしきありあけのそら　佐伯きぬ子

花のいろもまた見ねわかぬありあけの
そらにつれなくかへるかりがね　高市さし子

なくれのみかすかにもれて雲の
かすみがくれにかへるかりがね　高本しげ子

ありあけの月はかすみてひさかたの
くも井にさけびかへるかりかな　大西玉子

有あけのつきとはなとのなかうらを
をしさやかりのなきてゆくらん　泉さい子

明くるまもまたで越路をいそぐかな
こゝろせはしきはるのかりがね　泉久耳子

きのふしもかへりし友におくれじと
あかつきふかくかへるかりがね　森やす子

春の夜のねざめかれたるあかつきに
ゆめおとろかすかりのひとつら　所佐以子

ふるさとにおもひ立ちたる厂がねは
あかつきやみもいとはざるらん　友永幸子

あかつきになにいそぐらんふる里に
くも路をわけてかへるかりがね　鹿瀬島嘉子

時きぬとわすれもはてずかりがねは
あかつきかけてたちかへるなり　永目茜子

あかつきのかすみに隔てかへるかり
またこんあきはとほくもあらぬを　那須昌子

ほのぼのとあけゆく空にむつまじく
つばさならべてかへるかりがね　村崎包子

大かたのとりはゝなまつあかつきに
かりはいづちをさしてゆくらん　黒田明子

ふる里になにをちぎりていそぐらん
あかつきかけてかへるかりがね　虎口貢子

あけぬまに關路こゆるといそぐらむ
乘ひおくれたるかりのひとつら　藤井うめ子

何處よりたちて來にけんあかつきの
　かすみぬひつゝかへるかりがね　田村たか子

歸るかりなかですぎゆけなか〳〵に
　きくもわびしきあけぼのゝそら　石川樂子

ほの〴〵とかすみ渡れるあけぼのに
　こゑをのこしてかへるかりがね　石川久子

あり明のつきのひかりやたのむらん
　まだ夜ふかきにかへるかりがね　石川類子

なか〳〵に聞かぬもよしやかりがねの
　かへりをいそくあけぼのゝそら　石川南江子

明けぬれは花にこゝろや引かれんと
　あかつきふかくかりかへるらん　西豔子

ふるさとの花のたよりやひゞきけむ
　あかつきかけてかりかへるなり　大竹治子

花がすみはやたちそむるあかつきに
　かへるをいそぐはるのかりがね　阿部久子

今はさてあかつきまちてゆくかりは
　はるをうしとやおもひたちけん　上野久子

朝ぼらけかすみをわけてゆくかりは
　はなになさけをかけぬなりけり　上野きやう子

あかつきの空にきこゆるかりがねは
　おのがこしぢへかへるなるらん　上野さめ子

あかつきのかすみのころもぬぎ捨てゝ
　かりやいづこのやまに入るらん　西村靜子

あかつきのかすみをわけて行く雁を
　ゆめにおくりてまたもねてけり　西村文子

いかばかりそのかへさを急ぐらん
　おくるもまたぬかりのひとつら　錦織孝子

一こゑをありあけのつきにのこしつゝ
　まだきにかへるあまつかりがね　錦織操子

よこ雲のはるゝもまたでかりがねは
　ふかきかすみになきかへるなり　小松靜子

あかつきのふかきかすみをわけつゝも
　さくかへりゆくあまつかりがね　靜川ちさせ子

たまづさのもしたに見ゑずさし櫛の
　あかつきやみにかりかへるなり　田尻保代子

しばのとのあけがた近きとりのねに
　かさたのかりやおもひたちけん　足立くに子

つれならずかごたの雁のさわぐなり
　このあかつきやおもひたつらん　足立宗子

よの人につらきなさけをみせじとや
　あかつきやみにかりのゆくらん　足立富子

いましばしまたばあけんをさし櫛の
　あかつきやみにかへるかりかな　足立松子

ほの〴〵とありあけの月にかげみゑて
　なきつゝかへるかりのひとつら　足立ます子

をちこちのとりのやこゑも厂がねは
　そらにきゝてやかへりゆくらん　柴宮信子

ふるさとにかへる旅路やいそくらん
　あけゆくそらのかりのひとつら　北原季子

月かげもうすれてかすむあかつきに
　かへるかかりのこゑほのかなる　小川ちひろ子

この朝げかへりをいそぐかりがねは
　はなのたよりをたれに告ぐらん　小川清子

あかつきにたちてかへれる厂がねは
　はなのやどりもうきにやあるらん　齋藤よし子

のどかなる春のあけほのまちやらで
　しづごゝろなくかりかへるらん　齋藤かつ子

月にほふはなもかすめるあかつきに
　ふるさといそぐあまつかりがね　針生都子

あさたたば花もさかむなかりがねの
　まだきにかへるはるのあかつき　下田興子

春の夜のかすみもはれぬあかつきは
　はなのひかりにかりや行くらん　永井あき子

玉づさを誰かもさへさりいそぐらん
　おくるもまたでかへるかりがね　吉田ひさ子

歸るかりこゑするかたにかげきえて
　おぼろにのこるあけがたのつき　大久保みち子

しのゝめの空に名残りのこゑさめて
　こし路へいそぐかりのひとつら　小曽根しう子

春の夜のねざめのさこにきこゆなり
　あかつきかけてかへるかりがね　伊賀なを子

かすかなる星のひかりにまよふらん
　あかつきやみにかへるかりがね　久保井くら子

終

三月廿日兼題　落第せし人を慰むる文

天　遠江國濱名郡 淺場村伊場　岡部八代子

せめて程近き御わたりにだに住み候はんには、直にはせ參して、此御なげきのなかぞをだにわかち候はんに、雲井はるかにへたつることのかなしさよ。さはれ行く雁にことつてゝ、たゞ一言をきこえ上けなん、嬉しといふもうしといふも、同じうつゝよのしぜしかりねのゆめにこそ候へ、一校に才かくれなくおはせし其の君の、わづか一二點にて、及第の數にもれさせ給ひし御心のうち、おしはかり參らするだにむねのみせまりきて、なは現とはおぼえ候はず、去りながら、色をも香をも知りまゐらする身は、全く一ときのまがつみにこそ候はめと、いと〳〵御いとほしく思ひ給へられ侍り、いかで〳〵、こん春こそは、しぜしふりつもれる雪に埋れし冬木の梅のこと〳〵いよ〳〵ゆかしう匂ひ出せさせ給はんことを、つゆうたがひなく侍れ、たゞ〳〵あまりみこゝろよわくなげかせ給ひて、御病などおこさせ給はぬやう、ひたふるにねぎまつるになん、かしこ。

地　甲府市山田町　名取正代子

おぞろかるゝまゝに、一筆の雲井のかりのはしりがき、つらさへ亂れたるは、幾重にもゆるさせ給ひてよ。さて、先つ頃は、定期の試驗にて、きは學びにいそしませ給ひつらんを、いかなるおやまちの、こたびはしるしのふみを得させ給はざりきとか。日頃の御いそしみといひ、御さがのかしこさといひ、數多の人にすぐれさせ給ふ君の、そもいかなる故ぞと、やう〳〵うかゞひまゐらせしに、萬の學科いづれも高點におはするものから、唯一科のみ定點に滿たざりし爲とか承り侍りて、まことに、ひとごとならずいみじうくやしう思ひ侍り。御心の内も、さこそと推しはかりまつりてなん、されぞ、諺に失敗は幸福の母とまをす事も侍れぞ、い

たく御心おとし給はで、なほ此後ます〳〵いそしませ給ひ、ことに其一科は一きはつとめさて給ひて、此次の試験の折は、さきの名譽恢復をはからせ給ふやう、くれ〴〵もをしすゝめまゐらするになん。かへす〴〵もいたくな御心おとし給ひそ、あなかしこ。

人

大阪市西區南堀江下通二丁目八十九番屋敷　日吉あさ子

浮き沈みは浮世の常とは申しながら、此度の試験の成績、承るより胸つぶれて、さらにうつとゝも思はれずなん。いつの時にも、はじめの席を去り給はぬ君なれど、母君の御いたつきにて、休みだにせずなど、いかばかり口惜うも悲しくも思すらん。其後は、いたくはぢ給ひて、容易うは人にもあはせ給はずとか。誠にさる事にて侍れど、こは人の子ののがれがたき道にて、之をよそにしては、いかほど高きほまれを得給ふとも、いかで其甲斐のあるべき。其事は、師の君をはじめ、他の人々もしり給へるを、何のはぢ給ふ事のあるべき。あまりに思ひ屈し給ひて、あらぬいたつきなどの出でなむ、いかにすべき父母の君の御心づかひを推しはかり給ひよきほどに心を和らげさせて一しほいそしみ給はん事を、ねぎ奉つるになん。かしこ。

(以下原稿到着順)

横山柳子

雪の朝も月の夜も、たゞ一筋に學の道にのみいそしみたまひししるしあらはれて、こたびの學期試験には、すぐれたるしるし文うけさせられ給ふらんこと、かれてわがことのやうたのしびしたゞ、おもひきやそのかひあらせたまはぬことは、日頃才學秀でたまひしきみの、なにゝよりてかといぶかしくて、いともほいなう思ひたまふるを、きみのみこゝろのうちやいかならん、つれにきみのさがなしりたまふ師のきみ、さては御親のきみ等の、いかにあはれとおぼしたらん、されどあまりになおもひくつをれたまひそ、只今一歩おくれたまふとも、なにのおそろしきことかあらん、この口をしさを身にしめて、いよいよいそしみたまはゝ、やがて月の桂をも手折りたまひて、人にこゑたるめいぼくをほどこしたまふこと、うたがふべくもあらず、さればけふのおもなきことこそ、かへりてのちのほまれとなれ、御心つよう思ひたまひて、いやますますはげみつとめたまひてよ。

佐々有鄰子

人の浮沈は、世の波風につれて、ままあることなれば、貴嬢の此度の落第も、世の波風のまにまに沈みたまひしならん、いたくななげきたまひそ、此次の度の試けんに及第せられんこと、世の波風に浮み給ふごとく、鏡をかけてうつすよりも明々たり、いく度地に落ちても、心の柱つき立てたまはば高き位の山に登りたまひてたち榮ねますらへ、あなたふとしや。

乾嘉代子

花咲く春に逢はずして、古巣に歸る雁に、掻き文なことづて侍るになむ君が學びの友どちは、日頃の苦學を慰めんとて、今日は隅田、明日は飛鳥山とあくがれて、心は空にある如し、さりながら、君は何とて沈み給ふぞ、一度はかゝることもありてこそ、励む心も出づるなれ、我れとてもためしなきにもあらざれば、君が御心は御すゐし申さるゝなり、されど、せんなきことなれば、いかでかの恥雪がでやはと、心の駒にむちうち給はば、やがて嬉しき時も來らんあなかしこ。

三輪眞惠子

そよ吹く風も寒からず、いづこの花も笑ひ出候昨日今日、承れば、御君には今度のこと、いたく御心にかけさせられ、沈み勝にて、大方御こも

り居にのみくらし給ふさか、此頃の御ふるまひは、日頃の御氣質にも似ずまことにうけ難く覺え候、常々より語らひきこしつる如く、試驗の結果のみが、人の輕重を判するさ申すにもあらさるべく、まして君に平常の御成績、師の君はさらなり、知るほさの人は誰もみな知りぬべきにこそ、これをたさへば、高き山にのぼるに、いくたびか木の根岩かごに躓くこさあるも、頂に達するに於ては、いか許の大事か候はん、かへりて、後々のいましめはげみさもなるあり、かゝるさゝやかなることに、御心を痛めさせ給ふ樣にては、ゆく末ながき吳竹のうきふしゝげき世の中を、いかに渡らんさか思しめす、古りぬることなれど、若は病のもさゝか申候へば、そがためおん大切の御身に、いたつきなさ惹起し給ふ事ありては、御兩親に對しまつり、さらに御心配をかさぬるにひさし、されば、よくよく御身の上をもおん厭ひあればされたし、何卒なし遂ぐるにも、心身のすこやかならでは能はぬ事に候へば、今少し御心を寛く持ちたまひて、こたびの御取りかへしにはなほ一入の御勵みありて、次の期に目ざましきことをさ祈りまゐらせ候、世の人誰か　あやまちなからん、されど、このあやまちにめげずたゆまず進み行てこそ、ゆくゆくむづかしき世に立つを得るなれさ、思はれ候に、さのみはおぼしなげき給はず、いたらぬ限もなき春の景色に、折々　はたち出でたまひて、御氣晴し遊ばされたく、この事御すゝめまゐらせ候、さいはひこなたの庭の櫻の、めで來ん人を待ち顏に、今を盛りさ咲き出で候まゝ、御さはりもあらせられずば、かぜ吹かぬまにおさづれ給ひてよ、よろづはまのあたりにて、かしこ。

小野かつ子

いさかしこけれど、したはしさのあまり、おぢなき身をもかへりみず、一筆申上まゐらせ候、さて、側かに承り侍るに、御許樣には、先頃施行せられ候、高等師範學校入學試驗に、御應募遊ばされ、御受驗なされ候ひしに、如何なる譯にか、御成績思はしからず、爲に御入學せさせ給ふの期をあやまられ候を、いたく御殘念におぼしめされ、斷然筆硯をはなれ、御部屋の内にのみおはしまし、ひたすらうれひにしづませ給ふさ、承はり、誠に恐入り申候、折角御志を御立てさせられ候を、なしくも中途挫折の非運に陷り候はんか、御失望のあまり、斯く御力落しせらるゝは、人情の弱點さか申され難しも免れがたき事にて、御氣の毒のいたり、いたく同情をあらはす所に御座候。さりながら、御心落しのあまり、御ふさぎ勝にて、御病氣にても引き出だしたまふやうにては、夫れこそ一大事にて、御兩親樣に對して、御不幸にも相成り申すべく、左候ひては、もはや取りかへしのつかざることにて誠におしむべき　ことに御座候。古へ王陽明さ申さるゝ人は、其の友の試驗不首尾を恥ぢ、心落せらるゝをいましめて、及第を得ざるは、恥さするに足らず、心落しのあまり、中途折れ挫むことこそ、恥の至りなれ、さか申され候さぞ。實に御もさ樣にして、今に當初の御心がけを打捨て、くづをれせらるゝが如く、いさ此濟のむか、あたら、明玉を、琢磨半にして見捨てらるゝが如きことあらためにをしむべきことにこそ。殊に、近來女子教育の道彌ひらけ行きて各地いたる所、高等女學校のごさきも設立せらるゝ事なれば、此が先生たる人、益々不足を生じ、折角の進步も、或は一頓挫を來すが如き憂はなきかなど相感ぜられ、ますますなしき極みさ存ぜられ候。今更申すまでも無之候へど　何卒御心をさりかへして、御氣象健く持たせられ、一層御いそしみ給ひて、來春の入學期には、天晴良成績をしめられ、御目的相違せられなは、曇りし明月の、眞如のひかり淸らかに、うるはしきほまれを博せられ、前途は洋々さして春の海さも申すべく、樂しき限りさ考へられ候。さるを、徒らにたれこめて、深く憂に沈ませ、鬱々さしてたのしませられざるは、御身の爲め、將た世の爲め、まことに、なげかはしき至りにこそ、かゝる事は、いまあらためて、くだくだしく申上ぐるまでもなく、既に篤々御承知にて御はしまし、かへりて、さしでがましく御座候へども、日頃の御親しさのあまり、そのまゝおもひのさめがたく候まゝ、斯くは、申上まゐらせ候。何卒、御心に懸けさせられ、御採用給はらば、身にあまる喜びにぞはべる。今や花の色も充分枝頭にのぼり、桃櫻も將に蕾の綻びなん有樣、野原も若草のもえ出でゝ、麗かなる空に囀づる百千鳥の聲などに、げに一刻千金さもたゝへらるべく、散策なさ試

みんに、こよなき幸に候へば、御氣晴しがたぐ〳〵、御來遊なし給ひてよ。餘は御對面の上、萬聞え上ぐべくなん、かしこ。

吉岡歌子

久々病の床に打臥し居られ候ものから、試驗の結果如何ならんとは、御案じ申しながら、さりともとこそ賴み居侍りしを、承れば、あだし事となりにけるとか。さく我だにしづ心なきを、まして御心の中おしはかられてなん、あはれ、かの病氣だになからんには、校の光りと仰がれし君なるものを、かけてもこの事あるべしやは、思へば、生憎のいたづきなりけり。然りながら、過ぎつる事は今更にいかゞはせん。何事も時の運ぞとあきらめ給ひて、一入身をいたはり、挑ます倦まず御いそしみありたらんには、素より賢しき君なるものを、何とて、人後にゐ給ふべき。ましで敗るゝは成るの基と申し侍るをや。ゆめ〳〵、この一事に御心落したまはで、却て身をいさむるよすがぞと思し取りたまへや。

田中ひろ子

うけたまはるさへ胸つぶれて、いといと心苦しき限りなるをましてやたらちねの君を始め、御自身に於ては、御心いたみの程いかばかりにかと御察し申すになん。げにいつも試驗毎に、君の御成蹟ばかり床しきはあらじと、常に御うらやみ參らせ居たりしを、はからずもこたびの事ありしは、口惜しくうたてき限りにこそ。されど、誰人の身にも、なき事にも、侍らればこそ、さのみ御心つかひし給はで、學びの窓の燈火も、親しみ易きよき時候にも侍れば、前にもまして御勉强遊ばされやがて立ちかへる春には、いよいよ御身の光を添へさせ給へや。已れ、はばかりもなう、拙き筆もて聞え上ぐるは、へだてなき御なからひと思へばこそ。むげにさかしら言とのみおぼし召し給はずば、こよなう幸になん。

佐々敏子

春つげ渡る鶯の聲軒近く聞えて、田舍の氣色も、いと長閑に相成候折節いかゞわたらせ給ふらん私事州かはらずすこやかにくらし居候間、御心安う思召被下度候。さても承れば、御許樣には、こたびの御試驗に、御及第遊ばされざるよし、いかばかりか御口惜うおはすらんと、推しはかり侍りぬ、されどこの前の御試驗に、なみならぬ御ほまれを得させ給ひしに引きかへ、こたびの御成蹟よからざりしは、全く、こぞの秋、はからずいたつきの御床につかせ給ひ、爲に長々學校を御欠席なされ候故と存ぜられ候へば、敢て又さしたる御不名譽と申す程のことにもこれなく候はん。申すに及ばぬことながら、既往は追ふも詮なし。只此上は決して一度の御落第に御撓みなく、御身を御大切にあそばされ、ますます〳〵いそしみはげみ給ひて、來む年の御試驗には、やがて高きほまれをあげさせ給ひ、今年の御失敗をも償ふべき樣、御心かけなざるが御肝要のことゝ、くれ〴〵も念じ上げ候。いさとこのわざなれど、互に隔てぬ中にしあれば、おもふがまゝ、聊か一言なすゝめまゐらするになん。尙此書一冊進上申候。御勉學のたすけにも相成候はゞ、こよなき幸ひにこそ。かしこ。

上杉光子

ふきくる風もやう〳〵のどかに、池の汀の厚氷も、けふはとくらんとぞんじ候。さてきのふ何子樣參られ、君には、そのゝちもうちとけ給はで、日々一室にたれこめおはしますよし、なかき冬を結びつめし氷も、春のきぬれば解くるためしもあるものを、日ころ御性とかしうおはします君の、さてもあやしうこそ。一たびつまづき倒るとも、又立ちあがらば、本のまゝに歩まれもすべし、倒れしまゝにあらば、いつか歩まれんときのあるべき。つまづき倒るは、たれにもあることにて、君たゞ君のみにて候ふべきかば。さるをそを悲しみうれひてあらんには、父母よりうけ給ひけん貴き御身をそこなひ玉ふのみならで、つひには立ち上りて再び歩まんときのなかるべし。勉めて挑ます時の來ぬれば、又氷解け行く方も候はんとこそぞんじ候へ。何とぞ、よく〳〵思ひかへされ、ます〳〵いそしみたまはんことを、返すぐ〳〵も願ぎまつるになん。かしこ。

佐々木つね子

けふ、御妹子樣御遊ひにいらせられ候まゝ、御樣子伺ひ上げしに、姉子樣には、何とやらん、物なげかはしう思し召されて、大かたは御部屋の中にのみおはしますとや、あゝいつもうち氣の御同樣、この度の

事を御心にかけられて、しつみおはしますことは、御理りにては侍れども、試験のあやまちのみか、御名のけがれ、はた女徳にきずつくこと申すにても侍るまじく、常々の御事は知る人や知り申さん。かゝるさゝやかなる事に、御心をいためさせ給ひて、御やまひにても引出させ給ふやうにては、行く／＼六かしき世の中を、いかで渡り給はんや。此は只御足もとに小さき石の轉べるにひとしく、御つまづきは有りたりとも、御進み遊さるゝに、何の大事か侍るべき。若葉の梢涼しげに、隙もる風には、ゐならぬかほりのにほひきて、軒端の梅は、今を盛りとさきこぼれ、百千鳥もさへづりかはす此頃を、かくこもり居に暮し給はん事、何も／＼有るまじき事とききこはしけたくこそ。さのみなやませ給はで、次には目さましき事をとおぼしめして、御いそしみ給はんには、何のはぢ給ふ事か侍るべき。浮世にはあやまち無き者は侍らず、只あやまちて改むるにはゞかる事なかれとこそ古の人もいひける。あやまちし事は、扨追々と進み行く事と思されて、然のみ思ひくつし給はず、折々は御出立ちもあらまほしくなん。此頃は、こなたの庭の梅が枝に、老うぐひすのこゑもなつかしく、結び渡せるまがきの元の山吹も、ほゝゑみがほにて、實にちとせのよわひもこゝにやとおほゆ侍り。あなた様にも、ひと日御わたりあらせられて、栂尼の背なしのぶめる業にしも、心をなぐさめて、御氣はらし遊され候ひては、如何に候か一寸御妹子様に寄つてゝ、まはらぬ筆もて　細き筆の跡にあらはし侍るになん、あなかしこ。

森倭文子

けふしも、人つてにこそきゝはべりしかさても親しき御許様には、すぎし日の試験におちさせ給ひしよしうけたまはり、しばしは夢かとのみあやしまれはべりき。さはれ、日頃より其の道にいそしみふかくおはせしことは、人皆のよく知りはべる事にしあれば、こたびの事も、などおしなべての程とは思ひよりはべらむ。いさ、あやしき事にのみ評しあひはべり。かの諺に、智者も千慮の一失とやらは、誰も／＼、世に免れぬ事にしあれば、さばかりの事、ふかく御心にとめ給はで、たゞ／＼こむ試験に、今一しほの御心しらびをこそいのりまつれ。あまりにこちこめてのみおはしなば、御身の障にもやなりはべらん。きのふけふ庭の花も盛りなれば御心ゆかせに、いざさせたまへや。かしこ。

河村君子

年月のうつろひやすきは、今更の事にあらざるめれど、小學の門を君と共に出でしは、昨日の如く思ひしに、はや三年の春秋をすごしぬ。この長き月日の間、君には學びの道の奥深くわけ入られ、東京高等女學校に御入學ありて後も、御成績のめでたきよし聞き及び、君の名譽のみならず、故郷の名譽なりと喜び侍りき。さるに、ある友達よりのしらせによれば、先日の學年試業は、僅かなる點數不足の爲、不合格となられしにより、面白くなく御くらしなされ、方針さへかへんとの御心のよし、さりながら、諺に、弘法にも筆のあやまりとか申して、如何なる英才の人にても、一敗はまぬがれざる所なるに、まいて幸不幸運不運の禍福を脱する能はざるは人世の常にしあれば、殊更の事にてかく失敗ありてこそ、成功の基の見は申すなれ。されば、かゝる一些事に落膽し給はず、この後ます／＼御勉學遊ばされん事を、親友の望心やみがたくて、失禮をかへりみずかくなんかしこ。

服部金子

野山ゆかしう立てこめし霞もしめる春雨のふれる夕、いかゞすごさせ給ふらん、久しう音もせでありしこよいの罪は、ゆるし玉へ、先つ日、何子の君より承れば、こたびの試験には、成績あしかりきとて、いさうしづませ給ふとか、古のかしこき人も、さるためしなきにあらねばこたびの事も、ゆめのみ心にかけ給はで、このゝち勉めはげみ給はんには、このさはりは却て幸とこそなりぬ可けれ。明日にても、そらの晴れたらんには、たれこめてのみおはしまさんも、いと／＼つれ／＼ならんに、野邊に立ちいで給はずや。初わらび見いだし侍りて、かたみにみたは、そのたのしみ如何ならん、み心にかなはせ給はんには、正午頃より訪ひきませと、あら／＼かしこ。

八木沼里子

このころは、さほ姫の春なれや、四方のけしきもうら〻かに軒端の梅もほころびそめ候折から、いよ〳〵御すこやかに入らせられ、御めで度存じ候。扨承り候に、此程其許様には、高等師範學校入學御志願にて、御受驗遊ばされ候ひしも、折悪しく願叶はざりきとか、平素御はたらきおほの御身にて、嘸かし御無念にいらせらる〻御事と存じ、誠にく〳〵御氣の毒の次第に御座候。さりながら、試驗といふものは、實力を見るとはまをしながら、わづか一時の運に候へば、またく御運はづれと申す事にて、強ち御心落ちなさるべき事に候はず、いにしへ人の言の葉にも、一たび敗れたればとて、志を動かすべからずと申候へば、決して御たゆみなく、又明年の葉桜までに、いやます御勉強遊ばされ、再び御受驗なさるべく、一とせ相おくれ候も、さ程のけぢめあるものに候はねば、かへすぐも御ちからおとしなさるまじく候。此頃、手前方前栽の梅の花、淺香なれども、うぐひす待ちがほに咲き居り候間、御こ〻ろやりの一とはしにも相成るべく候ま〻、御姉妹子様御めしつれ御出で下され度、御待ち申上候。あら〳〵かしこ

賀屋蕗子

重ね〳〵の御不幸に、御心も消え入るばかり打なげき給ふ折しも、あやにく學期末の試驗始まりぬれば、常にも似たまはぬ御不成績にて、其數に漏れ給ひし由、か〻る折からには、誰もありがちの事なるを、君には我身一つの如くおぼしなげかれ、寢食も忘れ給ふばかりなりときゝて、いとゞ打驚かれ申候かれて、内氣の御さが故、沈みおはしますもことわりながら、たゞ及第のみが名譽と申すわけにはなさ〳〵これなく、日常の御學力をこそしる人ぞ知るなるを、はかなき事に御心いためられ、もし御身にいたづきの入る樣の事ありては、殘りおはします父君に誰か御孝養いたさるべき。瑣々たる躓の御つまづきに、のみなかかづらひ給ひそ。百折不撓の御心なこそ、此上なうたのもしう思ひたまへ。とまれかくまれ、明日は必ずまう上り、野邊に誘ひ、一日をたのしく、菫つみに暮し、御心をさわやがせ申すべく候。まづは取敢へず文もて申上候。かしこ。

失名

日々あた〻かに相成申候て、四方の景色ものどやかに人の心もおのづとそらに浮立ち申可き此頃、御許様には、此度の試驗にて、成績のよろしからざりし爲め、いといど御力落し遊ばされて、日々一室にとぢこもり、御ふさぎてのみおはし候との事、そはかねてより人々に劣る事を、第一のはぢなりと思召さる〻御心故、常日頃勤勉家とし校中のほめものと相なられ候御事故、さもありなんかし。さりながら、此度の學年中は、過年御病氣にて、御欠席遊ばされ、近頃とても、全くの御全快にもおはせぬにおして御出席なさる〻程なれば、いか程御心ざかしき御方々なればとて、などて及第の出來候可き。かまへて〳〵、御心づかひ御無用に御座候。何事も、身体のありてこそ出來得可きものなれば、何卒〳〵、此上は御保養專一に遊ばされさてのち勉強なされ候はば、御兩親様にも、此度の及第遊ばされ候らひしよりも、いかばかり御よろこびなされ候はんと存じ上候、先は拙なき筆なもかへり見ず、いさゝか思ふ心を、かく御傳へ申すになん、かしこ。

稲原菫子

承り侍れば、日頃いそしみ深き君、いかなる時のめぐりあひにか、このたびの第四級の試驗の御成績、殊の外悪しかりし爲、此頃は、學校に登るも物うしとて、空しく内にのみ、日を過させ玉ふとか。御心の程は、推し計り侍り。されど、こは、日頃に似させられぬ僻事に候はずや。彼の色香床しき梅の花も、いとも苦しき、いともわびしき、雪霜のからきに耐へ忍びてこそ、斯くはめでたく、咲き出で侍るなれば、まいて、一たびの落第にて、御心弱くもたせ玉ひては、兼てより思ひ立たせ給ふ、御希望をいかにし玉ふべき。一時の失敗などにて、たのみある花の御身を、永く落膽のふちに沈め給ふべきかは。只々御心平に、學びの庭に昔よりも一入勵み、來ん春を待たせ玉ひて、天晴の名を得させ玉ひてよと、せちに祈り奉るになん。かしこ。

林桂須子

さいつ頃より御校には學年試業を行はせらるゝ由、きゝ及び、うれしき御たより今日やきかん、明日にかなど、日々まちわび侍りしに、そよとのおとづれなきも理りや、さる友人よりのたよりに、君には御成績よろしからざりきと聞きし巳は、胸まづふさがりぬ。さるにても、君の御さえのすぐれさせ給ふよしは、かねてきゝつるに、いかなる事にかと、いぶかしう思ひ侍りしが、こは全くすぎし月、ながくやまひの床になやませられてしばし學の道をたゝせ給ひしによりしなりと、一しほみ心のほどおしはかりまつりぬ、されば、一時はさやかう、人の君がみ心をおほふとも、やがてこん年には、のどけき春にあひ給はん事、必定なれば、君あまりにみ心をいためさせられてまたもやいたつきの起りもせば、君のみか、御兩親の君には、いかばかりかなしみ給はん、たゞ何事も天運とあきらめさせられ、みこゝろしづかに、ほど〳〵にはげみ給はんことねがはしうてなん。

日高かず子

此程病の床をあげさせられしはかりなるに、はやも學の庭にかよはせたまふとき、後の御障なかれかしと、蔭ながら祈り奉りぬ。さるを、此度の定時試驗にとゞこほらせられしを悔みたまひて、また〳〵とぢこもらせ、人に面も見せたまはぬとか、何事も勝氣なる君の、如何許か御力落しおはしけんと推はかり參らせしも、さまでとは思はざりしに、かくては、いとゞ御つかれの末、心もとなう案ぜられてなむ。こたびは、君の學の業の劣りたまふにあらで、長々しう打ふし給ひし病の爲なり、誰にはぢらひたまふべき。かつは、君ひとりにてもましまさぬを、身ありてこその學問なるべけれ。ゆめ〳〵、心にかけられず、花笑ひ鳥うたふ好時期に、氣も心もやしなひたまひ、若葉の風涼しうなる迄に、元の御身にかへらせられて、さていよ〳〵いそしみたまはゞ、來ん年は、今年の花にもたちまさり、うるはしき實をむすび、限りなきほまれを得させ給ひなむを、かへす〴〵もな打しづみたまひそと、長々しう申侍りぬ。

殿村直子

春雨の日をふる此頃、如何に御覽せられ候らん、其後は、心にもなく遠々しうなむ。扨も、姉君には、兼て思ひたち給へる師範學校御入學の御事、日頃いたうみがき立て給へれば、此度こそはと思ひ侍りしを、いと口惜しうなむ。昨日ある友の來たりて、種々物語のついで、試驗の事など、何くれとなくかたりあひ侍りしに、あやにくもれさせつるといへるは、いと驚きぬ。君こそは、つとに學びのわざの秀でさせられ候上、殊更御試驗前は、日とも夜とも別ちなくつとめ給ひたれば、やがてはらみに預かりたまひて、花々しく御上りの御事と推し侍りしを、いたう殘りをしうなん。さぞや御失望の御事と推しまゐらす、さはいへ、いまだ御歳も若く入らせ給へば、一と勢おくるゝとてもなにか有らん、又の年まで心して御勉め給はゞ、香しき花もさきなん。美しき實も結びなん、精神一たび到らば何事か成らざらんとかいふ先哲の言葉もあれば　何卒御心なやましたまはで、今より後一ときは御身大切に御いそしみたまへや。さてもかうしめりがちなるに、たれこめてのみおはせば、やまひのたねにもなりなん、我宿の軒ちかき梅の、きのふ今日ふりつゞきし春雨に、やう〳〵綻びそめたるがいとゞあいらしく、鶯も友まちがほなるを、ひとりながめんもいとあかず侍れば、まげて入らせ給へやいさゝかの御慰もなりなん、湯もよくにえぬいざ入らせ給へ、今より何は跟はて待ちきこえさするになん。

秋月清子

梢にうたふ鳥の聲、花の香送る春の風、何づれのどかならぬはなく、いともたのしき頃とはなり侍りぬ。御許樣には、御いたづきの御身、如何渡らせ給ふらむと、御案じ申上げ候、さだめし、日に増し御快き方にむかはせられ候御事と、推し上げまゐらせ候。御存じの通り、此節は定期試驗中に候へば、常々不勉強のむくいにて、日夜苦しめられ、御許さまのことは、一時も忘れ候はねど、つひ〳〵筆とるひまもなく今日まで御たづねも致さゞりし罪は、ひろき御心に許させ給ひてよ。今日にて[illegible]配ものゝ試驗は漸く相すみ、明日は音樂の試驗に御座候、つねならば、御許樣のうるはしき御聲もて歌ひたまふものを、いとも口惜しきことよ

と皆々語り合ひ居候、明日にて試験も終り候へば、御許さまは試験を御うけ遊ばされぬこととて、及第の數にはもれ給ふらむ、さりとて、御なげきなされ候ひては、御身のためによろしからず候間、御心配などあそばされぬやう、御すゝめ申上候、學びの業は、同窓中にて、多くの人々にも立ちまさりて、秀で給ふ御身なれば、またこん春の試験には、うるはしき御成蹟にて、御及第遊さることなれば、御力落しなき樣つたへてよと、師の君よりもくれ〴〵も仰せられ候、何とぞ、一日もはやく御病氣のおこたり給ひて、來ん始業式の日よりは、ぜひ〳〵御出席あばさるるやう、祈り上げまゐらせ候、此おそ櫻は、二三日前より咲き初め侍りぬ、此花は、早き花の散りはつる頃よりひらきはじめ候へども、其色香の却て優れてうるはしきは、御許さまにもたぐひつべき花に候へば、二枝三枝手折りて持たせまゐらす。御つれ〴〵の御慰めともなりなば、此上なう嬉しう存に候。あなかしこ。

絹野りき子

今日家よりの御消息によれば、御許樣には、御志のならせ給はざりきとかやにて、いたく御力おとしのよし、御もつとも御察し申上候。されど、かの時のみにては候はず、よし御及第遊され候とも、三ヶ月は假入學とかや成れば、もし覺束なきことのありては、夫こそ恥かしき事ぞかし、決して〳〵學ひたまひし御事柄は、水の泡と消にしものには候はず、さのみに御力を落させ給はで、今一入いそしませ給はゞ、來ん年の試験には、めでたく御志をとげさせ給はんは、よもうたかひは候ふまじ、みぐるしき伏やなれども、爐にはいつにても釜のかゝりをり候まゝ、御遊ひに御出下され度、御待ち申上候。あなかしこ。

高橋天類子

人づてながら承り侍れば、御許さまには、この程の試験にて、わづかばかりの事の不足の爲、御落第あそばし、御愁歎のあまり、朝夕一室にとぢこもり、御食事さへもなみならぬ由、日ごろ人に劣らぬ君なれば、如何ばかりくやしき事ならんと推しはかり、まことに御氣の毒になん。しかし去年の御いたつきにて、ながらく課業も休み玉ひし事なれば、進級のむつかしきは尤の事なれば、御あきらめなさるべく候。あまりになげき玉ひて、又いたつきにかゝらせ候ひては、かへつて御兩親樣への不孝かと存候、かの小野道風卿の、蛙の漸くにして柳の枝にとびつきたるを見て、心に悟られしが如く、此後一しほ御勉強あそばしなば、など御回復の折あらざらんやは、明日は、日曜にも候へば、草津あたりへ散歩もよろしかるべく、何卒御伴いたしたく、御承知下されなば、いと〳〵うれしうなん、あなかしこ。

山里雪子

文して申上げ參らせ候、承れは、御許樣には、きのふけふ大かたは御部屋にのみとぢこもらせ給ひ、いとゝ御物なげかはしうあらせらるとかや。この度の事、御心にかけさせられ御沈みおはします事、御ことわりには存じ侍れと、試験に及第するのみか御譽れと申すにも有之ましく、且時の運なれは、御恥かしと思召し給ふは御尤には候へと、常々の事は、誰もよく存し居候に、かはかりの事に御心いためられ、御いたつきの床に打ちふし給ふやうにては、申すもをこかましく候へとも却て御兩親樣に御心配かけ給ふのみと存じ候まゝ、御心を廣くもち給ひ、御氣をおとし給はて、此あやまちにかへこの次は、目さましき事なと一層御勉强の程願はしくこそ。左のみ屈したまはて、ちと〳〵御氣はらしに、御こしくだされ度待ち奉るになん、先づ日都の友より送りこしゝ此書物、よほど滑稽にとみ、隨分おもしろく候まゝ、御笑草迄に御覽に入れ候、御氣はらしの料にも相成候はゝ、こよなき幸になん。こなたよりも、後程參し、面白き御物語いたすへく候、よろつは御目にかゝりてともらしぬ。

降田滿喜子

弘法にも筆のあやまりあれば、孔子にも千慮の一失なきにしもあらざるべし。まして、聖賢のきはみに至らぬ人に於てをや。誰かは失敗のなかるべき。失敗を重ねてこそ萬の事は成し得らるゝなれ。諺にも失敗は事を成すの基とも、或は七轉び八起きなど申すことの侍れば、君がこたびの試験に落第せさせ給ひしは、全く一時の御失敗にて、なか〳〵に後日

花を開き玉ふもとゐとこそ思ひ給ふれ。日頃、人に後れを取り給ふとも聞き侍らぬを、嘸口惜しき事とは思召したまはんも、さばかり深く恥ぢ給ふ事にも、なげき玉ふ事にもあらず、たゞ今より後、いよ〳〵ます〳〵いそしみ給ひ、心の駒をゆるめたまはで、來ん年の試驗には、最優等の成績を占め給ひて、人をも驚かし、師の君よりもほまれの言葉うけさせ給はんことこそ、それがはしう侍れ。必ず〳〵、御力落しのあまり、あらぬ考など起し玉はぬやう、くれぐれも祈り奉るになん。あなかしこ。

河野まさ子

やよひもいつしか中とはなり、門邊にさそふ青柳の糸を見るに付けても、何となう春をおぼゆるきのふけふ、其の許の君には、此の度の試驗、いかが御不幸に思はしからぬ御出來ばしのよし、さぞや口をしくおぼすらんと、推し上げ參らせ候。しかはあれど、こは全く君が御怠りにはあらで、日頃御身の御すこやかにおはしまさゞりしによることとに侍れば、ます〳〵御身を御いたはり遊ばされて、此の次ぎこそ、御目出度功立てさせられ、こたびの殘念を御とりかへし被遊候やう、ねんじ上げ候。ふるきむかしの數にも、うますたゆますなしてこそ、池の蛙も遂には巳が思ひを果せしためしも候はずや、ゆめ〳〵心おとし給ひて御身をそこね給はぬ樣、一すらにねぎまつり候。よは御まのあたりにと、かしこ。

太田よし子

この頃は、手前にのみかまけ、たえてみげしき伺ひまつらず、いかにおはします御事ならんと、いと心もとなう思ひ侍りし折、ふと人づてに、御わたりの御樣子きゝまゐらするに、このほど、御前樣には、宇都宮の高等女學校入學試驗に落第遊ばされ、それよりは、日々御やかたにのみひきこもり、ひたすら御ふさぎがちにのみおはすとか承り、まことに御心のうちいかになげかせ給ふらんと、おいたはしう存じ侍り、そは兎も角も、いまだよはひも若ういらせらるゝ御身の、ひととせくらゐおくれ候とも、さまでおそきこともなかるべく候まゝ、さやうに御心をくろしめ給ふは、かへつて御身のためあしからんと存じ、かげながら心もとなう思ひ侍るを、いかで御心とりなほし給はば、こよなううれしき限りになん。むかし小野の道風といふ人は、蛙の柳虫をさらんとして、さいさんとびあがり、やがて其虫をとり得しを見てより、巳れの學ひをはげみ、はては後世までも其名をのこし候とか、何事も拙き身の申すはいともをこましうは存し侍れど、御前樣もこれにあやかり給ひて、雪に螢に心をこめて、ひたふるに御勉學なし給はば、來年の御試驗には、必ず御及第遊ばさん事、妾ちかつて御うけあひ申すなん、ゆめ〳〵すぎし事なとくよ〳〵思し給はで、折には御遊びがてら御出被下ましくや、あなかしこ。

目黑佐喜子

其後は、打絶えて御顏見せ給はねは、如何にし給ひしかと、案じ暮しゐ侍りしに、けふしも、ふとさる方より聞けば、思ひきや、君にはこたびの大試驗に不覺を取らせ給ひ、それいたう果敢なみおぼして、日々御居間にのみたれこめてゐますとは、如何なれば、日頃の御成績には似もやらで、さるおくれを取り給ひしかと、いと怪しまれ、且つ悲しく、亦口惜しく、御心の中推し斗り參らせては、聞え上ぐべき言葉も侍らず。さりながら、今より一向に勵みて挑み給はずば、此恥を雪がせ給はむ事いと易きを、さのみな思ひ屈し給ひそ、もし余りに憂ひ過ぐし給ひて、病なんど引起し給はば、由々しき事になむ、折柄、花もやう〳〵見頃と成りぬるを幸ひ、せめて、御心をやらせ給ふ便に、たとひ御心は進まずとも、一日隅田わたりへ伴ひ參らせむや、よろづは近き程に詣う上りて、親しう聞え上ぐべくなむ。あなかしこ。

中里ゆき子

水莖の跡拙きをもかへりみず、一筆ものし參らせ候、此間三日は、空も長閑にて、よろづ春めき候を、如何過させられ候らん、御伺申上候。扨此程都なる友垣よりの御消息によれば、あなた樣にはこたび高等女學校定期卒業試驗に於て、御及第の撰にもれさせられ候由、嘸かし御殘念之御事と、陰ながら御察申上げ候、聰明なる御性質かつ勉强家の數に、指伏せられし御身にて、かゝる不幸に遭遇せるゝことは實にあや

しみにたへず候。併し、これも時運の然らしむる處と御あきらめ給へかし實にや失敗は成功の基と申す事も、之有候へば、御落膽はさる事ながら、御心をはげまし、益々御いそしみの上、來春の試驗には、首尾よく御卒業遊ばされ、錦を故郷に飾り給はん日を、千秋の思にてまち侍るになん。かしこ、

所佐以子

月に村雲花に嵐と、古しへの人も云ひ置かれけるごとく、けに御許樣には、常々御まなびのわざをいそしみ給ひ、すぐれたるみしるしをさへ得給ひつる事も、たび／＼なるに、いかなる村雲に蔽はれ給ひけん、此度御ためしにもれ給ひしとの御事、聞くだにむねつぶるゝばかりなるを皆々樣のみ心の內、如何にかなしく在すらんと、押し計りまゐらするにこそ。さはあれど、いつか此村雲のはれざる時あらんみ心をいさぎよく持ち給ひて、すぎつる事は再び思ひ起し給はで、のち／＼の事をいそしみ給はんやうをこかましくも一言申上ぐるになん、尙御許樣にも、御隙を御らんじて、御出下され度、私事も、近き内に伺ひて、よろづ御なぐさめ申上ぐべく、先は文もてあら／＼。かしこ。

大竹治子

御文拜見いたし候處、こたびの定期試驗には、昇級せさせ給はさりきとか、日頃いそしみ深き君にして、いかてさることのと、たゞたゞあきるゝのみにて、幾度くりかへし候ても、まことゝは思ひさりねられぬまてに御座候、さりながら、智者も千慮の一失とか申すこともはへり候故、いかなるをりにてか、ふと思ひたがへて、あらぬ答をさし出したまひしならんと、巳のくちをしさ、君にもゆつらぬまてに御座候、さりながら、又思ひかへし候へは、前途望おほき君にして、かくはかりのことに、御心に、とゞめさせ給はずこれより今度の失策に激したまひて、いよ／＼はげみたまひなは、これしきの事をさりかへし候ことは、いと／＼安き事に御座候、古人の、大器晩成と申し語も御座候へは、近て今度の失策は、他日君をして大器たらしめんの前兆ならんと、いさゝうれ敷おもはれ候故、なめげをもかへりみず、をこかましくも、一言きこゆ上げ參らせ候、いかて／＼君にも今より一層御心を堅固に、いよ／＼いそしみたまはんことを、かけながられきたてまつるになん。あなかしこ。

錦織幸子

軒端の梅は、いつしか名殘なう散りはてゝ、門の柳の糸美はしき此の頃を、いかに渡らせ玉ふらん、學びやにて御分れまゐらせしよりは、何の御音づれも承らず、いとど心許なくなん。げに、及第は時の運とは申しながら君は、ながき御いたつきの爲めに、學びの道をかゝせ玉ひしかば、こたび後れさせ玉ひしとて、露ほどもなげき玉ふ事は御はしまさずかし、まして、人々に恥らひ玉ふすぢも侍らずなん、今より後は朝な夕な、御身の上いとど御大切に、只管いそしみ玉ひなば、高根の花の美はしきも手折り玉ふに、などかたからん何事もよしなきもと思直し玉ひて、一日も早く、學びやにて共にいそしみ侍らむことのみ祈りまゐらするになん。かしこ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

郷里なる友に

竹里貞子

春立ちぬるしるしにや、所せき學校の花園なる梅が枝も、昨日今日ほゝゑみそめ、かぐはしき香の、寐ざめの床まで通ふに、いと嬉くて、朝さくより、暇ある每に、木の下をそゞろ歩きしつゝ眺め暮せど、待たるゝ物のきなかぬ限は、何となう物足らぬ心地して、山里ならぬをうちかこちながら。

梅のはなさきそめしよりうぐひすの
　けふやきなくとまちわたりつゝ

さても籠の鳥に等しき身は、心のまゝにそゞろ歩きもなし難くて、只ひねもす机に向ひて書學び、或は師に友垣に正しつゝ。或は又へしなし事をかき綴り、それ倦めば風琴の練習、生花の稽古に物しなどして、緖にうさをやるばかりなるかひなき身の上推し給へやかゝれば、雲井に飛びかふ白鳥ならぬ外なる友垣のいと淡ましくてなん、此許にては時候の暖き故にや、一歳の中にても雪を見る事いと稀にて、朧をかゝ

ぐる煩ひもあられど、積る白雪になよ竹のうち伏せる哀れなる姿も昨日まで寂しかりし木々の梢の今朝は花咲きそろへる趣はしさも、子供などの喜びさわげる有樣など取り集めて、雪の晨のをかしさを眺めがたうたゞ閨のひまもる朝風の身もきるやうなるに夢結びかれ、そゞろに天さかる鄙の住居を思ひやるばかりなり。山里は、此頃人目も草も枯れはてたるやうにて、如何にも寂しくはおはすべけれどそれなかなかにゆかしからん、一間の中に木の芽煮て湧きたぎる湯の音を耳にしつゝ、外面を眺め、雲のあなたは春にやあらん空より蝶の舞ひくるはなどうち誦しつゝ、おはしますらんこそいかに心ゆく業ならん、思ひやるだにいとゆかし、かくあだし里に物學びする身は、何につけても郷里のなつかしく、時々音づるゝ隣の便りも、郷里よりさしいへば、賤の小田卷くりかへし〳〵拜しまつりて色々思ひやるにこそ、君にもいかで御暇の節は、心限なう物し給ひて音づれてよ。積る白雪の晨よりも珍かに嬉しく思はん、ゆめ鶯の初音な惜み給ひそ。此許よりもならしばのしば〳〵聞え上げまゐらせん。時しも水の心のいさゞ結ぶれがちにて、冬にかたよる折柄、よろづ厭はせ給へかし、あなかしこ。

勸學　谷口房子

世には貴きものも重きものも多からめども、學の業ばかり貴く重きはあらざるべし。千早ふる神代の事も、千里へだゝる外國の事もあきらめ得らるゝは此の學の力なり、又人のむふべき道をささらんも、之をおきて外にあらざるべし、さるを、世には、女は學問は不用なり、學ばずともありぬべし、など謂ふのあまり、まことになげかはしき限にこそ。そも〳〵、女は内にありて夫の業を助けて、家政を執り、人子の教育の任にあたるべき者なればその爲すべき務は、いとも重く大きなるものにそありけるされば女たるものは、いかで學はてあるべき、いかで學ばであるべき。

花下に月を賞す　福原董子

我も人も、日くらし野邊山にと、遊びたはむる花の影さて、夜も空しく引き籠る事のいと心なければ、みづしめ打連でそこはさそゞろありきしつゝ、村はづれまで出で來りぬ。折しも十六夜の月は、雲間をいでゝあたりを照らし、今まで眞白にみへしものは、十本許りの櫻花にてありき、今を盛りと咲きみだれ、ちら〳〵と散る花片、雪かと疑ふばかり、木の間洩る月影に、一入あはれを添へつゝ、心なきはした女の、あなおもしろと叫びしもことわり。月は同じ月なれど、今宵の此月ばかり人の心動かすものはあらじ。玉のやうなる月、或は花に埋もれたらんがごと、或は花に抱かれたらんがごと、見る〳〵うちに、變りゆく景色、中々にいはん方なくめでたし。古の(あたら夜の月と花とをおなじくはこゝろしられむ人にみせばや)と歎はれしもむべ、遠きにおはす兄の君にみせばやと思ひ出するもげにことはりぞかし。夜は漸やく更けて、月はいよ〳〵花の木陰をにほひぬ。

舞子の濱にて　竹里貞子

松木たちいつかかすみてやまてらの
　かれにくれゆくさはちしほやま

須磨の浦にて

よせかへる波はなになかこと問ひし
　まつふくかせのこたへかほなる

友の卒業を祝ひて

みゆきふる冬もしのきし甲斐ありて
　けふのこはるにあひしきみかな

春月優秋　福原董子

夜もみよと紅葉を照らすつきよりも
　おぼろにかすむ影ぞ得ならぬ

鶯の初音をきゝて　山田琭子

白雪のふるすをいでゝうぐひすの
　梢木にうつるけさのはつこゑ

澤春駒　吉岡歆子

影うつるやなぎのいとをほだしにて
　さはべはなれぬ作のわかこま

男爵高崎正風先生序
本居豊穎先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

菊版 大和綴
製本 頗美麗

全 自一巻至八巻 壹千百頁 合三冊

正價 金壹圓五拾錢

郵送料 十里迄 七錢 一百里迄 十二錢 百里以外 廿四錢

本書は斯の道に有名なる故富士谷御杖翁の著にして世にありふれたる註釋書の類とはことなり貫之朝臣のこの日記を書かれし深き心はその言葉のうちにふくめたりといふを本として言詞は更なり文意をもいこと委しく解なしなからいと廣く考證をも引き出でられたりもし一たび此の書を手にせむたちまち其の眞想を知るべしといふ一本を繙きてその如何に明快なるかを知りたまへ

發行所 東京京橋區築地二丁目 國光社

女子高等師範學校

當校附屬高等女學校生徒募集の有無問合に對して此是迄募集せざる旨一般に回答致來候處今般學級編制上の都合により第三學年（從前の五學年相當）に若干名入學せしむべきに付高等小學校卒業以上の學力を有し入學志望の者は來る四月六日迄に履歴書差出し同七日八日の兩日に試驗を受くべし

再版 生田目經德編 再版

製本 大和綴 頗優美

標註 雅文消息集

定價 金二十五錢
郵税 金四錢

日用消息文の摸範は之を中古文にとらされむ雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたしこの篇専ら心を用ひて古人の消息文中より高尚にして雅致なるものを採り

春の部 廿七編
夏の部 十六編
秋の部 十九編
冬の部 十一編
雜の部 二十四編

の各部に別ち註釋最も懇切に參考者の便よからんことをはかれり……又

北畠親房の吉野御事書案
源頼朝の三河守範頼に答ふる書
島津忠の垣人におくる書
德川家康の二代將軍の方への教誨文
俊寛僧都女の父の鬼界島にあるにおくる文、
大高源吾の母におくる書
小野菊女の夫釆女正に遣す文、

の三十七頁の附録を添へたり斯道に志しあるもの一本を坐側におきて摸範となさむ益を得ること大なり

日本一の大新聞紙

時事新報

年中無休刊

福澤先生の最近著述

女大學評論
新女大學

右四月一日より時事新報に掲載す先生が得意の快筆を揮ふて從來我國女道の經典として認められたる貝原翁女大學の非理不法なるを論破し別に今日の社會に處すべき新日本の女道を説示したるものにして男女を問はず一讀を要す

新報定價　(前金)一部貳錢五厘、一ヶ月五拾錢、三ヶ月壹圓四拾五錢、六ヶ月貳圓八拾五錢、郵送の分郵税一ヶ月十五錢、

發行所　東京京橋區南鍋町二丁目十二番地　電話(編輯用新橋一四九番　事務用及長距離用新橋三二七番)　**時事新報社**

出張所　大阪北區堂島濱通一丁目四十番屋敷　電話(東四九二番　長距離用)　**同出張所**

◉全國各地に賣捌店あり

伯爵佐野常民君題字　子爵松平乘承君序文

子爵品川彌二郎君題字　華族女學校幹事淺岡一君序文

藤井玄溟著

明治の女傑 慈善の泰斗 瓜生岩 完

瓜生岩女肖像入

定價金貳拾錢郵稅四錢●郵劵代用一割增

我邦古來堅操烈節を以て其名傳はりし婦人鮮からす然れとも未世道の爲め郷國の爲め其身を犧牲に供せしもの有るを聞かす思はさりき聖代に方り福島縣下に稀有の女傑出てんとは請ふ天下の人刮目一番以て斯の編を見よ其の畢生七十年の間爲す所仁ならさるなし言ふ所慈ならさるなし是を以て暴漢至れは暴漢屈し嬰兒慕ひ媼翁服し上は能く九重の叡感を忝うするに至る是れ畢竟至誠内に充ち德風外に溢るゝに非すんは誰か斯の如くならん嗚呼道義地を拂ひ利慾交々競ふ今の時一たひ之を繙かは必すや懦心振ふへし私心掃ふへし多涙多血の志士淑女何そ其偉蹟を尋ね以て聖代慈善の泰斗たる斯の女傑に接せさる

發行所　東京々橋區築地二丁目廿一番地　日本赤十字發行所

歌文專門惟一雜誌

古ゝ路乃華

第二巻第三號目次（三月十一日發行）

定價 一冊金十錢●六冊前金五十五錢●十二冊前金一圓●郵稅一冊に付一錢●郵券代用一割增●爲替は東京局宛とす

心の華發兌元 東京市日本橋區本石町一丁目 鶯蛙吟社

孝明天皇御遺德

先帝御製御歌挿入　全壹册　●實價廿五錢郵稅四錢●

恭く按するに先帝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尙湮晦に屬し**聖德**未だ外に露れず是頗る慽むべしと爲す此書は宸翰秘書及先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷**談に依り以て汎く**逸聞事蹟**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず今試みに本書の一班を示せむ左の如し

御一代の章を掲げ編年体を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し

聰明の章に於て先皇の英明絶倫なるを概説し

夙成の章は御幼時の御言行を示し

慷慨の上編は醜夷掃攘の事其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し

孤憤の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す

撫御は識見卓出の實際を明らかにし

豁達は言路洞開の聖德を輝かし

忍耐は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し

仁愛は惻隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす

前數章に配置する能はざりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て**先帝の聖德を頌し奉る**

國民たるものゝ必讀すべき良書なり

東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八）

行所　國光社

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事　○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事　○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし　若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價		廣告料
一册	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六册前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二册前金(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十二年三月廿五日印刷
同　年三月廿六日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞
印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄
發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　(電話番號新橋八八)　國光社